

ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著

『ドイツ昔話集』(一八五七) 試訳(その六)

鈴木 満 訳・注・解題

お断り

編著者ルートヴィヒ・ベヒシュタインに関しては、鈴木満訳・注・解題「ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ昔話集』(一八五七) 試訳(その一)」(『人文学会雑誌』第四〇巻第四号、二〇〇九・三月)の「まえがき」をご参照ください。

なお、目下のところ底本としては

ヴァルター・シエルフの注とあとがき付きで、ルートヴィヒ・リヒターの一八七葉の挿絵が入った下記

Ludwig Bechstein: *Sämtliche Märchen*. Wissenschaftliche Buchgesellschaft. Darmstadt 1972.

と共に

ハンス＝イエルク・ウター<sup>(2)</sup>編の下記

Ludwig Bechstein: *Märchenbuch*. Nach der Ausgabe von 1857, textkritisch revidiert und durch Register erschlossen. Herausgegeben von Hans-Jörg Uther. Eugen Diederichs Verlag, München 1997.  
をも用いている。

これは *Ludwig Bechstein Märchen* として二巻本。第一巻が DMB (ウターは Ludwig Bechsteins Märchenbuch ≡ LMBB の略称を用いている)。ただし挿絵は一切無い。第二巻は NDMB。「世界の民話」*Die Märchen der Weltliteratur* (略称 MdW) シリーズの一つである。共に簡単ながら、古語、方言などドイツ語圏の一般読者にとって難解な語彙一覧が、収録された昔話番号別に付いている。また、シェルフ注釈テキストには稀ながら存在した誤植が、こちらでは訂正されている。また、MdWの方針に従い、全ての昔話の注中に AT番号とそのタイトル (ATの英語タイトルではなくドイツ語で) が必ず示されている。

ただし、注自体はシェルフ注釈テキストの方がずっと詳細なので、両テキストを相互に補完させるのがよろしかろう。

ちなみに訳文中の「」内、その他の部分の「」内は訳者の補足である。

#### 訳注・解題略記号凡例

A T アンティ・アールネ／ステイス・トンプソン編著『民話の語彙』 Antti Aarne/Sith Thompson: *The Types of the Folktale*. Suomalainen Tiedekatemia. Academia scientiarum Fennica. Helsinki 1964.

ATU ハンス＝イエルク・ウター著『国際的民話の語彙』 Hans-Jörg Uther: *The Types of International Folktales. A Classification and Bibliography*. 3 Vols. Academia scientiarum Fennica. Helsinki 2004. ATの増補改訂版。

- B P** ヨハンネス・ホルテ／ゲオルク・ホリーフカ編著『KHM注釈』 Herausgegeben von Johannes Bolte / Georg Polivka: *Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm*. 5 Bde. Georg Olms Verlagsbuchhandlung, Hildesheim 1963.
- D M B** ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ昔話集』<sup>ドイツ語</sup> Ludwig Bechstein: *Deutsches Märchenbuch* (1857)。  
\*この略称はヴァルター・シエルフに倣ったもの。ハンスライエルク・ウターがM d Wシリーズの中の関係解説で用いている略称は前述の通りL D M Bである。
- D S** グリム兄弟編著『ドイツ伝説集』 Brüder Grimm: *Deutsche Sagen*. 第一巻(一八一六)。第二巻(一八一八)。
- E M** クルト・ランケ創始／ロルフ・ヴィルヘルム・ブレーネーニツ編『昔話百科事典』 Begründet von Kurt Ranke. Herausgegeben von Rolf Wilhelm Brednich zusammen mit Hermann Bausinger: *Enzyklopädie des Märchens: Handwörterbuch zur historischen und vergleichenden Erzählforschung*. Walter de Gruyter, Berlin [ua.] 1977.
- H d A** ハンス・ズビートルニシュトロイブリ編『ドイツ俗信事典』 Herausgegeben von Hanns Bächtold-Sträubli: *Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens*. 10 Bde. Walter de Gruyter, Berlin / New York 1987.
- H d M** 『ドイツ昔話便覧』 *Handbuch des deutschen Märchens*. 12のち11巻のみが一九四〇年までに刊行された。E Mの前身。
- K H M** グリム兄弟編著『子どもと家庭のための昔話集』 *Kinder und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm*. 初版第一部(一八一二)・第二部(一八一五)。決定(第七)版(一八五七)。
- M d W** 『世界の民話』 *Die Märchen der Weltliteratur*. Begründet von Friedrich von der Leyen. Herausgegeben von Kurt Schier und Felix Karlinger. Eugen Diederichs Verlag, Düsseldorf-Köln.
- N D M B** ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『新ドイツ昔話集』 Ludwig Bechstein: *Neues deutsches Märchenbuch* (1856).
- V d D** ヨーハン・カール・アウグスト・ムゼーウス著『ドイツ人の民話』(一七八二―一八六) Johann Karl August Müslius: *Volksmärchen der Deutschen*. 5 Teile.

なお、『ドイツ昔話集』(一八五七) 試訳(その二) (『人文学会雑誌』第四十巻第四号。平成二一・四月)では訳・解題の基準としては左のように記した。

できるだけ十九世紀半ばのドイツ語原文の雰囲気伝える日本語（従ってこれは古風なものならざるをえなかった）を心がけ、物語の背景を成す中・近世ドイツ語圏の文化的・社会的状況理解の一助となるよう詳細な訳注を附し、簡単な解題〔本来は「解題略記号凡例」にあるように、多くの参考文献を記すはずだったが、紙数を考慮して最低限度に留める。ただし、いずれ充足するつもりなので、凡例はこのままにしておく〕を添え、更にL・リヒターの挿絵も紙面の許す限り掲載し、今後何回かに分けて発表する。ただし、KHMとは筋が一致するものは原則として番号とタイトルだけを掲げるに留める（ベヒシュタイン一流のおもしろさが顕著な場合は訳出）。

幸い編集委員会のご承諾を得て、L・リヒターの挿絵は全て掲載できた。この最後の訳・注・解題でもしかりである。そこで、これまで訳出しなかったものもここで改めて訳の対象とする。KHMと類似していても、あるいはほとんど同一であっても、DMB八「ヘンゼルとグレーテル」のように、KHM一五とは異なり、子どもたちに対する母親の行動が必ずしも否定的（＝悪）ではない編集法など、ベヒシュタインの手法を考慮することができよう。その他の物語でもKHMの類話との対比を楽しんで戴ければ幸い。

## 七五 鳥のホールゴットと鳥のモーザム

とある湖だが、幾筋もの気持ちの良い小川が流れ込んでいて、魚がわんさかおり、周り一帯は寂しい地方だった。ここへは人間も来なかったし、蒼鷺あおさぎと(3)かその他魚を捕食する鳥たちが海から飛来することもなかった。この湖を発見したのは一羽の年配の鳥で、名はホールゴット、種族は鶺鴒みどりこと(4)。この快適な土地柄、湖を囲む穏やかな静けさ、そして獲物の豊富さは心に叶かなった。そこで心中思うには「どうだろう、ここへ女房と家族を連れてきちゃあ。なにしろここならわしらに必要なものは何もかもたっぷりあるし、わしに敵対するやつはいない。子どもたちは、わしら夫婦が死んだあかつきには、ここいらの土地を素晴らしい遺産として受け継ぎたがるだろうて」。さて、ホールゴットには妻がいて、家の巢かえの中で丁度孵かえりかけている卵の上になうずくまっていた。この奥さん、お気に入りの男友だちがあり、これも鳥だったが、名はモーザムといった。彼女はこのお友だちが好きでたまらなかったので、彼が傍にいなければ、飲むものも食べるものも味気なかったし、彼抜きでの楽しみ事とか気晴らしなんて考えられないという始末。

さて夫から、かのすてきな地方に移り住む、という考えと決心を打ち明けられ、友だちのモーザムにそのことを話してはならない、と堅く禁じられると、これが奥さんには途方もなく辛かったので、どうすれば夫に感づかれずにその計画をお友だちに洩らせるか、策謀を思い巡らした。そこでこんなことを旦那だんな様に言った。「あ



のうね、あたしの大事なホールゴット、もうすぐあたしたちの子どもたちが孵るでしょ。それであるお薬のことを教えてもらったの。子どもたちが卵から這い出す時これを使うと、翼が強くなるし、丈夫に育つんです。その上子どもたちの生涯、このお薬は災難に遭わないうよう守ってくれます。あたし、これからこのお薬を取りに行きたいの。あなたが許してくださいるならね。それでかまわないっておっしゃるならだけど。

「そりゃどんな類の秘薬かね」とホールゴット。妻の返辞「ある湖にいるお魚なの。鳥が真ん中にあるんですけど。その湖のことはだれも知らないの。あたしとお薬のことをあたしに教えてくれたひと以外は。で、どうかお願いなんだけど、あたしの代わりに卵の上に坐ってくださいさらない。そうすれば、あたし、その間にそのお魚を一匹か二匹獲って来ます。それから、あなたがあたしたちに選んでくださった新しい棲処へ子どもたちを連れて行きましょうねえ」。

これを聞いた夫が妻に告げるには「分別のある者に相応しいことじゃないな。そんなよそこの医者か勧めることを何でも試すなんては。なにしろ、手に入れるなんてできっこない品を勧める手合いが少なくないからなあ。獅子の脂だとか毒蛇の毒だとかが病人の役に立つものかな。そんな物を手に入れるために獅子を殪したり、毒蛇たちを巢穴に探しに出掛けたりして、我と我が身が死ぬ危険を冒せ、というのかね。どこの医者の勧めなんかを真に受けて。止めるがいい、おお、妻よ、おまえの愚かしいもくろみはな。ふたりで例のところ引越そう。わしらの子どもたちはここに置いてのう。あそこではいろいろな種類の魚が見つかるよ。もしかしたらその効き目のあるとかいう魚もな。そうしたら、そのことはだれも知らなくてことになる。わしらは別として。気遣わしい、危険きわるまる場所で薬を探そうとすると、あの年取った猿の身に起こったようなことに出会いかも知れん」。――「そのお猿さんの身に何が起こりましたの」と鳥の奥さんが訊いた。すると鳥のホールゴットはこんな話を物語った。

解題

ベヒシュタインが素材を得たのは、DMB五六「鼠ザンパールの身の上話」、DMB七二「恩を忘れない動物たち」のそれと同一。すなわち、『古の賢者たちの喩し、金言、その他』*Der alten Weisen Exempel, Sprüche, etc.* (フランクフルト・アム・マイン、一五九二)なる書籍、つまり古代インドの教訓寓話集『パンチャタントラ』の翻訳である。詳しくはDMB五六の解題参照。

AT一六〇「恩を忘れない動物たち」恩知らずの人間「Grateful Animals: Ungrateful Man.

原題 *Vogel Horgott und Vogel Mosam.*

七六 二匹の猿の話



「ある年取った猿がある実り豊かな土地に棲んでいた。ここには木木や果物、水や草地が有り余るほどであった。猿はこうやってただもう気楽な生活を送って来たが、老齢になると疥癬を患い、それにひどく苦しめられ、痩せかけて弱弱しくなったので、もはや食べ物を手に入れることができなくなった。そこへやって来た別の猿が、びつくりして訊ねた。『おやまあ、こりやどうしたこと。どう見ても、あんた、病気で衰弱してるようだが』——『ああ』

と年取った猿は溜め息をついた。『どう考えてもこりや神様のご意志だて。それから逃れることはだれにもできん』。相手はこう言った。『おいらはこんな友だちを知ってる。同じような長患いをしてね、黒い毒蛇の頭以外にや治す薬がなかった。これを食べたら恢復したのさ。あんたもそうしたらいい』。——年取った猿が応えて『そんな毒蛇の頭なんぞだれがわしにくれるのかね。わしはこんなに弱つるので、木から果物一つ腕いで来ることもろくにできんのだよ』。相手の返答はこうだった。『二日前のことだけど、おいらはある岩の穴の外に人間の男が立つてるのを見た。この人間は穴の中にある黒い毒蛇を待ち伏せして、舌を引っこ抜こうとしたんだね。それが入用だったんで。そこでおいら、あんたを運んで行ってあげる。人間が毒蛇を殺してたら、あんた、その頭を取って、喰うがいい』。——年取った猿が言うよう『わしやあ衰えとって病氣じや。健やかになって力を取り戻したら、おぬしがしてくれたことにぜひお礼をするでな』。そ



こでもう一匹の猿は年寄り猿をその岩穴に連れて行った。その中に一頭の龍が棲すんでいるのを知っていたのだ。穴の外には人間のみたいな大きな足跡が幾つもあった。年取った猿は、これはその人間がつけた足跡だ、毒蛇を殺したのだな、と思い、中へ這い込んで、頭を探した。すると龍がさつと襲い掛かり、絞め殺して、喰くってしまった。若い猿はいえ、仲間をうまうまと喰そし、騙だまらかして、すてきな果樹の数を独り占めできるようになったのを嬉しがった。

奥さんにこう語り終わった鳥のホールゴットは更にこうも付け加えた。「わしはこんな話をするのはこれに含まれている教訓のためだ。分別のある者は、愚かしく、またいかかわしい勧めを真に受けておのが命を賭けるべきではない、というな。けれども奥さんは言った。「おっしゃることはよく分かりました。でも、この場合は全く別ですわ。だって、あたしの申すお魚は危ないことなんぞしないで獲とって来られるんです。そして子どもたちにとでも役に立つでしょう」。

鳥のホールゴットは、道理に叶かなった説得なのに女房には通じなかったわい、と悟って讓歩した。「どうしても気になるなら、その魚を獲とっておいで。だがな、この秘密ももう一つの秘密もだれにも打ち明けないよう注意するんだよ。なぜなら賢者たちはこう教えている。分別ある行いはなべて頌ほむべきかな。されど、何人なんびとも見出さざるようおのが秘密を埋める者こそ、この上なき分別を示すなれ、とな」。そこですぐさま奥さんは気に入りの男友だちモーザムの許もとに飛んで行き、夫が考えていることを逐一しゃべり、ある気持ちの良い土地に引越したがっているの、そしてそこでは動物も人間も怖がる必要はないの、と告げた。それからいわく「ねえ、あなた、あなたもそこへ行けるような工夫を思いつかない。そりゃうちのひとは物識りだし、あんな決心をしてるけど。だって、あなた、どんな良いことがあったって、あなたがいなけりゃ楽しくないもの」。鳥のモーザムはそれに対してこう言っ

た。「どうしてぼくはきみのご亭主の許しが必要ならばそこに滞在できないのかな。ぼくや他の者をいよいよする力をだれがご亭主の手に渡したというのだろう。ぼくもそこへ引き移るのをだれがぼくに禁じるのだ。ぼくは即刻そこへ飛んで行って、巢を作る。そんなに申し分のない場所ならな。そしてご亭主がやって来て、ぼくを追い払おうとしたら、ぼくは巢をしっかりと守り抜くことができるし、またご亭主にこうも言おう。あんたもあんたの先祖もここに定住していなかったのだから、ぼくや他の者よりもこの土地に権利があるわけではない、とね」。奥さんの返辞「あなたの言うことは間違っちゃいないわ。でもね、あなたがその土地にいてくれるにしても、あたしたち皆の間柄が平和で睦まじいってことが大切だわ。あなたがうちのひとの意志に逆らってあちらへ行ったら、あたしたち悪い評判を立てられるのを覚悟しなくちゃね。そしてあたしたちの仲は悲しい結末になっちゃう。あたしは、こうすればいい、と思う。あなたはうちのひとのどこに行くの。あたしたちが相談したことを悟られないようにしてね。そうしてうちのひとにこう言うの（あたしが帰る前によ）。例のどつてもすきな土地をあなたが見つけたって。そしてそこへ移住しよう、と思いついたって。そうするとうちのひとはあなたにこう答えるでしょ。自分はどううにその場所を見つけた、そしてそこへ引越そうと決心した、とね。そしてあなたはこう言うの。『おお、友のホールゴットよ、それではあなたが一番乗り。それにあの場所はわたしなどよりあなたにこそ相応しい。けれど、お願いだ。あなたの近くにこのわたしを住まわせてください。そうすれば、わたしはその地であなたにとってひとりの真実の友にして仲間となりましょう』とね」。

鳥のモーザムはこの入れ知恵に従い、大急ぎで鳥のホールゴットの許に飛んで行き、一方奥さんの方は行き当たりばつたりの池に出掛けて魚を二匹捕まえ、それが靈駿あらかな奇蹟の魚であるかのように装い、巢に持ち帰った。さて、鳥のホールゴットは、モーザムが仲間になることがそちらのためだ、との申し出を受け入れた。でも奥

さんは裏切りを気づかれないように、自分のお友だちに旦那様が譲歩したのが気に入らない、といったふりをして、こう言ったもの。「だってあの土地は、あたしたち、自分たちだけのために選んだんでしょ。あたし、心配です。鳥のモーザムがあたしたちと一緒に移ったら、あのひとのたくさんのお友だちも随ついて来るんじゃないかって。そしたら結局はあちらの多人数の前に頭を下げなきゃならなくなりますわね」。これに夫は次のように答えた。「おまえの言うことはもつともだ。だが、わしはモーザムを信じている。それに、あれの助力があれば、うるさいやつらから身を守ることができるところでは、と思う。だから、ああいう友がわしらの近くに住むのは良いことかも知れぬ。だれしも自分の体力、自分の能力をあまり過信するものではない。なるほど、わしらは鳥たちの中では最強だが、助けというものはな、弱い者が強い者に打ち勝つのに役立つことがある。猫たちがかの狼に打ち勝つたようにな」。

「どうしてそうなったのです」とホールゴットの奥さんが訊たずねると、ホールゴットはこんな話をして聞かせた。

### 解題

言うまでもなく、猿の物語は杵物語の典型。次もしかり。

A T 該当無し。

原題 Von zwei Affen.

## 七七 狼と野猫たちの話

「海辺に狼の一群がいた。その中の一匹が特に血に渴いていて、ある時、仲間内で特別名を挙げよう、と思ひ立ち、夥しい数の、さまざま種類の動物が棲息しているある山地に、狩をしようとして入り込んだ。ところでこの山地は柵で囲まれており、その動物たちは他の動物たちから安全で、お互い仲睦まじく暮らしていた。その中には野猫といふか猫といふか、そういう一群もいて、上に王を戴いていた。さて例の狼は計略を用いて柵を通り抜け、ひっそり身を隠し、毎日一匹の猫を捕らえては、これを喰った。猫たちはこれにひどく悩み、善後策を講じるため王の計に集まった。その内にとりわけ三匹の賢い、分別豊かな牡猫がいた。王はこの猫たちを相談役に任命、まず一番目の猫に狼の害にどう対抗するか、その考えを問うた。一番目の牡猫いわく『私めはこの巨大な怪物にどう対抗したものやら神のお慈悲にお頼りする以外一向知恵が浮かびませぬ。なにしろどうして狼に抗えましよう』。王が二番目の牡猫に訊くと、これはこう答えた。『やつがれは、我ら一同もろともにこの地を離れ、他のものと平穏な地を探すよう、ご忠言つかまつります。ここでは我ら多大な悲哀と肉體および生命の危険の裡に過ごさねばなりませんので』。が、三番目の牡猫は王の諮問にこう発言した。『それがしがお勧めいたすのは、この地に留まり、



かの狼ごときのために流浪の旅に出ないことであります。併せて、かくすればかやつを殲せるといふ考えもござい  
ますが。——『それを申してみよ』と王が命じると、牡猫は言葉が続けた。『我らが注意いたさねばなりませんの  
は、狼めが新たな獲物を手に入れた折、いずこへやつめがそれを運び、喰らい尽くすかでございます。しかる時、お  
お、王よ、陛下とそれがし、および我らの最も強き者どもが、我らもやつめを喰らわんかのごとくやつめ  
に近づきます。さすればやつめはおのが身は安全と思ひ、我らのことはいささかも心に懸けませんまい。その時、そ  
れがしがやつめに跳び掛かり、両の目の玉を抉り出します。そうしましたら、他の者たちが皆やつめに襲い掛か  
らねばなりません。そういったせばやつめはもはや我らからその身を防ぐことはできません。その際我らの内のだれ  
かが命を失うか手傷を負うかしよう、と思ひ惑つてはなりません。と申しますのは、そうすることによつて我ら  
は自分自身と我らの子どもたちを敵から救うことができるからでございます。して賢者は父祖から受け継いだものに怯  
じ恐れて別れを告げはいたしません。いな、賢者は肉体と生命に危険を冒してこれを守り抜きます。』この進言  
を王は善しとした。それからこうなつた。狼がうまく獲物を捕らえ、それをとある巖の上へと引きずつて行くと、  
猫たちはかの大胆不敵な賢い猫が提案したことを遣り遂げたのだ。そして狼は猫たちの鉤爪に引き裂かれ、無数の  
咬み傷を負つて、おめおめと命を終わらざるを得なかつた。

「こうした譬え話を」と鳥のホルゴットは言葉が続けた。「おまえに語るのはな、愛しい妻よ、信実の友情は大  
いに助けになるものだということをおまえに分かつて欲しいからだ。それゆえわしは鳥のモーザムをわしの友人、  
仲間として喜んで一緒に連れて行く」。奥さんはこれを聞くと、自分の企みが疑われずに済み、望み通りの結果に  
なつたので、内心歓呼した。こうして三羽の鳥たちはその気持ちの良い土地目指して飛び立った。そうこうするう  
ち卵から孵つていた子どもたちは古い巢に残し、かの地で別別に巢を営み、豊かな食餌に恵まれて暫くの間和やか

に睦まじく暮らした。そして年を取り弱くなった鳥のホールゴットとその妻は、鳥のモーザムが大いにお気に入りだった。けれど、すぐに分かるのだが、あちらはそれほどではなかった。

からからに渴いた炎暑の時期が到来、万物が枯死し、湖も干上がり、魚も死んだ。すると鳥のモーザムは心中こう呟いた。「信実の仲間というのはけっこうなことだし、友人同士の助け合いは褒めものだ。だが、だれしも一番かわいいのは自分自身。自分自身に何の役にも立たないようなやつが、どうして他の者の役に立てよう。先行きまづくなるのを見通さず避けないようなやつは、まずいことになった時、それから逃げられはしない。この鳥同士の仲間付き合いがまずいことになり、ぶつ壊れることはおれには今から目に見えてる。一日一日食い物が少なくなっているからなあ。とどのつまりあのふたりはおれを追っ払うだろう。が、おれはここが気に入っているし、あの連中が仲間でなくても独りでここで暮らして行ける。となると、おれがあいつらを出し抜いて、厄介払いしちまう方がどうやら良さそうだ。それもまず亭主をな。なにしろあの女房は心底おれを信用してるし、言うことを聞かせるのはあつちより遙かに簡単だから。それどころかあれは亭主を殺すのに手を貸すかも知れん」。

こうした邪であさましい考えを抱いて鳥のモーザムは奥さんのところに飛んで行き、悲しげな打ち拉がれた様子で近づいた。相手が「どうしてそんな悲しそうなお顔をしているの」と訊ねると、こう答えたもの。「ぼくが悲しんでいるのはこのひどいご時勢でね。そして饑餓という魔物が襲いかかって来るのを目の当たりにして恐れ戦いているのだよ。そしてこの心が最も憂えているのはきみのこと。きみに役立ちそうなことを一つ知っている。ぼくの忠告がきみに愚かしく思えなければの話だが——「それはなあに」と奥さん。モーザムが言うよう「友情の絆は血縁の絆より値打ちがある。なにしろ血縁の絆は毒よりも有害なことがよくあるから。諺にいわく。兄弟が一人少なきや、敵もそれだけ少ないもの、とね。それから、親戚いなけりや、嫉まれもせぬ、とか。ぼくは、きみに役立つ

つことをせひ勧めたいのだ、愛しいお友だち。遣り遂げるのがきみには辛く思えるだろうが。ぼくが打ち明けて言うことをきみは真つ当ではないと思うだろう。だがね、このぼくの目には取るに足らぬように見える」。そこで奥さん「あなたのお話を聞くときどききしちゃう。あなたが何を考へてるのか分らないし、あなたがあたしに良くないことを勧めるとは思わないけど。でもね、あなたのために死ぬのなんてあたしには簡単なことよ。だから、言つてちょうだい。だって、信実まことのお友だちのために命を捧げないなんてひと、とつてもお莫迦はかさんよ。だって、お友だちっていつだって兄弟や子どもたちなんかにより役に立ってくれるんですもの」。モーザムはここぞとばかり悪企みを語り始めた。「こうしたらいいのではないか、と思うのだよ。きみがあんなに骨折つて面倒みなくっちゃならない、年取つて体の弱いきみの旦那から解放されるようにやってみたらどうか。そうすりゃきみには幸福幸運が到来だ。きみと一緒にぼくにもね。こんなことをなぜ勧めるのかその理由は訊かないでおくれ。これをきみがやつてのけるまでは。だって、良い理由がなければ、こういうことをきみに勧めるわけはないだろう。それは信じてね。ぼくはきみにきつともつとすてきな、もつと若い夫を見つけてあげる。いつまでも君を愛し守る夫を。それにきみがぼくの勧め通りにしなければ、けつこうな忠告をないがしろにしたあの鼠ねずみみたいなことになるよ」。

そこで鳥の奥さんが「その鼠さんの身に何が起こつたの」と訊ねると、モーザムはこんな話をした。

解題

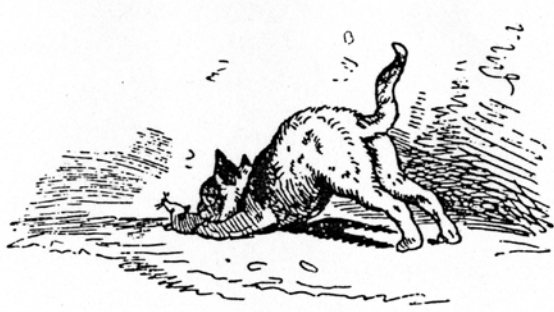
A T 該当無し。

原題 *Von den Wolf und den Mausmunden.*

七八 猫と鼠ねずみ

「昔むかし、人間の男がいた。鼠たちがその食料貯蔵室にすこぶる害を働いたので、鼠たちを追い払い、退治させようと、猫を一匹飼った。さて、鼠たちの中にまことに体の大きいのがおり、これは他のより力も強かった。事態を知るとこの鼠は安全な場所からこの猫と話を交わす折を窺い、こう言った。『あなたの主人が、私と仲間を追い払い、殺すように、あなたに指図いたしたことは承知しております。さて、あなたとお近づきになれて嬉しゅうございます。あなたのご愛顧を忝くし、あなたと平和にお付き合いいたしとう存じます』。猫いわく『あなたとお知り合いになれて殊の外喜ばしゅうございます。私ごときにあなたとご友誼を結ぶ譽れを与えてくださるなら、まことにもってありがたいこと。あなたとのご交際はこの上なく願わしくもあります。でも私、自分が守れないことをあなたにお約束するわけにはまいりません。ねえ、鼠様、私の主人は私をこの家の番人に任じましたでしょ。あなたとあなたの一族がこれ以上主人に害を与えないように。もし私があなたに手出しを控えましたら、ろくでもない猫め、ということになりますわ。ですから、私の主人に害を加えるのをお止めになるか、この家を出て、他に気持ちの良い棲処をお探しになるか、どちらかになすってくださいな。さもなければ、ひどい目に遭つても私のせいにしないこと』。鼠『謹んでお願いいたしましたように、また、私のお願いと申すのはこれだけなのですが、どうか私の勝手なふるまいを大目に見てくださいまし。そしてご友誼を賜りとう存じます』。『ええ、ええ』と猫。『あなたは私にとって大事なかた。でもね、あなたへの友情と、お仲間たちが私の主人に加える損害について私が必要ならならぬことと、どうやって私、両立させたいのかしら。あなたがたを生かしておいたら、主人は私を殺します。それも当然のこと。ですからね、こうしましょ。私、あなたに三日の猶与をあげますわ。その間に





あなたは別の住まいに移ればいい。『この住まいから離れるのはとっても難しいし、とっても厭。私、あなたに近寄らないよう用心して、好きだけここにずっとおります。猫は自分の言葉をきちんと守り、三日の間鼠に手出しを差し控えた。そこで鼠はしごく安心し切つて、家に猫がいるような進退は全くもうしなかつた。三日経つた時、鼠はまたまた何も気に懸けずに巣穴から走り出た。すると猫は食料貯蔵室の隅で待ち伏せし、鼠に跳び掛かつて、捉え、べろりと食べてしまった』。

「この譬え話で」と鳥のモーザムは言葉を続けた。「きみに分かるだろうけど、信実の友の忠告をないがしろにするのは分別のある者に相応しくない。それにこんな諺がある。友の忠告は苦い薬みたいなことがよくある。でも効き目があつて、長患いを追つ払う、とね」。

鳥の奥さんが長いこと、どうしたらいいか、それから、悪業の証拠が己が身を指し示さないように遣り遂げるにはどうすべきか、思い惑つていると、偽りの友はこう知恵を付けた。漁師が大きな魚を誘き寄せるために鋭い釣り鉤を差し込んだ魚を一匹手に入れ、それを旦那が食べる他の魚の中に混ぜておくのだ、そうすれば旦那はそれを咽に詰まらせて死んでしまふだろう、と。妻はそうした。夫はなにぶん年取つていたし、自分ではもう魚を獲ることはなかつたし、妻に空腹で苦しむがままにされたことがよくあつたので、その魚を釣り鉤もろともがつがつと呑み込み、そのため窒息してしまつた。これが起こつた時、ホールゴットはかくも惨めに自分を死の手に委ねた者たちを呪つた。さてこれが終わると、鳥の

モーザムは僅かな間この不実な妻と一緒に暮らしたが、食料がますますめつたに手に入らなくなると、女がひどく煩わしくなり始め、殺そうと襲い掛かった。丁度その時女の息子たちがそこへ飛んで来た。息子たちは愛する両親を訪ねようとやって来たのだった。そして鳥のモーザムを押さえつけた。彼らの母親はもう瀕死だったが、子どもたちになにもかも告白し、身罷みまがった。そこで息子たちは尖とがった嘴くちばしで鳥のモーザムの両眼をつつき出し、悲惨なてい  
たらくで飢え死にするに任せ、彼によって両親に加えられた二重のおぞましい犯行に復讐ふくしゅうした。

解題

A T 111 「猫と鼠の話し合ふ」 The Cat and the Mouse Converse.

原題 *Die Katze und die Maus.*

七九 山鶉やまうすらう

昔金持ちのユダヤ人がある王国を旅していた。金子きんずやら品物やらで莫大な財宝を身に着けていた。さて、ある大きな森を抜けて行かねばならなくなったので、所持金のために森の中で命を奪われるに違いない、と恐ろしくなり、その国の王の許もとに赴き、贈り物を差し出して、確かな男を一人、その森と王国を抜けるまで警護役として付けてくれるよう懇請した。そこで王は自分の酌人しやくじんに、ユダヤ人を護衛するよう命じた。酌人は仰せ畏み、ユダヤ人に警護役として同伴した。

さてこの二人が森の奥に入ってしまうと、酌人はユダヤ人の財宝がなんとも欲しくて堪らなくなくなり、途中でつと立ち止まると、「前を行け」と言った。ユダヤ人は仰天し、酌人の邪な意図を察し、前に行こうとしなかった。酌人はすぐさま携えていた剣を鞘さやから抜き放ち、「ユダヤ人、きさまはここでわしの手に掛かって死なねばならぬ」と怒鳴った。――「おお、酌人さん、そんなことほししないでおくれ」とユダヤ人は叫んだ。「わたしを殺害したら曝さらかれぬままではいけないよ。隠れた殺人者が人間のだれにも見られずに犯されようとも、この空の下を飛んでいる鳥たちが明らかにするだろう」。

ユダヤ人がこう言っている時、丁度一羽の山鶉が森の中で舞い上がり、二人の頭上を飛び越した。酌人ははからからとせせら笑って、こう吐き捨てた。「あの山鶉がきつと王に告げるだろうよ、おれがきさまをここで殺した、とな」。



こうして酌人はユダヤ人を森の中で殺害し、相手が身に着けていた金子と財宝を残らず奪い、穴を掘ってひそかに屍骸を埋め込んでしまい、再び王宮に引返した。

酌人の不実な行いから丸一年が過ぎた頃、王に数羽の山鶉が献上されたことがあった。酌人はこれを料理番に渡し、しかるべく調理させ、食膳に運んだ。これらの山鶉を王の前の食卓に据えた時、酌人は自分が殺したユダヤ人と、鳥たちについてのその最後の言葉を思い起こし、つい声に出して笑ってしまった。王はこれを見て、何がおかしいのか、と訊ねた。けれども酌人は、自分が笑った理由を偽って王に答えた。

それから四週間以上経った時、王が役人たちと召使い一同に宴会を開いてやったことがあった。この席にはかの酌人も出ており、王自身大いにご満悦で御気色麗しく、冗談を飛ばし、陽気だった。そして酒や高価な飲み物を多量に運ばせたので、召使いの何人かは酔っ払ってしまった。こんな具合にだれもが浮かれていると、王は酌人にこう言った。「酌人よ、そなたは愛いやつ、さあ、余に腹藏のない本当のことを話してくれい。先日何がおかしくてあのように笑ったのかな。そちが余に山鶉を給仕した折だ。なにしろそちはあの時余に真実を告げなんだからのユダヤ人が、この空の下を飛んでいる鳥たちが自分がひそかに殺されたことを明らかにするだろう、などと叫びました時、丁度一羽の山鶉が舞い上がりましてな、やつがれめ、それを思い起こして、笑わずにはいられなかつたのでございます」。

王はこの言葉を聞いても黙ったままで、何一つ気振りにも見せず、上機嫌に水を差されはしなかつたようによそおった。しかし次の日、王は腹心の相談役たちとの会議に赴き、こう語った。「かような者はいかなる罪に値いたさうぞ。ある人間を王国通過のみぎり安全に護衛せよ、と王の名において命ぜられ、その人間を己が手で殺害

し、強盗を働いた者は」。相談役たちはこれに対し異口同音にこう答えた。「さような者は絞首台が相当でございます」。それから王は公開の裁判を開き、あの酌人を告発する公訴人を任命した。酌人は何人もの証人の前で酔って自らの犯行を物語っていたから、法廷でもそれを認めざるを得ず、絞首刑を宣告された。こうして隠れた殺人は山鶉によつてあからさまに衆人に知らされたのだ。

### 解題

出典に関するメモ。ライプツィヒ大学図書館蔵古ドイツ語紙手稿に基づく。M・ハウプト／H・ホフマン出版『古ドイツ草稿』*Altdenische Blätter* (一八三六)にも、とある。

原型についての詳細はB P二巻五三二―五三三ページを参照。これによればベヒシュタインがDMBで出典として再三依拠しているラスベルク男爵ヨーゼフ(一七七〇―一八五五)編『歌の広間―古きドイツの詩集成』*Joseph Freiherr v. Labberg: Liedersaal, das ist Sammlung altdenischer Gedichte*, 4 Bde., 1820-25, 二巻六〇―ページに「復讐する山鶉たち」*Die rächenden Rebhühner*がある(その一)。

KHM一―五「清い太陽が明るみに出す」*Die klare Sonne bringt an den Tag*に相当。

AT九六〇「イビュロスの鶴」*The Cranes of Ibycus*.

原題 *Das Rebhuhn*.

## 八〇 ぞつとする

昔むかし二人の兄弟があった。内一人、年上の方は、逆さまに落っこちた「ぼうつとしてゐる」ってわけじゃなく、その反対で、おつそろしく利口で抜け目が無かった。だけれども年下の方となると、よく言うように、頭の前に板つ切れがぶらさがっていた<sup>(10)</sup>。「お莫迦さんだった」。父親にはこれが大層心配の種だったけど、ご当人には何の苦でもない。なにせ、お莫迦さんてのはそういうもんだが、のほほんと無邪気に日を送つとつたでな。多分、それと知つとつたわけでもあるまいが、こんな諺が頭にあつたのかも。そら、ヘンスヒエン、習い事をばし過ぎるな、さもなきや仕事をしこたまさせられる、とな。父親は何かを仕上げようと思えば、毎度年上の方、マッテスに言い付けなければならなんだ。だって、もう片つぽのヘンスヒエンは何もかもあべこべにやつてのけたから。油の壺やら火酒の壺はぶつ壊す、あるいは長あいことすつぽかしたまんま。マッテスはそれとは反対で、何でもちゃあんとうまくやった。ただ一つだけ欠点があつた。天性恐がりでな、ぞつとしてばかりなんだ。暮れ方に教会墓地の傍を通り過ぎるたんびに、ぞつとした。幽霊話を聞かされるたんびに、ただもうぞつとして卸し金みたいな鳥肌が立つ始末。で、めそめそこう嘆くのだ。「ああ、ああ、ぞつとしちまつてしようがないよう」ってな。ところが弟の抜け作のヘンスヒエンと来た日によあ、それを聞くとげらげら笑い出すことがしよつちゆうでな、こんなことを言つたもんだ。「へへえ、どしたらぞつとできるんかね。そんな伎倆ができりやあなあ。おいら、生涯ぞつとすることああんめえ——ぞつとすること、おいら、ほんとに習いたいもんだ」。

「おまえ、どうやら人並みに何かを習いたいようだが」と父親はヘンスヒエンに小言を言った。「当たり前ならそんな潮時だろうが。おまえは図体がでかく力のあるやつになつて来たで。——だがな、この知つたかぶりめ、

ぞつとすることを習ったって、何にもなりやせん。それは伎倆わざづじゃない。そんなことじゃあ麩麩パッパにつける塩一粒だつて稼げやせんぞ。それに、一体全体どうやってぞつとすることを習えばいいのか、おまえ、知ってるちゅうのか。賭けかでもいいが、おまえは抜け過ぎてて、それもできない」。

父親と兄貴が阿呆あほうのヘンスヒエンのことを笑っている最中、近所に住んでいる教会の聖物保管係兼きよつじょう教場の師匠ししやうが訪ねて来た。そしてヘンスヒエンが嗤わらいものになっているのを耳にし、このぼうずがぞつとすることを習いたがっている、と話して聞かされた。「そんなことならわたしのところでありつぱに習うことができる」と聖物保管係は言った。「わたしの教場きやうじやうはこの村中でこれ以上ひどいのはないちゅうあばらやでな。あのあばらやがわたしの頭の上へ崩れて来て、いつかはあの先行きまことに頼もしい限りのがきどもを皆一緒くたに叩き潰つぶすだろうと、わたしは目がな一日ぞつとしとる。ヘンスヒエンをわたしのところへよこしなさい。なにしろわたしは随分な数のとんちきどもに勉強を教えるにやならん身じゃで、多分この子にもぞつとすることを伝授できようて」。父親はこの申し出を受けたので、ヘンスヒエンは聖物保管係にくつついて古ぼけたがたがたの教場に出掛けた。だがの、ヘンスヒエンはこれっぽかしもぞつとなんぞせんかった。この建物がぶつ壊れそうだなってことは、やつこさんじゃあ、村長さんや教区のお歴歴にとつとたまさしくご同様、どうでもよかつたもんでなあ。

そこで聖物保管係は、どうしたってヘンスヒエンにぞつとすることを教えてくれるはずの別の悪戯いたづらを考えた。ヘンスヒエンに晩鐘ばんしゆを鳴らすよう言い付けておいて、こっそり先回りして鐘楼に上がり込んだもんだ。ヘンスヒエンが階段を昇って来て、晩鐘を鳴らすために鐘の引き綱を握った時、階段からくぐもつた呻うめくような音が聞こえた。振り返ると、そこに大きな白いぼんやりした恰好かっこうのものがじいっと身動きもせずに突っ立たつておつた。「おめえはだれだ。何の用だ」とヘンスヒエンは訊きねた。まるつきりぞつとしないでな。返辞はない。「おめえはだれだつて



らされてて、朽ちていて、何世紀分もの埃で一杯というやつ。幽霊は階段の下に倒れて唸うなったり喘あえいだりしとったが、ヘンスヒエンは晩鐘を鳴らしに掛かり、今し方何事も起こらなかつたみたいに元気一杯鐘の引き綱を揺り動かした。それが済むとご機嫌さんで階段を下り、塔から外へ出ると、扉をびしゃりと閉めた。聖物保管係のおかみさんは、ご亭主がどこに行っちゃったものやら皆目見当が付かない。「うちのひとは一体どこにいるの」とヘンスヒエンに訊く。「だれだつて」とヘンスヒエン。「うちのひとよ」とおかみさん。「あのひとはあんたより前に塔に上がって行ったじゃない」。「そうかね」とヘンスヒエン。「するとあれがそうだったのかな。白装束の妙ちきりんなやろうが階段(15)のところに立ってて、おいらにうんともすんとも返辞しねえから、階段から突き落とした。まだあつ

訊きいてるだよ」とヘンスヒエンはもつときつ  
い声で叫んだ。返辞はない。「おめえ、口が  
ねえだか、雪だるま。もう一度訊くだが、何  
の用だ」。返辞はない。——我がヘンスヒエ  
ンはたちどころに、人形芝居のカスパ(16)が悪  
魔に跳び掛かるみたいになつたとその姿に跳び  
掛かり、こんな向こう見ずを予想もせんでい  
たその代物しろものをどしんと突き倒したので、そ  
の代物は階段を全部転げ落ちた。どんな階段  
かつちゅうと、古い村の教会堂の塔でしかお  
目に掛かれないような類の階段でな、踏み減



ちで唸ってるだ」。——「このろくでなし」とおかみさんは金切り声を上げると、ヘンスヒエンの手から鍵を引ったくり、塔へすつ飛んで行った。そこにやあ敷布にくるまった亭主が転がっていて、片足をおっぺしよっておった。さあそれから、ヘンスヒエンはどうにもまずいことになっちまった。聖物保管係のおかみさんがヘンスヒエンの父親にねじこみ、父親はかんかんになってこう怒鳴った。「やくざなやつだあ、このぼうずは。面も見たくない。さつさと出でけ。さ、金をやる。——どこへでも好きなところへ行つて、首をくくつて貰うがいい。——二度と再びわしの目の前に現れるな。きさまのせいで恥を曝して、顔に泥を塗られて、面目玉を潰したわい、この能無しめが」。

「あばよ、ヘンスヒエン」とマッテスがからかった。「ぞつとすることを習えるようにせいぜいがんばりな。ぞつとするつてな、これからは流行りものになるぞうだ。広い世間の人間はいろんなことでぞつとするから、おまえもきつとぞつとすることの分け前を頂戴できるわな」。

ヘンスヒエンは家を出た。金はあった。で、人間、金を持つてるとなると、いよいよもつてぞつとする必要はない。旅の途中ヘンスヒエンはしげしげ吠いたもんだ。「おいら、どうにかしてぞつとしたいもんだ、おいら、どうにかしてぞつとしたいもんだ」とね。こいつを聞きつけたのは後ろを歩いて一人の男。こうヘンスヒエンに言った。「あそこを見なあよ。あそこにヤ三脚台が立つてて、けつこうなお仲間連がぶら下がつとる。——丁度数は七人だ。ほら、よく言うように、絞首



台一杯だあ。<sup>(18)</sup> あそこへ行つて、七人衆の下で野宿するとええ。そうすりやおまえさん、ぞっとするつちゅうのを覚えるべえよ」。

「もしもそれがほんとなら」とヘンスヒエン。「おいら、明日の朝早く、あんたにおいらの有り金全部やるだ。あんな、おいらのところにやって来てもいいだし、でなきゃこれからおいらと一緒にずうつといればいい」。

「おまえさんと一緒に吹きっ曝しの絞首台の下にずうつといたりしたら、わしゃあとんだ道化者だて」というのが相手の返辞。「うんにゃ、威勢のええ若い衆さんや、ぞっとするつちゅうのは二人でいるより独りっきりの方がずうつと習い易いでのう。ええ夜を過ごさつしやれや。明日の朝早くにまた会いましょう」。——ヘンスヒエンは絞首台の下に坐り込み、寒かったので小さい焚き火を燃やした。この火は上の吊されている代物の方までけっこう明るく照らし出した。そして身を切るような夜風が連中の揺れている体をぶうらんか、ぶうらんかと揺り動かした。

「おやまあ、おめえら、かわいいそうなやつらだなあ」とヘンスヒエンは上を向いて声を掛けた。「凍えてるだな。ぶるぶる、がちがちいつてるでねえけ。待ちな、おいら、おめえたちを下に降ろしてやるべえ。おいらの焚き火に当たって暖まる<sup>あつた</sup>といいだ」。はしっこいヘンスヒエンは絞首台の梯子<sup>はしこ</sup>を見つけて、上に昇り、吊されている代物の綱を解き、焚き火の傍に坐らせ、火をもつとつかつかと強く、大きく燃やした。だけれどこいつらはなんともかともしょぼくれた様子で、緑がかつたの、黄色いの、惨めつたらしいの、まるきり蒼褪<sup>あおぞ</sup>めたのつてな具合で、諺に言うようになんともおぞましい<sup>(20)</sup>。そうしてぴくりつとも動きはせんかった。そのうち火が燃え広がって、死骸の体にはぶら下がっているおんぼろ衣装を焦がし始めた。「おんや」とヘンスヒエン。「おめえつちや、着てる物を燃やしてるだ。あの言い種<sup>いぐさ</sup>は全くおめえたちにぴったりだ。ほれ、やどなしゃ同じ<sup>おんな</sup>、ぼろきれ同じ<sup>おんな</sup>。待ちな——おいら、

そねえにうっかりもんのおめえらを助けてやんべえ」。こう言つて連中を一人ずつ抱き上げて、また元通りぶら下げると、外套マントにくるまり、火の傍に長長と寝そべつて眠つちまつた。こうやっているのを見つけたのは、昨日ヘンスヒエンと一緒に街道を歩いた男で、今日は、約束の金を受け取ろう、とやつて来たわけ。だけどヘンスヒエンがのうのうと眠っているのを見て、やつこさんが夜の内にぞつとすることを覚えたんじゃないかというのは随分当てが外れたし、それからヘンスヒエンが目覚まして、自分がやらかしたことを物語ると、さつさと退散することにしてこう言つた。「わつしや、今度のこつちやおまえさんの金は貰もらえねえだ。おまえさんは金輪際ぞつとすることを習やせんなあ」。

さてそれからヘンスヒエンは旅を続けたが、道道こう独り言を呟いたもんだ。「おいらがぞつとすることを習えないちゅうのは、どうにも口惜くやしいなあ。おいら、それにやあ莫迦過ぎるにちげえねえ。やれやれ、おいらどうにかしてぞつとすることが習まえりやなあ」。

同じく道中していた一人の荷馬車の御者がこれを聴きつけ、ヘンスヒエンに言うことには「やれま、おまえさん、ぞつとすることができねえのか。それじゃ、あそこの道端にある旅籠はたごに泊まりな。ま、金を持つてるならだ。あの亭主と来た日にやりちり鳥肌が立つような勘定書突きつけやがる。わしや、あの家に泊まらにやならんたびに毎度ぞくぞく寒気がするでな」。「一つやつてみるべえ」とヘンスヒエンは答え、御者に礼を言つて、その旅籠に歩いて行つた。

「何御用かね」と宿の主人が訊いた。「ぞつとすることを習まいたいだ」とヘンスヒエンは返辞した。「街道筋のひとたちが言うにや、お宅だとそれが簡単に習まえるつて。あんたはぞつとするような勘定書を出すし、つけをぞつと②するほど高くするちゅうこつた」。——見てろ、このこぞうつ子めが、と主人は考えた。ぞつとするのはどん

なことか、きさまにたつぷり思い知らせてくれるぞ、とな。そしてヘンスヒエンに向かつてこう言った。「旅の若い衆さんや、あんたは嘘つばちを聞かされたんだ。このわたしの家じゃあ決してぞっとすることは習えない。それにわたしはどこそこの飄軽な悪戯者があんたにべちやくちや吹き込んだようなもてなしをお客にすることはない。ぞっとするつてのが肝心なら、あつちのあの丘の上の古い呪われたお城へ行かつしやい。そして、王様のお姫様をお嫁に貰えるよう試すがいい。王女様のお父上はあのお城からあそこに憑いとる騒霊どもを祓つてくれる男に、王女様をやる、と約束なさつたでな。あそこじゃあぞっともするし金持ちにもなるつてこつた」。

「あんたが勧めてくれた通りにするだよ」とヘンスヒエンが言うと、宿の主人は言葉を継いだ。「まだあそこの丘の上へ行つてはいけない。まず、王様にお許しを願わなくては。それに三夜の間あそこで過ごさにならん。生きてあそこから戻つたら、お姫様があんたの嫁さんだ」。

「そいでおいらが生きてあそこから戻らなかつたら、どうなる」とヘンスヒエンが訊いたものだ。——すると主人は面と向かつて大笑いし、「あんたが目から鼻へ抜けるようなひとだつてことがよく分かるよ。まだ火薬が発明されとらんかつたら、あんたはきつと火薬を発明したこつたらうて」と返答した。

そこでヘンスヒエンは急いで王のところへ出掛け、お許しを願つて許された。王はこうも仰せになった。「それからな、お若い、そなたは三種のものを持つて行つてもよい。ただ生きとるものはだめだが」。さてヘンスヒエンは小さい頃からもう火を起こすのがとつても好きだつたし、物彫り台に向かうのも、それから時は輓轡台で遊ぶのも好きで、こういう道具の使い方も心得ていた。そこで、お城に持つて行くのにどうしても欲しいのは、上等の点火器一挺と物彫り台が一台と輓轡台が一台でございます、と答えた。「これでおいら、凍えずに済みますし」とヘンスヒエン。「それに暇潰しにもなります」。これは二つ返事でヘンスヒエンに与えられ、ヘンスヒエンは古い



お城の中の大きな煖炉だんろのある綺麗な部屋におみこしを据えた。夜になるとヘンスヒエンは赤赤と火を焚きつけたが、お蔭かげでとつてもすてきに暖あつたかくて明るくなつた。突然二匹の真つ黒けな猫が現れた。猫どもは緑の火みたいな目を光らせ、「にやあおう、にやあおう、寒いよう」と啼なき叫んだ。「あれ、寒いならよ、暖あつたまるがいいや。ほら、火があらあ」とヘンスヒエン。猫どもはそうして、それからいわく「時間が長過ぎる。三人でカードをやるう。三枚葉ドライフラットつはかポツヘン(20)をよ」。「おいらとしちやあポツヘンだな」とヘンスヒエンが言った。「おまえら、カードを持つて来たんなら」。猫どもは本当にカードを一組持つていて、それをヘンスヒエンに見せた。その時ヘンスヒエンは猫どもが黒い前脚におつそろしい鉤爪かぎめを生やしているのを見て、こう言った。「相済まんこつたが、おまえら

のおつかさんはどうにも長いことおまえらの爪を切つてやんなかつた。ちつたあ恥はずかしいと思いな。さ、おいらがおまえらをちゃんとしてやるで」。そして猫どもを引つ捉とらまえると、その前脚を轆轤台ろくろだいに挟んで締め付けた。すると咬かもうとしたので、細工刀がたなを手に取ると猫どもの頭をちよんと切り落とし、頭と胴体を城の濠ほりに投げ込んだ。また火に向き直ると、でつかい犬が一頭坐つていて、ヘンスヒエンに歯を剥むき出し、炎のような舌を腕の長さほどだらりと垂らしておつた。こやつもやっぱりヘンスヒエンには氣に喰くわなかつたので、もう一度細工刀をおつ取つて、まさしく上下の歯の間を喉のどの奥まで切り込んだ。そこで舌は下に落つち、頭の上半分は下半分とおさらばしまつた。これで静かになつたと思つたヘンスヒエンはそれをのんびり

楽しむことにした。部屋の隅に寝台があったので、それに潜り込んで、体に布団を掛けた。だがまだ眠っちまわないうちに寝台が蒸気車(30)みたいに動き始め、城中を走り回ったもんだ。階段を上がったり下ったり、幾つもの大広間や数数の部屋を抜けてな。——だがヘンスヒエンは「これはこれは、おいら、りつばな旦那衆が馬車で練つてる時みてえな気分だよ。どんどん走れ」とのたまった。——とうとう寝台は走るのにくたびれたようで、元通りヘンスヒエンの部屋に転がり込んだ。そこには火がまだ陽気に燃えていた。で、寝台はじいっと動かなくなったので、ヘンスヒエンはぐっすり寝込んで、死人のように眠った。

翌朝王が寝台の傍に立って、こう仰せられた。「ふうむ、これこそ健やかな眠りと申すものじゃ。余にもこういう眠りが授かればのう。王はかようによくは眠れぬもの。この若者がまだ存命で、野暮(いびき)までかいておるのは喜ばしい。これこれ、ヘンスヒエン」。——「これは王様、お早うございます。もうこんなに早くからお越しで」とヘンスヒエン。「よく休めたかの」と王。「ありがとうございます。王様もよくお休みななれましたか」とヘンスヒエン。「余の勘定で丘の下の亭主の許(もと)で朝食と昼食を摂るがよい。したが晩にはまたここに上がっておるのじゃ。それでかまわぬか」と王。「はいな、もちろんけっこうで」とヘンスヒエン。「三夜過(よ)ごさにやなりませんでな」。

ヘンスヒエンが宿の主人のところへやって来ると、こちらはもう不思議で堪(た)らず、問い質(た)したものの。「え、まだ生きてるのか。——だけどな、ぞっとすることは昨日の夜に習(な)つたらうが」「うんにや、これっぽかしも」がヘンスヒエンの返辞。そこで今度は亭主自身の方がヘンスヒエンにぞっとし始めた。ヘンスヒエンは王様の勘定で愉快にやらかし、勘定のことなんぞ気に懸けなかった。夕方になるともうすぐに化け物城に取(と)り返して、火を焚いた。突然煖炉の煙突の上の方でばちばちという音がした。まるでなにも木(こ)っ端(は)微塵(じん)に砕け散っているみたいに。そして男が一人下へ落ちて来た。でもこやつ体が半分しかなかった。「おんや」とヘンスヒエン。「こりや一体どう

いうこつた。まだ片割れが足りない。一人の男と半分の男じゃお互い五分の付き合いはできなからうが」。ヘン スヒエンがそう口に出した途端、どつたーん、もう半分があとから落ちて来た。それも火のまん真ん中にな。ヘン スヒエンは二つの片割れを抱き上げると、燧炬から引つ張り出して部屋の中に放り出し、火をあんばいして元通りに直した。それを済ませて振り返ると、二つの片割れは男一人になっていたが、どうにもかわいらしいご面相ではない。で、こいつがヘン スヒエンの椅子に腰掛けておつた。

「やい、その椅子にやあ」とヘン スヒエンは怒鳴つた。「このおれさまが坐るんだ。とつとと失せろ。さもないとこの細工刀でささまを真つ二つにしちまうぞ」。

その時突然またまた煙突の中でごろごろがたがた音がして、死人の脛骨すねぼねと頭蓋骨が幾つもばらばらつと降つて来た。そのあとからまだ幾人かおつそろしい面構えの男どもが続いた。「お晩でござんす、皆の衆」とヘン スヒエンは言つた。「あんたがたは体がそろつていなさる。こりやおいらにやあ氣に入つた。ひよつとしてシエーン「端麗」<sup>(31)</sup>ご一族でいらつしやるかな。なんとも残念なこつてす。この部屋に鏡が掛かつてねえのは。で、いったいぜんたい御用は何でござんしょう」。——男どもはヘン スヒエンをものすこい目で睨みつけたが、一人がさっきの死人の脛骨を手にした。丁度九本。これを九柱戯（32）の木柱（33）みたいに並べて立てると、他の連中は頭蓋骨を掴み、木柱目掛けて転がした。

「九柱戯遊びと来た日にやおいら命に替えてもやりてえ」とヘン スヒエンは言つた。「済まねえけんども、おいらにも一緒にやらしてくんねえか。おめえさんがた、ブレットシユピール（34）をやるだか、それともパルテンスだか。賭けるのかな。ええ、どうだね」。

「金はあるのか」と男どもはおつかない声で訊いた。

「あいさ」とヘンスヒエンは言つて、隠しカケツに手を突つ込んでちやらちやら鳴らしたもんさ。

「じゃあ、やんな」と男どもの一人が叫んで、頭蓋骨を一つ差し出した。

「相済まんこつたが、この球は角角がある。こつちへよこしなせえ。おいら轆轤カドカ台を据えとる。轆轤に掛けて綺麗まあるに丸くしてやんべえ。そうすりゃおらつちや九本皆中かたりだあ」。言うが早いか、台に向かつて、頭蓋骨を丸く削つた。それから試合が始まつた。ヘンスヒエンは上手だったが、男どもはもつと上手で、ヘンスヒエンはいくらか負けた。それからもう一度試合が始まると、ヘンスヒエンは転がして、弾んだ声を出した。「全部で九だあ」。

——「いいや、十二だ」と男どもはうつろな声を挙げると、骨や頭蓋骨もろとも姿を消した。その時お城の塔の古い時計が十二鳴つた。「そんなことつてあるかよ」とヘンスヒエンはわめいた。「これでも仁義に叶かなつとるちゅうのか。やつらと来たら、まずおいらからちつとばかりだがまんまと錢をせしめおつて、そいでおいらが今度うまくやると、ぱつとずらかりおる」。それからまたあの寝台に潜り込んだが、この寝台、今日は全くおとなしくしていたので、明るい朝になるまでぐっすり眠つた。

「今日は多分もう生きてはおらぬだろう」。ヘンスヒエンの部屋にやつて来た時、王は仰せられた。「昨日のように軒をかいているのが聞こえぬ。どうやらおしまいようだ」。だがヘンスヒエンはぱつと目を覚まして「よくお休みになられましたか、陛下」と言つた。——「ありがたい、そなたもよう休んだかの」と王が答えて「昨日の夜はどうじゃつたかな」。——「けつこうおもしろかつたです。ご親切にお訊きくださいませとありがとうございませ、王様」とヘンスヒエンはお礼を言上。「ありやあ煙突掃除夫煙突掃除夫の類でござんした。やつらあ煙突から降りて来やして、おらつちや一緒に死人の脛骨で九柱戯をやりやした」。聞いた王はちりちりつと鳥肌。で、いわく「したがそれはさぞぞつとしたことであろうが」。——「どうしてそんなわけがござんしょう、王様」とヘンスヒエンが訊



き返す。「だって——そうであろうが」と王は受けた。「さて、三晩目の無事を祈っておるぞ」。

「おいらは金輪際ぞつとすることを習えない、つてどうも決まっちゃまってるだな」と三晩目になると、ヘンスヒェンは独り言を呟いた。その時突然大変な騒ぎがおつ始まり、男が六人部屋に入つて来た。この連中は棺台に載つけた柩を担いでおり、それをヘンスヒェンの前に置くなり消え失せた。ヘンスヒェンは、中に入ってるのはだれだんべえ、と思つて柩の蓋を開けた。中に横たわっている男はかちかちで氷のように冷たかった。「あらら、こいつ、凍えとる。寒くつてすっかりかちかちになつてしまつただな」とヘンスヒェンは言った。「おいらが暖めてやんなきゃ」。死骸を柩の中から引き起こすと、自分が起こした火の傍に運んだが、冷たいまんまだった。「こりゃ寝台に寝かせなくちゃなるまい。そうすりやすく暖まるべえ」——そこで抱いて寝台に寝かせ、自分もその傍に横になつた。暫くすると死人は体が暖かくなつて目を覚まし、ふんぞり返つてこうぬかしおつた。「だれがきさまに、おれさまの安息を邪魔していい、と言つた。きさま、殺してやる」。——「はて、慌てなさんな」とヘンスヒェンは応じると、ぱつと男に掴み掛かり、柩に投げ込んで、蓋を閉め、手早く螺子止めしてしまつた。するとすぐきさまの六人の男がやつて来て、柩を担ぎ上げ、運んで行つてしまつた。

その後間もなくものすごい巨人が一人足を踏み入れた。大きく長い髯を生やしており、こう怒鳴つた。「この虫けら。これからきさま、死なにやならん。きさま、おれと一緒に来い」。——「おいら、おぬしと一緒にには行かん」とヘンスヒェン。「急ぐこたあねえ。おいらはまだやらにやならんことがある。それ、見ての通りな」。そうして輓台に向かつて坐り、弾み車を蹴つて軸棒を回し、鑿を用材に当てた。巨人は弾み車越しに屈み込み、ヘンスヒェンを取つ捕まえようとした。けれど突然でつかい悲鳴を挙げた。「痛たたた、わしの髯が、わしの髯が」。これはだな、弾み車が回転するのを助ける腸弦の間に髯の端っこが入つたのを、車が急速に回転してぐいと巻き込み、巨



人の頭全体を引き寄せたわけ。ヘンスヒエンは威勢良く車を蹴りつけていわく「やい、きさま、よく聞け。これからおいらはきさまのでっかい鼻を削り取ってくれる。きさまの目のくり玉を削り抜いてくれる。そいできさまの大きな頭でもって九柱戯の球を削りあげてくれる。それでこそおいら、ほんとにヘンスヒエン様ちゆうわけだ」。すると巨人がお世辞たらたらで約束するには、ヘンスヒエンは自分を放してくれなくっちゃいけない、そうしてくれば

こっちも長櫃ながびつ三つにぎつしりの黄金きんを見せてあげる、一つは王のもの、もう一つは貧民のものと決められている、で、三つ目はヘンスヒエンに贈り物にしよう、と。「よかろ」とヘンスヒエンは言った。「その代物をよこしな。だがな、おいらがそれを手に入れるまで、きさま、この台に繋がれたまんまだぞ。それから轆轤台はきさまの肩にひっちょって行くだ」。

轆轤台を肩に背負い、髯を弾み車に絡み込まれ、行進つてのは糞おもしろくもない運搬だった。巨人は先に立つてとある別の部屋に行くと、ヘンスヒエンに黄金で一杯の長櫃を披露した。その時、時計が十二時を打ち、巨人はかき消えちまった。轆轤台は担ぎ手がいなくなつてそのまま立ち往生。ヘンスヒエンは長櫃も姿を消しちまいそんな気がして「止まれい、止まれい」と叫び、飛びついて、しっかり押さえ、それを自分の部屋に引きずつて来、その上に寝っ転がって眠つた。今度もぞつとせんかつたのだ。

次の日の朝王が来て、お訊ねになった。「さて昨日の夜にはさだめしそなたはまことぞつとしたであらうな」。

「一体どうしてそんなことがございましょう、王様」とヘンスヒエン。「おいらは長櫃一杯の黄金を贈り物に貰いました。それから長櫃一つは王様のもの、もう一つは貧乏人のものです。黄金を贈り物に貰うつちゅうと、ぞつとしくつちやなりませんので」。

「そなたは天晴れなことを遣り遂げた」と王の仰せ。「そなたの怖い物知らずのお蔭でこの城から騷霊が祓われたし、魔法を掛けられていた財宝がいたしかたなく明るみに出て来たのじゃ。そなたに褒美を遣わそう。余の息女と結婚いたすがよい」。

「忝うかたじけなございます、王様」とヘンスヒエン。「でも、おいらが結婚しなきゃならないのと、いまだに阿呆で、ぞつとすることを習っていないのは残念です」。

「そなたは愛い若者じゃの、婿殿」と王が応じた。「結婚いたすがよい。さすれば何もかも分かるうぞ。ぞつとすることができなんだ者は少なくないが、結婚いたすとな、飛び切りぞつとすることによって、鳥肌が立ち通しになるのじゃ」。

「そうなるかも知んねえ、と思うとおいら嬉しいです、王様」とヘンスヒエンは満足して叫んだ。

間もなくすんなばらしいご婚礼が挙げられた。ヘンスヒエンはとっても幸せになり、とつても金持ちになり、世にも麗しい奥方を持った。けども「分からんなあ、どれくらい経てば、わたしはぞつとすることが習えるのだから」と言い言いた。

ようし、見てらっしゃい、ヘンスヒエン。どうしたってあなたをぞつとさせてあげる、ヘンスヒエンの奥方のうら若い王妃はそう独り言を呟き、鮎アサギとか鮠ハスなんかの小魚が入った水を桶おけ一杯持って来させておき、ヘンスヒエンが



眠ってしまうと、掛け布団を剥いでから、桶一杯の水を小魚もろともヘンスヒエンに、ざんぶりこ、とぶつ掛けた。「ぶるるる」。

ヘンスヒエンはわつと目を覚まし、寒くて堪らず口をぱくぱくさせた。「わたしは養魚池に落ちたような夢を見た。——ぶるるる、ぞつとする、ぞつとする。鳥肌が立つ。まるで卸し金みたいだ。ほらね、<sup>鳥肌</sup>、ととうこれで、これでわたしはぞつとできるよになった。これでわたしはぞつとできるようになったよ」。

#### 解題

出典に関するメモ。ペヒシュタインの記述からは結局特定できない。

これは後半の古城の部分では伝説種をいろいろ取り込んであるものの、全体としてはよくできた笑話<sup>シニウツク</sup>である。そしてペヒシュタインは彼一流の語り口を恣に<sup>はしむ</sup>展開、いかにも気持ちよさそうである。

KHM四「ぞつとすることを覚えるために旅に出た男の話」*Märchen von einem, der auszog, das Furchen zu lernen.*に相当。

AT三二六「ぞつとすることは何か覚えたがった若者」*The Youth Who Wanted to Learn What Fear Is.*

原題 *Das Gruseln.*

## 二 シュヴァーベン七人衆の昔話ズルゼン

昔むかしシュヴァーベン男(39)が七人おった。偉い勇士になつて世界中武者修行をしよう、と思ひ立つた。だが立派に武装せにやあならんというわけで、まず世にも名高い町アウクスブルク(40)に出掛け、防具と武器を調達するため、取る物もとりあえずご当地で一番腕のいい親方(41)を訪ねた。なにせ皆がこれこそともくろんでいたのは他でもない、その頃まことに厭いとわしいことにボーデン湖界隈(42)に巢喰すくつとつた巨大な怪物退治だつたんでな。親方は七人衆を見るととてもびつくりしたが、この大胆不敵な面々が似合ひのものを選べるよう、陳列されている武器室をさつさと開いた。「神かけて」と叫んだのはアルゴイアー。「これでも槍だつちゅうのか。爪楊枝つまようじに使うたら丁度ええか知れんがのう。わしにやあ男の身の丈七人分の槍だつてまんた長過ぎやせんのだが」。これを聞いた親方はまたしても妙な目つきでアルゴイアーを見遣やつたが、見られたご当人はかつと怒り出しそうになつた。てのはな、こちらも怖い目つきで親方を睨にらみ返したのよ。この時ブリッツシュヴァープが折良くこう割つて入らなかつたら、あやうくなんぞ起こりかねないところだつた。「こりホッやぶッつたまげた」と大声で。「おぬしゃあうめえことを言うた。おら、おぬしの考えたことが分かるでよ。七人皆が一人のためにあるで、それと同じに七人皆に槍一本ちゅうことだな」。アルゴイアーにはこの意味がよく分からなかつたが、他の者はそれで全く異存がなかつたので、このひとも「そうとも」と言つた。そこで親方は一時間足らずで男の身の丈七人分に相当する槍を拵しらえた。——もつとも一同が工房を後にする前に、めいめい自分なりの品を買ひ込んだ。クネプフェレシュヴァープは安物の剣(44)を、アルゴイアーは羽根飾りが一本付いた鉄兜てつかぶとを、ゲルプフェースラーは履いている長靴に付ける拍車を。こりやあ馬に乗るのにはいいばかりじゃなく、後ろへ蹴り飛ばすのにも役立つ、とわけを言つてな。ゼーハースはやつとのこと(45)で胸甲むさうを選ん



だ。シュピーゲルシュヴァーブはこういつた用心ぶりには全く賛成だったが、胸甲は体の前より後ろに付けた方がいい、との意見を述べたもの。そうして親方のがらくた置き場から使い古しの理髪師用金盥（かんざら）を見つけ、大満足で買い込んだ。体の後ろ側はずっと下の方に被せるため。「分かるかの。おらにええ氣」<sup>(48)</sup>「勇氣」たらいうもんがあつて、先頭行くなら、鎧（よろい）なんぞ要りはしねえ。だどもどんじり歩いてて、それからええ氣がどつか他に行つちまつた場合にや、これでちゃんとした場所に鎧があるちゆうわけだ」。

さて、シュヴァーベン七人衆が律儀者らしく買った物全部の代金を残らずきつかり払い、それからまた善良なキリスト教徒として聖ウルリヒ教会で御弥撒を聴聞し、最後にゲツピンゲン門の脇の肉屋で上等のアウトクスブルク腸詰をいろいろを買い込んで、門から市外へ出て、旅を続けた。例の槍はというと七人皆が一列に前後に並んでしつかと握つて歩いて行つたので、その様さながら炙（や）き串に刺された雲雀のごとし。真つ先駈けるはアルゴイアーのシュルツさん<sup>(49)</sup>。中で一番英雄らしい男。次に続くはヨッケレで、別名ゼーハース<sup>(50)</sup>、それからマルレ、綽名してネステルシュヴァーブ、それに従うはイエルグレ、通称ブリッツシュヴァーブ<sup>(51)</sup>、その後ろにはシュピーゲルシュヴァーブと異名を取つたるミヒエル<sup>(52)</sup>で、それからクネプフエレシュヴァーブのハンス<sup>(53)</sup>、さてどんじりはファイトレで、これはゲルプフューズラー<sup>(54)</sup>。こうした添え名にはそれぞれ立派な理由があつた。シュルツさんがアルゴイアーと呼ばれるのはアルガウ「IIアルゴイ」生まれだから。

ゼーハースは以前ボーデン湖畔に住んどつたので。ネステルシユヴァープは釘の代わりに紐で洋袴を結んでいるからこういう名前を付けられた。そしてこの洋袴だが、ほとんどひっきりなしに片手を添えて押さえておらにゃならんかった。紐がよくちぎれちまつたでな。ブリッツシユヴァープと言われるのは、やつこさん、「こりやぶつたまげた」という言い回しが口癖なんで。シユビーゲルシユヴァープは、鼻を自分の上着の前袖で拭く習慣のせいで、そこが「涙がくつついて」なんかこころ鏡みたいにぴかぴかしたるので、こういう清らかな名前を貰つたわけ。クネプフェレシユヴァープは、シユペッツレともいう旨いクネプフェレを作るのが上手な男。バイエルン・ドイツ語じゃあくネーテル、ザクセン・ドイツ語じゃあくレーセだ。さて最後のゲルプフェースラーだが、これはボプフイング地方の出で、ここの住民のことを周辺の人たちはからかってゲルプフェースラーと呼ぶのさあね。昔連中が領主の公爵のところへ年貢として荷車一台一杯の卵を持って行かなきゃならんことになったが、ちゃんと一杯に詰めようと思つて、卵を足で踏み固めたもんで、卵がいくらかぶつ壊れ、ボプフイングの人間の足が黄色くなつちまつた、という話があるもんでな。

さて七人衆いずれもが槍を押し取り、上上のご機嫌で旅を重ねるうち、乾し草月のある日、黄昏時も遅い時分、緑の牧場にさしかかった。すると一匹の雀蜂が敵意を籠めた唸りを立てて一同からほど遠からぬ茨の生け垣の蔭から姿を現し、傍をぶうんと飛び去つた。これにアルゴイアーのシユルツはおつそろしく仰天、冷や汗たらたらで、戦仲間呼び掛けた。「聴け。早くも敵が太鼓を打ちよる」。シユルツのすぐ後ろにいたヨッケレが妙な臭いを嗅ぎつけて怒鳴つた。「確かに、確かに。こりやすぐ近くだ。もう火薬の臭いがするぞな」。そこで尻に帆掛けたシユルツさん、槍をおつぱりだし、垣根をびよいと跳び越えた。ところがその辺にあつた熊手の歯の真上に跳び降りたので、熊手の柄が「跳ね返つて」真つ向から顔に中り、したたかな一撃を喰らわせた。シユルツは、敵に打つて掛か

られた、と思ひ込み、「勘弁してくれえ、降参するう」と金切り声を出した。他の六人も続いて垣根を跳び越えて来たが、お頭かしらがこう叫んだのを聞いたので、「おぬしが降参するなら、おらも降参するう。おぬしが降参するなら、おらも降参するう」と皆叫んだ。でも、シュヴァーベン七人衆を取つて押さえようとする者はだあれもいなかった。それに気づいた一同は、度胸がなさすぎたのを恥ずかしがり、この初陣ついでじんの勳いさおをひとに洩はらさないよう誓ひ合つた。

シュヴァーベン七人衆がおもこうやって旅をして、とある凹道くぼみちに入り込んだ。大胆不敵たんぱんふてきにこれを行進して行つたが、行く手にでっかい熊が一頭横たわっているのに、アルゴイアーが鼻をぶつつけそうになるまで気づかなかった。熊の姿を目の当たりにしたシュルツさんは、びっくり仰天したあまり我を忘れ、たたらを踏むなり、真つ直ぐ熊に槍を突つ掛けたんだが、それ以上はなにもできず、いとも情けない声音で「熊だあ、熊だあ」となるばかり。自分の最後の麴麴まは焼かれて、平らげられちまつた「(6)最期は目前、そろそろ年貢の納め時」、と思ひ込んでな。だが、熊はびくりとも動かなかつた。とことん死んじまつていたのでなあ。これにはアルゴイアー大喜び。そこで仲間たちを振り返つて見ると、またまたびっくり仰天。全員ひっそりかんと死んだように地面に転がつていたから。そこでシュルツさんは、自分が槍で後ろ突きに皆を刺してしまった、と思ひ、悲鳴を挙げた。地面に転がつてた衆は、熊がアルゴイアーをべろりとやらなかつたのを知つて——てのもびっくり仰天したのでもんどりうつて倒れただけだったのさ——用心深く目を上げて覗くと、熊が死んでいるのが見えたから、元氣一杯で立ち上がり、熊の周りを歩き回り、槍が加えた傷の深さはどれくらいかのう、と調べに掛かつた。けれども傷は一箇所も見当たらない。そこでブリッツシュヴァーブいわく「こりゃぶポッつたフリまッげた。この熊はくたばつとる。とつくの昔に死んでるでよう」。——「そうとも、そうとも」とヨツケレ。「炙やき肉にありつけるだな」。熊の皮を剥はいで勝利の印として持つて歩こう、だが肉の方は残して行こう、と一同衆議一決。「今度は羊どもが喰うとええ。以前熊が羊どもを喰





うたよりの」と七人衆のだれかが言い、皆は熊の皮と槍を携え、前へ進め、と歩き出した。

さて、それからとある森に踏み込んだが、<sup>(20)</sup>茂みの中にますます深く入る一方、とうとう出られなくなつちまつた。おしまいには樹樹がびっしり密生しているので、歩き続けることは思いも寄らぬありさま。とうとうアルゴイアーは一本の太い樹の前に立ち止まり、槍を掲げて獅子のように吼えた。「神かけて。ぜひと突ん抜けにゃあ」

こう言うなりすごい力で樹の脇の地面に槍を突き刺したので、クネプフェレシユヴァープが樹と槍の間に楔<sup>くさび</sup>みたいに挟まれちまつて、ぴくりとも動けなくなつた。こいつは冗談事じゃあ済まない。てのは一行がにっちもさっちも行かなくなり、だれ一人として前へも後ろへも進めなくなつたんで。なるほど、七人衆はクネプフェレシユヴァープをこの締め金の中から引つ張り出そうと、いろいろ仰山<sup>ぎょうざん</sup>な試みをしてみたが、全部無駄骨折り。ハンスはぎゅつと嵌<sup>は</sup>まり込んでいて、ぐらつきがじわじわと拡がって行つた様子で、振り返るなり、こう叫んだ。「神かけて。神様のお助けがあるなら、わしやあ悪魔にもならにゃあ」。そして、「ええ、こんちくしょう」と言うが早いか、がしつと樹をば引つ掴<sup>つか</sup>み、根こそぎぐいと引っこ抜いた。生きてるといふより死んだみだいたったクネプフェレシユヴァープは打ち鎧<sup>よろい</sup>遊びで叩かれた球のように弾<sup>はじ</sup>け出し、六クラフター<sup>(21)</sup>も空中高く舞い上がり、それから

どすんと落つちたので、大地はために震撼した。他の五人はいかにも恭しくアルゴイアーを仰ぎ見た。なにしろこの時初めて、シユルツさんはなんとも大した掘り出し物だ、ということをよくよく得心したからだ。

少しばかり先に行くと、またしてもアルゴイアーは心臓を洋服の留め革の中に落としちまつてるわけじゃあない。「アルゴイアーは臆病者ではない」ってことがはつきりした。てのはこういうしだい。七人衆が茂みの中からようやく外へ出ると、ミュンヒエンの麦酒作りが一人道中して来た。この男、一群の剛毛の家畜「豚」を追い立てており、百歩離れたところからでもこの土地つ子だか見て取れた。槍を携えた七人衆が目留まると、男は道に立ちはだかり、この勇ましい人人を笑い飛ばそうといった顔つきをした。すぐさまブリッツシユヴァープがそやつの前に出て行き、居丈高にこう訊いたもの。「ぬしゃあ何をしろろ見ているだ。まんだシユヴァーベン人を見たことがねえだか」。——「いやつてえほど見とる」と男がやり返した。「わしんとこの麦芽乾燥場じゃあ何千匹も走り回つとる」。これは、どうしてか知らないがそう呼ばれている、例の黒い虫ども「ごきぶり」を皮肉つて指したわけ。今が今五月の蛙みたようにむしゃくしゃしていたブリッツシユヴァープにはこれだけ言われりや瘡蓋の上に虱を這わせる「かつとする」には十分だった。麦酒作りに詰め寄るなり、素早く横つ面にびんたを喰らわせたので、相手は、目から火が出るは、でつかい雀蜂さながらぶんぶん耳鳴りがするは。麦酒作りはたちどころに、両腕を高と振り上げて、小癩なシユヴァーベンつ子にも一撃をお見舞いしようとした。これまでの生涯で相手が夢にも考えなかつたような一発をな。けれどブリッツシユヴァープは奇態なやつこさん、片足を軸に七遍回転したもんだ。これまでの生涯、この逃げかた以上のことは身に着けなかつたでな。そこで麦酒作りはしたたかに空を打つたので、独楽みたいに完全に一回転、たたらを踏んで、乾し草棒のようにどたりと地面にぶつ倒れた。これが男が止めを刺されるもと。ブリッツシユヴァープはかもじ草朝鮮鼠みたいにその体に跳び掛かり、喉頸を掴んだ。一方他の



下を眺めた。実は下には水なぞ無くて、亜麻が一面の畑が広がっていたのだ。折しも青いその花のなんと素晴らしい花盛りだった。

「こりやぶつたまげた」とブリッツシュヴァープが叫んだ。「こりやどうしたらよかんべえ。おらたち、この荒れ狂う湖を渡らにやならねえだ」。

「アルゴイアー、おぬし、向こうへ渡してくれえ。聖クリシウドフ様(秘)が巡礼衆を渡したようによ」とゼーハース。――「神かけて」とアルゴイアーが答えた。「水に入るなあなんでもねえ。肩のどこより深くなけりやあな」。ネステルシュヴァープは片手で洋袴ズボンの腰帯を掴み、この上品な衣類が落ちないようにしっかり押さえ、もう片っぱの手

連中は両手両足を押さえ、その上で愉快にぼんぼん弾んだ。さはさりながらこの男、とどのつまりはそれでも勝ちを占めたかも。大柄で逞しいやつだったからな。もしもアルゴイアーがマルター袋(秘)ながらどさりと襲い掛からなかつたらばの話。そこで男はいやおうなしに許しを請わにやあならなんだ。なにせそうせぬうちは上に乗った一団は手を緩めて退どいちゃくれなかつたから。

暢気のんきな同勢が更に旅路を重ねて行くと、広広とした青い湖に出くわした。と申そうか、連中にはそう見えたってわけ。なにせそうこうするうちいくらか薄暗くなっていたし、風に吹かれて波打っていたしな。そこへ下る坂の上にシュヴァーベン七人衆は佇たたずんで、どうやったら一番手っ取り早くこの湖を渡れるものか、と

で泳ぐような恰好かっこうをした。クネブフェレシユヴァープにはこりや好こいい加減に済まされるこつちやなかつた。この男、鯨さめや鯨くじら、あるいは鰐わにが水中にうごめいてはいないか、とじいっと睨にらんだ。他の者も全く途方に暮れて突っ立っていたが、とうとうブリッツシユヴァープが連中の後ろをうろつき回り、「思い切つて始めりや、半分泳いじまったよ  
うなもんだあよう」と叫こゑぶなり、二、三人を下へ突き落とした。この者たちが沈まなかつたので、ゲルプフェースラーも一番勇気を出して、ぴよんと跳び込んだ。もつと安心してこれに続いたのはブリッツシユヴァープとネステルシユヴァープ。そして最後はアルゴイアーが槍にまたがって駆け下りた。かくして下ではどしんどしんと折り重なったが、とうとう鼻から先に畑に突っ込んだのに気づき、打ち身の付いた脇腹を抱えてだんだんに起き上がり、槍を拾い上げ、またしても、前へ進め、と歩き出した。

この時まで七人衆は和氣藹藹わきあいあいで槍を運び、仲間内に揉もめ事も悶もん着ちやくも生まれなかつた。ところがかの邪よこしまな敵「悪魔」が現れてブリッツシユヴァープとシユピーゲルシユヴァープの間にいさかいの種を蒔まいた。これが起こつたのは次のようなしだい。一行がかなり歩いたところで、もう夜になり、折しも月が昇つた。するとシユピーゲルシユヴァープは何か妙に故郷に帰つたような気がして、こう言つた。「こいつは儲もちけた。メンメンゲ(84)「メンミンゲン」は決して遠くねえだよ」。ブリッツシユヴァープはびつくりしてまじまじ見つめ、どうしてそんなことが分かるのか、と訊たずねた。相手は得得として笑つていわく「おらあ、メンメンゲの月はよおく知つとるだで」。そこでこちらは目から涙をこぼして大笑い。「こりやぶつたまげた、おぬしやあなんとまあたまげた莫ばか迦だの」と叫んだ。さてシユピーゲルシユヴァープは確かに当たり障りのあることを言われてもこたえない人間だつたし、事実これまでももう何度もとやく品評ひんひやうされちやいたけれど、莫迦ばかと決めつけられたくはなかつた。いかにもこれがこの男の泣き所なみどころだつたでな。こう口走つた途端、ブリッツシユヴァープはもう横つ面を一発張られていた。それから二人は肉

屋の犬同士そのけという態で取っ組み合い、負けるものか、と殴り合った。他の連中は物見高く見物していたが、とうとうゼーハースがアルゴイアーに仲裁を頼んだ。頼まれるとアルゴイアーはすぐさまブリッツシュヴァアーブの洋袴ズボンの腰帯を掴み、蛙みたいに高高と宙に差し上げたから、ブリッツシュヴァアーブは思うさま手足をじたばたさせた。そうなってもシュピーゲルシュヴァアーブはブリッツシュヴァアーブの胸板(88)を叩くのを止めなかった。そこでアルゴイアーはこっちも取っ捕まえ、胸倉をぎゅうと締め付けたので、こんこちにつっぱらかつて、ぴくりとも動けなくなった。「神かけて」とシュルツさんは叫んだ。「わしはおぬしらに行儀ちゅうものを教えてやるわ。この忌ままししい抜け作どもめが」。こうしてますます手酷てびとく片方を揺すぶり、もう片方を締め上げたので、とうとう二人はお互いに、これから元通り親しい友だちになるつもりだ、と約束を交わし、その時から死ぬまで間柄は変わらなかった。

間もなくシュピーゲルシュヴァアーブは一向莫迦なんかじゃなかったことが判明。大概の場合ブリッツシュヴァアーブはそう思っていたのだが。なにしろ四半刻しはんとき「三〇分」も歩くと、一同はメンミンゲンを目の前にしていたのだ。シュピーゲルシュヴァアーブが月を見て予言した通り。でもこの町は今ではシュピーゲルシュヴァアーブに不幸しあふらしか齎もちさないみたいで、すぐさまこの哀れな男の命に関わるようなことが起こった。その前に「おら、メンメンゲは通り抜けない」と言ったもの。理由を訊きかれると、頭かぶりを振って、おらにしか分からんこっちゃ、と答えたのだ。そこで七人衆は市壁をぐるりと廻り、向こうの端でまた大街道に戻った。けれどもそれからまたしてもはつきり示されたのは、人間、己おのが運命からは逃れられないということ。なぜならシュピーゲルシュヴァアーブにとつてあつという間のことだったが、葎穂畑ハップ畑の一つから女が走り寄つて来たんで。こりや真正正銘のがたがた糸巻き棹ざお「老いばれ婆さん」だった。で、骨身に突き刺さるような金切り声を張り上げたものだ。「とうとう帰つて来たんだね、この

のらくら者。こんなに長いことどこをのたくつていたのさ、この絞首台の縄「やくざ者」。シユピーゲルシユヴァーブは目がちくちくして、こいつは年貢の納め時だ、と観念した。というのはこの婆様、他でもない、他の仲間と連れ立って旅に出で立った時、彼が委細構わずおっほらかして来た、いとも愛すべき嬢左衛門だったから。考える間なぞあらばこそ、ぱつと一っ飛びでその笹穂畑に逃げ込んだ。笑って笑って腹が弾けんばかりの他の連中の大歓声を後にして。ところが婆様は、紡錘のように細っこい足をちよこちよこ動かし、鶺鴒(98)みたいな速さで敏捷に追いつがった。もし、シユピーゲルシユヴァーブが丁度うまい具合にある悪戯(いたずら)を思いつかなかつたら、ご兩人の間にもすごい喧嘩(けんか)口論がおつ始(はじめ)まつてたことだろう。やっこさんは手ぶらで、例の熊の皮を持っているだけだった。これがあるがたいことに役に立った。急いで毛皮を頭から被ると、巧みに前脚の部分に手を滑り込ませ、四つん這いになったから、生きている熊そのもの、唸りながら女房殿に駆け寄り、鋭い鉤爪(かぎつめ)を相手の体に回して、ぐいと抱き締めたので、女房は気を失っちまって、耳も聞こえず目も見えなくなった。この悪戯者から逃れることのできた女は嬉しがったが、こちら喜(99)び勇んで仲間と一緒にその場からすたこらさつさ。ところで、ご機嫌の悪い亭主がおかみさんからよくぶうすか熊さんと呼ばれるけれど、そうした習(100)わしはこの時が始まりなんだ。

「苦あれば楽あり」とアルゴイアーは叫んで、ロイトキルヒ門を指した。そこには一軒の旅籠屋(はたごや)があり、戸口の上には「当館三月麦酒(メルツエンビール)あり」と記されていた。麦酒(ビール)をきゅつと一杯きしめすのを好まないなんてのは、七人衆の中には一人もいやあしなかったから、一同たちまち旅籠に足を向け、槍を携えたまんま玄関の間に入り込んだ。丁度その時太つちよの麦酒(ビール)作りは、天候を見定めようと、外に出て来たところだった。おつそろしい槍を持った同勢が目に入ると、心甚だ穏やかならず、急いで縁無し帽を脱ぐなり、鄭重(ていじゆう)にご用件を伺った。「ちよつくらおたくの麦酒(ビール)の味見をしたいですよ」とアルゴイアーは言つて、仲間と一緒にまっしぐらに酒場に足を踏み入れた。そこで宿

の主人の腑ふに落ちたのは、その頃よくあったことだが、この槍を持った代表団は、値段相応であるかどうか、麦酒ビールの鑑定・吟味をするため、シュヴァーベン管区カモのその筋から派遣されて来たのだ、ということ。そこで拍車を掛けられた馬のように地下の穴蔵に急行、自分と家族用に醸した極上物を一籠持って上がった。その籠の分はあれよという間に空っぽになり、二つ目の籠もそれより僅かな時間で空、七人衆は二時間も経たないうちに半アイマー(93)近く飲み乾したので、主人は、こりやこの連中、お気に召した、と見ていいわさ、と考えた。けれどもいつも口が先に立つブリッツシュヴァープいわく「麦芽と律穂ホップが少な過ぎなきや、もつと上等なんだがの」。「そりや違います」。冗談好きの主人が応酬した。「律穂と麦芽が少な過ぎたんじやござんせん。水が多過ぎたんですな」。こいつは好い相手に巡り会ったわい、と喜んだブリッツシュヴァープはもうちよつくら一マース(94)ばかり流し込むと、心に浮かんだこんな一節を述べ立てた。

「ランゲンザルツじゃ、ランゲンザルツじゃ

(メンメンゲでもそう言うべえ、とご当人)

一つ麦芽で醸す麦酒ビールが三種類。

最初は本命ケルンと銘打たれ、

市長どんのお気に入り。

二番目の名は中麦酒ミッテルビール、

平民どもの飲み料さ。

三番目こそは弱麦酒コイフェルト、

どちくしようめが飲むものよ」。

さてそれから全員、前へ進め、と歩き出したが、メンミンゲンの旅籠の主人は今なお天地神明に誓って、あの一団は絶対にメンミンゲン管区の上級麦酒吟味役だった、と断言する。

「苦あれば楽あり」とアルゴイアーは言ったけれども、この賢明な諺ことわざについては、逆もまた真なり、の方が遙かに多いことを考えもせず이었다。七人衆の武者修行では雨降り日照りがまあしよつちゆう代わる代わるだったそうだから、この哀れな一団が間もなく再び墨壺すみづぼに嵌まり込んだ「困ったことになつた」のも不思議はない。たらふくあおつた三月麦酒メルウエンビールのせいで頭がふらふらぐらぐらしていたこの連中をまたしても

底意地の悪い運命が待ち構えていた。クローンブルク(99)の近郊を通り掛かったところを、その郷土殿(100)が窓から目にも知れない。見たところどうにも堅気らしからぬ恰好で練り歩いているこの陽気な同勢がまことに怪しく思われたのかなんだいかかわしい一味徒党のように思える」。捕吏は、どれもが危急の際には熊とも十分闘える大きさの七頭ブルドッグの牛攻め犬を引き連れて、館やかたから街道へ下りて行き、不幸なシユヴァーベン人狩りに取り掛かった。狩猟隊はすぐ





さま追いつき、いつものことだがブリッツシュヴァープが小生意気な態度を取ったので、とっ捕まえ役はちよいと立ち回りをやらかして、一団をしょっぱいた。なるほどアルゴイアーはそうむざむざと同行しようとはしなかったが、犬どもが恐ろしい様子で唸ると、槍も耳も一緒に下げてとほとほ随ついて来た。さて全員がクローンブルクの郷士の御前に連行されると、郷士は厳しい訊問じんもんを開始した。ゼーハースが一同の代弁者を務め、こうありていに申し述べた。ポーデン湖畔の地方に恐ろしい獣が巢喰くっているしだい、そして、自分たちは勇敢な同郷人として、また実直な人間として、郷土をこの怪物から解放しようとシュヴァーベンのあらゆる地域から馳よせ集まったのだ、と。けれども郷士は信用せず、この連中は浮浪人で泥棒どもだ、という思い込みに固執、一同を「小屋」、すなわち牢屋に放り込んだ。

「シュニッツレプツ(10)の『小屋』の中じゃよ、

小鼠こねずみが歌って踊るはな。

それから蛞蝓なまこじ吼えなげ猛たける——」。

ブリッツシュヴァープは「小屋」でこう歌ったが、ただし、小鼠こねずみみたいにしごく低声こごえで。

さて郷士だが、これはついその前日、足痛風そくつうふう(10)に苦しめられたものだから、あらゆる盗賊やのらくら者への威嚇、市民たちの安寧、庶民らの啓蒙に役立つよう、監獄を設置しようという賞讃すべき決意を固めたのだ。そこへシュヴァーベン七人衆が丁度やって来たというわけ。いつもはこの御仁、慈悲深く温厚な殿様で、自分の領分のお百姓たちからだって、暖かい衣類を作るのに必要とする以上の羊毛を刈り取りはせなんだ。そこで、囚人たちに足

りるだけの食料を支給してやれ、と指図した。ところでシユピーゲルシユヴァープは郷土の人柄をよくわきまえていて、骨皮筋右衛門がこの人の厨房と酒蔵の主だ「食べる物も飲む物もとても切り詰めた暮らしをしている」、ということを知っていたので、それに基づいて一案を捻り出し、それを仲間たちに打ち明けた。そういうしぐらで、昼飯時、捕吏が大きな鍋一杯の小さいクレーセ、この辺りで乳入りシユベツツレと呼ばれるのを運んで来ると、ブリツツシユヴァープがクネプフェレシユヴァープにいわく「これはおぬし、好物だんべえ」。捕吏は、これだけで全員に十分だ、と思っていた。ところがクネプフェレシユヴァープは、足りるかどうか検分してみるべえ、と言うと、坐り込んで、一人で鍋を空にしてしまい、一かけらも残さなかった。捕吏はびっくり仰天、郷土のところに走って行き、あの浮浪人どものためには一回に醸造鍋一杯のシユベツツレを作らなければなりません、それでもまだ十分ではないかも知れませぬ、と言上した。クローンブルクの郷土にしてクローンブルクの館の主は沈黙考、僅か数人の浮浪人のために己の館の中で飢えに苦しむ羽目に陥るほど多大な犠牲を払わねばならぬ負い目にはない、シユヴァーベン管区と人類に対する負い目なんぞはな、と結論。かくして七人衆は即刻釈放された。ただし郷土は七人衆の行く先に人相書きを差し回し、他の諸当局および牢番たちに当然の義務としてクネプフェレシユヴァープの旺盛な食欲を警告した。

一つならぬ冒険を後にして——物語るには数があり過ぎる——シユヴァーベン衆は大きな湖の畔に辿り着いた。するとゼーハースはすぐにこの湖を見分けて、「これがボーデン湖だあよ」と言った。言い伝えによれば、この岸辺に危険な怪物が巢喰っているとのこと、これと闘って殲さんものと、シユヴァーベン七人衆が固く心に決めたのはどなたもご存じの通り。さて今やその湖と、同時に怪物が棲んでいる森を目の当たりにしたわけだが、それがおぞましい無翼龍なのか炎を吐く有翼龍なのか知らないありさまなので、一同おおかた心臓が洋袴の中に落ちてし

まい、狩り場という野天<sup>ハ</sup>での食事<sup>ト</sup>をやらかすことにし、クネプフェレシユヴァープがこれを最後と(なにせ、怪獣が皆を引つくるめて、槍も一緒に、あるいは槍は抜きで、そっくり全部跡形もなく呑み込んでしまうかも知れなかったのだな)一食分のクネプフェレというかシユベツツレというか、そいつの支度ができるよう、小さな焚き火を起こし、それから食事の間死に関する考察を試みた。「そうさの」とアルゴイアーは言つて、長く大きな溜め息をついた。「人生最後の食事が昼飯だ、とつらつら考えてみるちゅうと、こりや問題だわな」。そしてもう一度長大息して言つた。「こりや問題だて」。それからクネプフェレシユヴァープは声を立てずに泣き始めたが、そうするうちにも食べることは忘れなかった。アルゴイアーが三度目にびつくりするほど深く嘆息して「こりや問題だのう」と言つと、全員なんとも惨めな声で、野蛮な異教徒でさえ哀れを催さんばかりの啜り泣きやら泣きわめきやらを開始。ネステルシユヴァープだけは死ぬなんて思い煩つてはいなかった。だつてな——とご当人——おつ母<sup>かあ</sup>がよくおいらに言うたもんだ、おまえの時<sup>トキ</sup>なんぞ決して来やしまいよ、つてな。だがそれでも、仲間につきあわなきや悪かんべえ、と一緒にわんわん吼え立てた。さて、すっかり泣きくたびれてしまうと、それでもさすが、戦闘序列を調える潮時だ、と思ひ当たつた。ところがその際いろいろないざござ、いざかいがおつ始<sup>はじ</sup>まつた。アルゴイアーの意見はこう。わしはこれまでしよつちゅう先頭におつたで、そろそろ一度は最後尾<sup>しんがり</sup>に回る頃合いだて。ブリツツシユヴァープが前に出るとええ、と。けれども言われた当人いわく「おら、ええ気<sup>クラシエ</sup>は十分体にあるだどもよ、体の方はそのええ気<sup>クラシエ</sup>と怪物<sup>きやあぶつ</sup>のけだものを引き受けるに十分でねえだ」。シユピーゲルシユヴァープは鼻を袖で拭いて、こんな提案をした。一人が皆のために死ぬ方がどうやらいいのはあるまいか、そこでクネプフェレシユヴァープが自分たちにこうしたささやかな善行を施してくればなあ、と思う、と。けれども言われた当人は、まるでもう怪物が自分の襟髪を引つ掴んだかのように、人殺しい、と悲鳴を挙げた。こうやってまだしばらくの間あだこうだと

議論を交わしたが、とうとう円満に話し合いがついて、さっさと槍を手に携え、怪物が棲んでいるといわれる森を  
目指して真っ直ぐに、前へ進め、と足を踏み出した。森に着かないうち、その手前に広がる斜面に出たところ、そ  
こに一匹の兎うさぎがいて、後脚で立ち、長い匙さし「耳」をぴんと伸ばしていた。この光景にシュヴァーベン衆はぞおつと  
して急停止、会議を開き、前進して、長く伸ばした槍を怪物目掛けて突っ込むべきか、でなければ、回れ右して逃  
げ出すべきか、とっくり思案した。もつともだれもが槍をしつかと握っていた。さてファイトレは一番後ろにいて  
安全この上なしだったので、鶏冠とよかを膨らませ「調子に乗り」、先頭のシユルツにこうがなり立てた。

「突っ掛けろや、あんた、あらゆるシユヴァーベン人の名において、  
でなけりや、あんた、よいよいにでもなるがええ」。

ゲルプフュースラーのファイトレの前にいるクネプフェレシユヴァープのハンスはこう言つてファイトレの  
ええクネプ気をからかった。

「あきれたもんだよ。つべこべほざくが、  
龍退治りゆうちとなりやおぬしやあどんじり」。

ミヒエルの肝っ玉は髪の毛がおっ立ってしまったので、怪物の方へは全然目をやらず、顔をそむけて、袖で顔を  
隠しながら、こう言った。

「これっぽっちも外れはしなから、

ありやあてつきり悪魔ぞな」。

イエルグレはミヒエルの顔を覗き込み、これもおつそろしいけどもの方には全く目を向けず、びくびくもので調子を合わせた。

「たまげたことだよ、悪魔でなけりや悪魔のおつ母、

さもなきや悪魔の腹違いの兄弟」。

ネステルシユヴァーアのマルレはシユヴァーベン衆が掴まっている槍のもうかなり前のところにいたので、居場所がおもしろくなかったのだけれど、この時よい考えが浮かんだ。怪物を見詰めている必要なんてない、と思ったので、これも後ろを振り向いてファイトレに呼び掛けた。

「行けや、ファイトレ、行け、行け、前へ、

おぬしの代わりにやおらがそけ行く」。

でもファイトレは両耳にびったり蓋ふたをして、聞こえなかったようなふりをした。それからマルレがヨツケレに言った。

「行けや、ヨッケレ、行け、行け、前へ、

おぬしゃあ拍車と長靴を着けとる、

「龍もおぬしを咬むこたできまい」。

さてヨッケレのせめてもの慰めは、アルゴイアーがシユヴァーベン七人衆の構える槍と遣り遂げなければならぬ冒険の最前線にいたることだったから、こう言った。

「シユルツじや、シユルツが一番でなきや、

そうした誉れに相應しいなあこのひとだけだで」。

アルゴイアーのシユルツは元気を奮い起こして、勇ましく言った。どうせいつかは避けられない危険に跳び込むのだし。

「されば雄雄しく闘いに赴かん、

果敢なる者はそれにて分かう」。

そして神の御名を唱え、襲歩「歩兵の突撃時の歩調」で怪物目掛けて進んだが、心臓がどきどき高鳴ると、なんとも怖くて堪らず、「ハウ、フェルハウ、ハウ、ハウハウ」と叫んだ。すると兎はびっくり仰天、拍車を掛けられ

たように雲を霞かすみ、走れるだけの速さですつ飛んで行った。さあ、シユルツは喜んで声を掛けた。

「やれま、ファイトレ、あれが何だか見たかや、見たか。

怪物きやあぶつちゆうのは兎うさぎでねえだか」。

「なんと見たかや。なんと見たかや」と他の連中もお互いに。訊き交わした。「こりやぶポッパッつたまげブた」とブリッツシユヴァープが叫んだ。「仔牛こぎみてえな代物しろものだったの」。ネステルシユヴァープが持ち合わせの一番ひどい悪態をついた。「相済まんこつたが、おぬしなんぞは鼠ねずみに咬かまれちまいな。肥やし飼いの牡牛おしみてえなけだものだったで」。「へへんだ」とクネプフェレシユヴァープが叫んだ。「象ぞうだつてあの怪物きやあぶつに較くらべりや猫ねこみてえなもんさな」。「神かけて」とアルゴイアーが応じた。「あれが兎うさぎでなかるうもんなら、わしは三人懸ドライメンかりぶんどう酒ウと喉掃除ノドハヅレの区別クワツもできんちゆうことになる」。

「まあ、まあ」とゼーハースが仲裁仲裁に入った。「兎うさぎだろうとなんだらうとええでねえか。とにかく湖産ゼーハースの兎うさぎはしんせレマ帝国⑩「神聖ローマ帝国」のどんな兎うさぎよりもでつかけておつかないでな」。「湖産ゼーぶんどう酒ウがしんせレマ帝国のどんなぶんどう酒ウより酸すっぱくて渋しぶいようにの」と後ろでゲルプフュースラーが言った。この厭いやがらせを耳みみにしたゼーハースはあやうく二、三発横よこつ面にびんたを喰くらわすところだった。なにしろよちよち歩あきの頃から味あじわつて来た湖産葡萄酒ゼーヴァインをファイトレが喰くいたものにしたのが、ひどく気に障さわったのでね。ところで湖産葡萄酒ゼーヴァインに関してはこんなあんばいなのである。すなわち、これには三種類⑪ござる。先サウアーず第一クンが酸すっぱい葉ブ。酢アサよりはまあいくらか増ました味あじで、ちよつぴり口くちが歪ゆがむ程度ほど。ことに飲み慣なれていれば。二番目の種類⑫が三人懸ドライメンかり葡萄酒ウと呼ばれているや



つ。味覚においては酔より一〇段階下で、命名の理由だけど、これを飲む羽目になった男は、三人目がそれを口の中に注ぎ込んでいる間中、二人の男に抑えつけられねばならないからだ、と唱えられている。三番目の品種が喉掃除で、痰たんその他もろもろを排除してくれるというあっぱれな効能を持っているが、ただし、この酒を体内に収めて寝床に横になって眠る者は、夜中に起こして貰わねばならない。体を引つ練り返せるように。さもないと喉掃除は胃袋に穴を開けてしまう。

かくしてシユヴァーベン七人衆の怪物退治の冒険はありがたいことに成就したので、今や偉業のお疲れ休めをし、おとなしく故郷へ引き揚げることにしよう、と衆議一決した。だがその前に七人衆の武勲を当代および後世の人人に永久とこしえに伝える戦勝記念碑を設立する必要があった。さて、昔むかしの勇猛果敢な騎士がしたように、龍の皮をどこぞの教会にぶら下げるなんて今はできっこない。なにしろ自分の皮を市場に運んで行く龍なんぞいやしない⑬し、例の兎公うさぎこうは自分の毛皮つがに惹ひなくくるままつて逃げちまつたしな。そこで皆の衆は手に入れた熊の皮と所持の槍とを戦勝記念品として近間の教会に奉納することに全員一致、この礼拝堂はその後「シユヴァーベンの救世主」と呼ばれるようになった。そこには多分槍はまだ掛かっているが、熊の皮の方は衣蛾いごが食くいくし、雀がその毛を巢作り⑭に運んでしまったことだろう。



解題

出典に関するメモ。民衆本と古い絵 Volksbuch und altes Bild。

「民衆本」とは、B P 二巻五五五ページ以降から類推するに、ルーツヴィヒ・アウルバツハー編著『あるささやかな民衆本』(一八二七) Ludwig Aurbacher: *Ein Volksbüchlein* および同編著『シュヴァアーベン人の亀鑑の旅』(一八二九) *Wanderungen des Spiegelschubens* か、と想われる。しかし「古い絵」となるものは特定し難い。この物語はたゞ絵画化されているからである。

「シュヴァアーベン」という名称は古代西ゲルマンの一部族「スエービ」に由来するが、ではこの「スエービ」の語源は何かとなるか、いまだに学者たちの論争的らしい。近代ドイツにおいては、グリム兄弟はスラヴ語の「スヴォボダ」*Svoboda* (「自由」ほどの意)と関係があるのでは、と言い、ルーツヴィヒ・ウーラントは古代北欧語「スヴァーフ」*Svef*と結びつけた。「スヴァーフ」は「槍」、特に「振られる槍」の意だそう。このような説を聴くと、なんとなく双方をくっつけて、シュヴァアーベン人は「自由な、槍で武装した人」と考えてしまふ。ただし「シュヴァアーベン七人衆」である。

シュヴァアーベン人はお人好し、勤勉、懐けにくく、ある時は粗野、ある時は繊細、儉しく、くよくよ思い悩み、旨いもの好き、気持ち傷つき易い。「シュヴァアーベンのとんち」*Schwabenstreich* なる慣用句があり、その愚行を他地方の人間は嗤いものにする。V d D 収録の「奪われた面紗」あるいはモンゴルフイエ風のお伽話(鈴木満訳『リューベツァールの物語 ドイツ人の民話』、国書刊行会、平成一五、所収)の主人公であるシュヴァアーベンの若者フリートベルトは勇敢で生一本、ギリシア人のお姫様への恋をみごと成就するが、それでもやはりこの「シュヴァアーベンのとんち」をやらかすという設定になっている。シュヴァアーベン人に対する揶揄は既に十五世紀に夥しく知られていた。

シュヴァアーベン七人衆の物語が初めて登場したのは上バイエルンの湖テーゲルンゼーで記されたラテン語の手稿において、一四九八年のことである。もともと勇士たちは三人に過ぎなかったが、それでも明瞭にシュヴァアーベン人となっている。

K H M 一九「シュヴァアーベン七人男」*Die sieben Schwaben* に相当。こちらは哀れや全員が溺死してしまう悲しい結末だが。

A T 一三三〇「愚か者たち蜜蜂の羽音に怯える」*Fools are frightened at the Humming of Bees*. + A T 一二九〇「亜麻畑で泳ぐ」*Swimming in the Flax-Field*. + A T 一三三四「地方の月」*The Local Moon*. + A T 一三三一「兎(かりがに)に突撃」*The Attack on the Hare (Crayfish)*.

原題 *Das Märchen von den sieben Schwaben*.



### 三 肝臓を平らげちまったシュヴァーベン男の話

我らが御主おんあまのこにして救世主がまだこの地上を町から町へと旅し、福音を伝え、数数の御徴みとざしを行っていらした頃のこと、一人の暢気のんきで無邪気なシュヴァーベン男がある時御許みもとにやって来て、「御難ごなん同士のお仲間やい、おぬしやあどこへ行かつしやるつもりだ」と訊きいたもの。我らが主しなる神はこうお答えになった。「わたしは巡り歩いて、人人を救っているのだよ」。するとシュヴァーベン男いわく「おいらを道連れにしてくれるかの」。——「いいとも」と我らが主なる神。「そなたが信心深くして、たつぷりお祈りをするならな」。シュヴァーベン男はこれを承知した。さて二人が歩いて行くうち、二つの村の中間にやって来た。どちらの村でも鐘が鳴っていた。おしゃべり好きのシュヴァーベン男は我らが主なる神にこう訊きねた。「御難ごなん同士のお仲間や、あそこじゃ何で鐘を鳴らしているだ」。我らが救世主は、万よろのこともをご存じだから、「一つの村では婚礼のために鐘を鳴らしているのだ。もう一つの村では死者の埋葬のために」とお答えになった。——「おぬしやあ死人あしびとのそこへ行けや」とシュヴァーベン男は言った。「おいらは婚礼の方に行くぞ」。

それから我らが主なる神は村へ行き、その死者を甦よみがえらせておやりに

なった。するとグルデン銀貨百枚<sup>(18)</sup>が贈られた。シュヴァーベン男は婚禮の場をあちこち歩き回り、酒を注ぐ手伝いをした。お客に次から次へ、それから自分自身にも。さて、婚禮がお開きになると、クロイツァー銅貨<sup>(19)</sup>を一枚恵まれた。シュヴァーベン男はこれにすっかりご満悦で、とつとこ足を踏み出し、我らの主なる神の許に戻った。シュヴァーベン男は遠くから主のお姿を目にすると、すぐさま自分のクロイツァー銅貨を空に投げ上げて叫んだ。「おおい、御難同士のお仲間よう、おいらにや金が手に入った。おぬしは一体何を貰った<sup>(20)</sup>」。とまあ、こんな具合にその小銭をうんとこさひけらかした。我らが主なる神はお笑いになって、こうおっしゃった。「ああ、わたしはそれたより多く戴いたよ<sup>(21)</sup>」。そうして袋を開いて、シュヴァーベン男に百枚のグルデン銀貨をお示しになった。けれどもシュヴァーベン男はのろまというにはほど遠く、自分のけちなクロイツァー銅貨を素早く百枚のグルデン銀貨の中に放り込んで、こう叫んだ。「も、や、い、<sup>(22)</sup>「共有」だ、も、や、い、だ。手に入ったものは何もかもお互い同士、も、や、い、ちゆうことにするべえよ」。我らが主なる神はこれを善しとされた。

さて更に二人が連れ立って歩いて行くと、羊の群に行き会った。すると我らが主なる神はシュヴァーベン男にこう言われた。「さあ、シュヴァーベンのお人、そなた、あの羊飼いのところに行つて、仔羊を一匹くれ、と頼みなさい。そして臓物とか臍<sup>(23)</sup>とかい<sup>(24)</sup>のを煮て、食事にしようではないか」。——「ええとも」とシュヴァーベン男は答えて、主がお言い付けになった通り、羊飼いのところに出掛け、仔羊を一匹貰い受け、皮を剥いで、臓物を食べる支度をした。鍋の中がぐらぐら煮立って来ると、小さな肝臓がしょっちゆう表面に浮かび出た。シュヴァーベン男は杓子<sup>(25)</sup>で底に押し付けたが、それは沈んでいようとしなかった。そこでシュヴァーベン男は法外に腹を立てた。で、小刀を押つ取つて肝臓を真つ二つにすると、よく煮えていたので、両方とも平らげてしまった。さて、食べ物<sup>(26)</sup>が食卓に並べられると、我らが主なる神は、一体肝臓はどこへ消えたのか、とお訊きになった。でもシュ



ヴァーベン男はちゃんと答えを用意していて、あの仔羊にゃあ肝臓は無かっただよ、と言ったもの。「おやまあ」と我らが主なる神はおっしゃった。「一体肝臓が無くてどうして生きていたと言えよう」。シュヴァーベン男は手を高く挙げて固く誓った。「神かけて、それからありとあらゆる聖人がたにかけて、あれにゃあ無かっただよ」。我らが主なる神はどうなさろうとしたかって。シュヴァーベン男が口をつぐむことをお望みだったので、それで善しとなさらなければならなかった。

さて再び二人が放浪の旅を続けていると、またしても二つの村で鐘が鳴らされていた。シュヴァーベン男いわく「なあ、相棒、あそこじゃ何で鐘を鳴らしているだ」。——「あの村では死者のために、もう一つの村では婚礼のために」と我らが主なる神はおっしゃった。「よしきた」とシュヴァーベン男。「今度はおぬしが婚礼の方に行くだ。おいらは死人のところに行くでな」(百グルデン稼ごう、と思つてのこと)。それから更に主にこう訊いた。「なあ、相棒、おぬし、どうやって死人の目を覚まさせた」。——「それはね」と主は仰せになった。「わたしはそのひとにこう言ったのだよ。父と子と聖霊の御名みなにおいて立ち上がれ、と。するとそのひとは立ち上がった」。——「よろし、よろし」とシュヴァーベン男は叫んだ。「これでおいらもうまくやってのけられら」。そして村へ向かったところ、死者が運ばれて来るのに行き会った。シュヴァーベン男はこれを目にする、高らかに声を挙げた。「止まれ、止まれえ。おいらその人を生かしてみせる。もし、生かせな

けりや、お裁きもなにも抜きでおいらを縛り首にするがええ」。

皆の衆は喜んで、シユヴァーベン男に、百グルデン払う、と約束し、死者が横たわっている棺台を地面に下ろした。シユヴァーベン男は柩ひつぎの蓋ふたを開き、唱え始めた。「聖なる三位さんみいつた一体の御名において立ち上がれ」。けれども死者は立ち上がろうとしなかった。シユヴァーベン男は心配になり、お祈りをもう一度、それからもう一度唱えたが、死者は一向体を起こそうとしなかったたので、かんかんになってこう怒鳴った。「やれまあ、そんなら悪魔千匹の名において寝たつきりになつとるがええ」。村の人人はこうした冒瀆ぼうとくの科白せりふを耳にし、能天気のつてんきなやつに騙だまされたと分かると、柩をそこに置いたまま、シユヴァーベン男を取つつか掴つかまえ、やがて男を連れて絞首台の丘へ登って行った。

我らが主なる神はシユヴァーベン男がどういふことになるかよくよくご存じだったので、静静とそちらへ赴かれしたが、男がどんなふるまいを見せるかご覧になろうとおぼしめして、こう声をお掛けになった。「おお、お仲間さんや、そなたは何をしたのかね。なんというていたらくになったのだ」。シユヴァーベン男はひどく腹を立てて、主がお祈りをちゃんと教えてくれなかった、と文句を言い始めた。「わたしはそなたにちゃんと教えてあげたよ」と主は言われた。「だが、そなたがちゃんと覚え、ちゃんとやらなかったのだよ。だが、まあ、それはそれとしておこう。あの小さな肝臓がどこへ消えてしまったのか、わたしに話すつもりがあるなら、わたしはそなたを救ってあげる。——「ああ」とシユヴァーベン男。「あの仔羊にやあほんとに肝臓が無かつたんだってば。おぬし、なんだっておいらを咎とがめ立てする」。——「おやまあ、そなたはどうしても言うつもりはないのだね」と主。「さあさ、告白すれば、わたしはあの死者を生かしてみせるが」。だがシユヴァーベン男はわめき始めた。「皆の衆、おいらを吊してくれえ。吊してくれえ。そうすりゃおいらはこんな責め苦からおさらばだあ。あいつはちっぽけな肝臓のことでおいらにむりやり白状させようつちゅうだ。皆の衆、どうかよつく聴いてくれえ。あの仔羊にやあ肝臓は

無かったただあ」。

我らが主なる神はこれを聞いて、シユヴァーベン男が、本当のことを打ち明けるより縛り首にされる方がましだ、と思つていることがお分かりになり、絞首台から下ろしてやるようお言いつけになると、今度はご自身で死者を生かしておやりになった。

さて、またまた二人が連れ立ってそこを離れると、我らが主なる神はシユヴァーベン男にこう言われた。「さあ、わたしたちは戴いたお金をお互いに分配しようではないか。それが済んだらお別れだ。だって、これから道道ずつと、どこでもかしこでも、そなたを絞首台から救つてやらねばならないとしたら、わたしには荷が勝ち過ぎるのでね」。そして例の二百グルデンをお出しになり、三つの山にお分けになった。シユヴァーベン男はこれを見て、「あれ、相棒、おぬしどうして山を三つ作つただね。おいらたちやあ二人しかいねえでねえか」と訊ねた。——「ふむ」と我らが主なる神様は仰せになった。「一つの山、これはわたしのだ。もう一つの山、これはそなたのもの。で、三つ目の山はね、これはあの肝臓を平らげてしまった者にあげる分だよ」。これを聞いたシユヴァーベン男は嬉しそうにこう叫んだ。「神かけて、それからありとあらゆる聖人がたにかけて、ありゃあおいらが平らげちまつただ」。そう言うなり、三つ目の山もさつと攫さらい込み、我らが主なる神の御許から退散つかまつつた。

### 解題

出典に関するメモ。「旅の慰め」*Wegkürzer*とある。

これはマルティン・モンタヌス『旅の慰め、こよなく楽しく、殊ことの外ほか気晴らしになる小冊子』第六番「肝臓を平らげちまつたシユヴァーベン男の話」Martin Montanus: *Wegkürzer, ein sehr schön lustig aus der Maßen kurzweilig Büchlein* (1557). Nr.6: "Von einem schwaben, der das leberlein gefressen."を指す、と思われる。KHM 81 (一八一九年第二版で初めて収録)はこれが源泉ではなく、

ウイーンにおける口頭伝承の記録による。しかしながらグリム兄弟は KHM 第三版において出典をモンタヌスのテキストとした。ベヒシュタインはほとんど一語一句モンタヌスの物語を継承しており、ただ結びの教訓を省いたに過ぎない。

類話は既に『パンチャタントラ』にある、とのこと。

KHM 八一「お気楽あにい」Bruder Lustig に相当。

AT 七八五「仔羊の心臓を食へたのはたれか」Who Ate the Lamb's Heart?

原題 *Vom Schuaben, der das Leberlein gefressen.*

## 四 泥棒の親方の認定作品

ある村にとても貧乏な年寄りの夫婦者が二人つきりのみすばらしい小屋に住んでいた。村の中心からずうつと離れていて、この小屋で村はおしまいになるのだった。爺さん婆さんは実直で働き者だったが、子どもはいなかった。息子が、たった一人の息子があつたのだが、これはでき損ないの少年で、こつそりどこかへ雲隠れしてしまひ、これまでずつと何の音沙汰もなく、姿も現さなかつた、そこで爺さん婆さんは、自分たちの一人っ子はとつくの昔に死んで神様の御許に召されている、と信じていた。

さて、ある時のこと、爺さん婆さんが家の戸口の外に坐っていた。祝日のことだった。向こうから村を指して堂堂とした馬車が一台向かつて来た。六頭の素晴らしい馬がこれを牽いていて、中には上つ方が一人乗っているだけ、後ろには従僕が一人立っていたが、その帽子と上着はべた一面の金糸と銀糸の縫い取りでござに突っ張らかつていた。馬車は村をずっと通り抜けた。折しも教会から出て来た小百姓たちは、こりゃあ公爵様か、もしかしたら王様のお通りすがりじゃあるまいか、と思ひ込みそうになつた。なにせこんな豪勢な贅沢は丘の上の古い城に住む殿様にだつてできないことだつたから。すると突然馬車は村外れのこの小屋の前に止まり、従僕が後部台から跳び下りて、中に坐っているご主人のために馬車の扉を開いた。この紳士は馬車から降りると、すっかり度を失つて長腰掛けから立ち上がつていた爺さん婆さんのところに早足で歩み寄つた。紳士は愛想良く、ご機嫌よう、と挨拶をし、握手の手を差し伸べ、じゃがいものピューテス(団子)料理を一緒に戴くことはできませんか、と訊ねた。これを聞いていやなんとも訝しく思つたのは婆ちゃんだったが、このうら若く、綺麗で、とつても上品な旦那様はすぐさま婆ちゃんのびっくりを鎮めた。このひとはこう言つたもの。このピューテスというもの、これまでど



の料理番もちゃんと作ることができなかつた、子どもの時に作つて貰つたような田舎のひとの料理を食べたくてな  
 らない、と。そこで老人たちはこの貴公子を、知らない方だ、と思つて、愛想良く小屋に請じ入れた。貴公子の方  
 は馬車を御者と従僕ともどもさしあつて村の旅籠屋に回した。婆ちゃんは急いで小屋の小さな穴蔵から幾つも  
 じゃがいもを持つて上がり、皮を剥いて挿り潰し、搾ると、湯を沸かして、ちよつぱり脂を混ぜた丸めた団子を放  
 り込んだ。そうしてこの食べ物物を「神様、ご加護を」という敬虔な唱え言で祝福した。そのためこの団子は南  
 テューリンゲンの数多くの土地で「ビューテス」と呼ばれているのだ。老婆が食事の用意をしている間、亭主の方  
 はこの知らない御仁と一緒にささやかな菜園を歩き回つていた。そこで爺さんは少し前に植えた若木にちよつとし  
 た仕事をした。つまり、柳の枝で若木の細い幹に結ばれている支柱がまだしっかり立っているか、風が柳の枝を引  
 きちぎつていはいしないかを検分し、そんなことになっていると、爺さんは細い幹を一本一本きゅつと結び直した。  
 すると見知らぬ青年は訊き始めた。「この小さい幹ですがね、あなたはどうして三箇所も縛つたのですか」。  
 ——「さよう」と爺さん。「これには曲がつたところが三つもありましょ。ですからわしはこれが真つ直ぐ伸びる  
 ように縛つたのです」。——「けつこうなことですな、ご老人」と見知らぬ男。「ですが、あそこに一本、曲がりく  
 ねつたこぶこぶの木がありますね。あなたはどうしてあれにも支柱を結び付けて、真つ直ぐに直してやらないので  
 すか」。——「あつは」と爺さんは笑つた。「古い木はの、曲がつたら真つ直ぐには直りませんのじゃ。真つ直ぐに  
 しておきたければ、若いうちにちゃんと育て上げなければ」。——「あなたにもお子さんはおありで」と知らない  
 ひととは更に訊ねた。「おお、神様、ご恩寵を垂れたまえ」と亭主は応じた。「わしには男の子が一人ありました。こ  
 れがとことんやくざ者でした。乱暴な悪さをいろいろ働き、とどのつまりはわしの許を出奔いたし、これまで戻つ  
 てまいりません。あれを神様がどこへお導きになつたのか、とんと分かりません。いや、悪魔めがどこへ連れてま



だ。いやはやとんでもねえ。おまえはおっそろしくおまへは低声こごえで言った、「なつたのは別のものです。泥棒になつたのですよ、わたしは。あなたがわたしを真つ直ぐに育ててくださらなかつたから。でもまあそれはいいとしましょう。わたし

いったやら、と申す方がよいのかも」。「一体なぜあなたは息子さんを早いうちに真つ直ぐに育て上げなかつたのですか。ここにある何本ものあなたの若木のように」。知らないひとは暗い顔をして非難を籠めて言った。「息子さんが今でき損ないの、曲がりくねって瘤こぶだらけの、野育ちの木になってしまっているなら、それはあなたの責任です。ところで、もし息子さんがあなたの前に戻つて来たら、息子さんだとお分かりになりましょうか。——「どんなものでしょうかなあ、旦那様」とお百姓は答えた。「生き長らえているなら、とても大きくなつておりましたよ。したがあれの体には生まれついでおとの痣あざが一つありましてな、それでどうにか見分けがつかましようわい。けれどやつぱりあれがやつとこ家に戻つて来るとすれば、それはありつこない日とやらにでしような」。すると見知らぬひとは着ている上着を脱いで、爺さんに痣を見せた。爺さんはびっくり仰天、頭の上で両手を打ち合せて、叫んだ。「イエス様「なんたること」。おまえはわしの倅せがれ

は伎倆わざづを十分に磨きました。そんなじよそこらにごろごろいるけちなこそどろたぐいの類ではありません」。

爺おやさんはあんまり驚いたのとあんまり嬉しいので黙りこくってしまい、倅この手を取ると、家の中にいる、丁度くしせ団子を作り終わって、食卓に並べた母親のところに連れて行き、一切を物語った。すると婆おばちゃんは息子の胸に飛び込み、頸くびつ玉たまに抱きつき、接吻くちづけをし、泣いてこう言った。「泥棒どろぼうだろうとかまやしない。なんてっ たっておまえはあたしがこのお腹を痛めたあたしのかわいい息子だ。こんなにあたしが年取った時にまた逢えたなんて、あたしは胸がどきどきして堪たらないよ。ああ、おまえの代父おやぢ様さまは、丘の上のお城にお住まいの殿様は、なん ておっしゃるだろうねえ。——「そうさな」と父親が口を挟んだ。その間、三人ながら一緒に団子くしせをもりもりと退治たいぢしていた。「おまえの代父おやぢ様はおまえとは一切かわりをお持ちになりたかなかろう。おまえの身の上みの上がこんなありさまではのう。野天のてんの絞首台くわいどくでおまえをしたばたさせておしまいになるのが落ちだろうて。——」さて、それでもやはりわたしはお訪ねするつもりです。代父おやぢ様をね」と息子は答え、自家用馬車に馬を繋つながせ、丘の上の城へと登って行った。

殿様は、哀あはれな赤児あかごの時情ときなさけけを掛けて洗せん礼式れいしきに立ち会あってやった自分の名付け子が、こうも堂堂たうたうとした風采ふうさいで前に現れ、素性そせいを明あかすと、大層喜んだ。けれども、世間に出て一体何になったか、との問いに、若い名付け子が、修行を終えた泥棒どろぼうになりました、と返答したのには、これっぽっちも喜ばなかった。そこで、どうすればうまい具合ぐあいに時期を失しせずこんな物騒ものさわな男おとこを厄介やくがい払いできるか、すぐと思案しゆあんに耽ふけった。

「さればな」と殿様は名付け子に言った。「そちがおのれの伎倆わざづをきちんと修行して、敬意けいぎを持って大目おほめに見てやれる大盗賊おほなうどになったのか、それともゆきあたりばつたりの絞首台くわいどくで処刑しゆけいされるようなこそそ泥棒どろぼうになったのか、一つ検分けんぶんいたそうではないか。余あまがこれからそちに課かす三つの試験しけんに合格ごうかくしなければ、そちを処断しゆたんする余あまの領主裁りやうしゆさい

判権<sup>(126)</sup>において間違ひなく縛り首を執行いたす。——「どうか問題をお出しくださいませ、代父<sup>パーテ</sup>のお殿様。わたしはいかなる試験も恐れませぬ」。

殿様はしばらく考えを巡らしてから、こう言った。「よいか。これが三つの試験だ。一つ目はな、余の愛馬を厩から盗み出すこと。余は厩を兵士たちと厩番たちによくよく見張らせよう。だれであろうと厩に忍び込むようなそぶりを入す者は、彼らに打ち殺されるのだ。二つ目は、余が妻と寢床に入っている時、体の下の敷布を、それから妻の指に嵌<sup>は</sup>まつている結婚指環を盗め。だが、覚えておけ、余は装填<sup>まうてん</sup>した拳銃<sup>(127)</sup>を手許に置いておく。三つ目、そして最後のだが——心するがよかろう、これは最も難しい仕事ぞ。司祭<sup>(128)</sup>と教場の師匠<sup>(129)</sup>を教会から盗み出し、二人を生きたまま袋に入れてこの城の煙突の中に吊すのだ。城の門と城内の扉の数はそちが入れるように開けたままにいたしておく」。

泥棒の親方は、かようにたやすい仕事をお言いつけくださいませ、と代父<sup>パーテ</sup>にこやかに礼を述べて立ち去り、早速次の夜、最初の課題の実行に取り掛かった。殿様は愛馬を十分見張らせるためあらゆる手配を講じた。殿様の筆頭馬<sup>ひつちうばてい</sup>丁は馬にまたがっていないなければならない。もう一人の下僕は手綱を、三番目の召使いは尻尾を握らせられ、厩の幾つもの戸口の外に城主は哨兵<sup>しやうへい</sup>を一人づつ配置した。一同、見張りに見張り、凍え上がって、悪態<sup>あくたい</sup>をついた。なにしろ寒かったし、皆喉<sup>のど</sup>がからからになったので。すると一人のくたびれた婆ちゃんが現れた。背負い籠<sup>こご</sup>に小樽<sup>こたる</sup>を入れて担<sup>か</sup>っており、ひどく咳<sup>せ</sup>き込みながら、喘<sup>あえ</sup>ぎ喘<sup>あえ</sup>ぎ城の中庭に入<sup>い</sup>って来たのだ。この小樽を見て兵士たちの心の中に目を覚ましたのは殊<sup>こと</sup>の外魅惑<sup>ほか</sup>的な考え。つまり、もしかしたらあれに火酒<sup>フラントウジン</sup><sup>(130)</sup>が入<sup>い</sup>ってるかなあ、火酒は夜の霜や体に良くない霧の特効薬<sup>た</sup>なものなあ、つてやつ。そこで、こっちへ来て体を温<sup>あた</sup>めなよ、と婆ちゃんを火の傍<sup>わら</sup>に呼び寄せて、小樽の中身を問<sup>た</sup>い質<sup>た</sup>した。すると、いやもう、思った通り。中身<sup>ちゆうしん</sup>は火酒<sup>フアントウジン</sup>、それも強化<sup>たいたい</sup>橙酒<sup>(131)</sup>とかイ



ちよいと結びつけた。手綱を掴んで、隅っこで軒をかいていた殿様お気に入りの御者の手には綱を一本握らせ、厩番には馬の尻尾の代わりに藁縄をあてがった。それから馬に着せてあった馬衣を脱がせ、それを切りこまざいて、馬の脚を包み、ひらりと鞍に飛び乗ると、そら行け、てなしいで——いやあ、あんたに見せたかったねえ——厩と開けつ放しになっていた城門から外へ出て行つた。

翌日明るくなって、殿様が窓から外を眺めると、堂堂たる騎手が疾駆して来るのが見えた。またがっている駒も負けず劣らず堂堂としており、どうも見覚えがあるように思えた。騎り手は馬を止めると、城の窓を見上げて朝

スパニア苦味酒とかいう類の品。またこの小樽たるや、意地悪く木脂や木栓で密封されてなんかおらず、ちいちゃな活栓が付いていたので、この女が火酒を売るにはもってこい。そこで兵士たちは代わる代わる小さい酒杯に一杯買い、厩にいる張り番たちにも、外の中庭じゃあ小麦が花盛り「いい調子でやつとるわい」、と声を掛けたもの。そこで婆様、酒のお酌で大忙し。とうとう小樽はほとんど空っぽになってしまった。ところでこの老女、他でもない、例の大泥棒だった。上手に変装し、火酒に蛮地に産する眠り薬を混ぜておいたのだ。大して時間も掛からぬうちに、兵士たちは一人、また一人と眠りに落ち、厩の番人たちもぼたんと目を閉じた。頃合いやよし、と泥棒は厩の馬の傍に立ち、筆頭馬丁を両腕に抱き留めた。丁度馬から落ちるところだったので。それから静かに横木にまたがらせ、罪のないこの御仁が転がり落ちて怪我などしないよう、



を立てていた。長いこと辺りは深閑としたままだったが、そのうちとうとう、もうかなり暗くなっていた頃、長い梯子が立て掛けられたようなあんばいで、その後間もなく、外の窓辺になにやら人の姿が見え、中に入ろうとする様子だった。「怖がることはないぞ、奥や」と殿様は低声で囁くと、拳銃を手に取

の挨拶をよこした。「お早うございます。代父様。お馬は素晴らしい値打ち物でございますね。」「ええい、くそ忌ましい」と、その馬が自分の牝馬であることに気づいた殿様は叫んだ。「そちは大泥棒だの。なんと、なんと。——さあ、やれい。そちの伎倆をもっと見せるがよい」。殿様は乗馬鞭を手にすると、かんかんに腹を立てて既に向かったが、依然としてぐうすか眠っている番兵たちのへんてこりんな一団が目に入ると、からからと高笑いせざるをえなかった。けれどすぐさま胸の裡でこう考えた。あの盗人めが今夜敷布を盗みにまいったら、やつ頭の弾丸で撃ち抜いてやる。かように物騒な男を身辺に置いておきたくないでな、と。

さて、夜が到来すると、殿様は奥方と床に就いた。傍らには装填した拳銃を一挺とその他さまざま武器を用意し、寝入らずに目を覚ましたままで、何か気配がしな



り、よくよく狙って発射した。そして押し込み強盗の頭のまん真ん中を撃ち抜いたので、相手はぐらりとよろめき、それからすぐに下にどざりと落ちた音が聞こえた。「あれは二度と再び起き上がりはずまい」と殿様。「したがわたしは人目を避けたい。それゆえ騒ぎにならぬうちに急いで梯子を降りて、撃たれた者を片付けてまいる」。奥方はこれを承知したので、背の君は言った通りにした。それからすぐに殿様はまた上がって来て、奥方に告げた。「あれはすっかり死んでおる。したがわたしはあの不憫なやつを墓穴に投げ込む前になにか亜麻布で包んでやりたい。それからあれはそなたの指環のために命を棄てたのだから、それをあれに嵌めてやろうではないか。わたしに指環と敷布を渡しておくれ」。奥方が両方を差し出すと、向こうはまた急いで降りて行った。でもこれは殿様ではなくて、泥棒の親方だったわけ。泥棒の親方は、仕事を済ますために、最寄りの絞首台(その当時ドイツにはまだどの街道筋にも夥しい絞首台があった)から、処刑されたばかりの死骸の綱を切って取り下ろし、それからそれを肩に背負って、梯子を登って来たのだった。中で銃声がすると、死骸を下に振り落とし、素早く梯子を降りて、身を潜めた。そして殿様が降りて来て、自分が撃ち殺したと思った男の始末で忙しくなった隙に、ささっと部屋の奥方のところに上がり、名付け親の声色を使い、指環と敷布を要求したのだった。

次の日の朝、殿様がまたしてもいつもの習慣で窓から外を眺めていると、下を一人の男が歩き回っていた。どうやら亜麻布製品を売り物にしている様子で、少なくとも折られたんだ束を一つ肩に担いでおり、それから綺麗な指環を朝日にびかびか燦めかせている。突然男は上を向いて呼び掛けた。「これはこれはお早うございます。代父様。あなた様も代母様もぐっすりお休みあそばしましたか」。——殿様は雷に撃たれたようだった。昨夜、自らの手で射殺し、同じく我が手で掘った穴に投げ込んだ名付け子が生きて立っているのを目の当たりにしたのだから。そこで奥方にせわしなく指環と敷布のことを訊ねた。「あら、あなた、昨夜私に、それをよこせ、とおっしゃって持つ



ていらしたではありませぬか」と奥方の返辞。「えい、いまいましい。だが、そりゃこのわたしではなかったのだ」と殿様は激昂げきこうした——しかし、この大胆不敵な泥棒は盗もうと思えばもつと他にも盗んで行けたのだ、と考えついて、すぐ気を取り直した。名付け子に窓から拳を振って、こう怒鳴った。「この大泥棒。三番目をやれい。三番目できつとそちは絞首台行きだぞ」。

さて次の夜、教会墓地に奇妙なことが起こった。すぐ近くに住んでいる教場の師匠がまずそれに気づいて、司祭様にご注進した。墓石の上で小さな、燃える火がふらふらと動き回っているのだ。「あれはの、哀れな魂たちじゃよ、師匠」と司祭はがくがくして囁ささいた。その時突然なにやら大きな真つ黒けな姿が教会の出入り口の階段の上に現れ、うつろな声音でこう叫んだ。

「なべて我が許もとに來たれ、なべて我が許もとに來たれ、最後の審判の日が間近なるぞ。

おお、人の子らよ、心静かに祈れかし。

死者たちは既に己おのが骨を集めつつあり。

我とともに天国に往ゆかんとする者あらば、

この袋の内に這はい込むがよい」。



「そうしましよかの」と師匠が齒をがちがちいわせながら司祭に訊いた。司祭「今こそ時である。門限になつてからでは遅い。聖なる使徒ペトルス様(134)がわしらをお呼びじや。こりや間違いない。したが路銀はどういたそう」——「わしは二十クロネ蓄えとります」とせんせはひそひそ囁いた。「わしや非常用に上物トシネン(135)(月桂樹ターラー)百枚貯めてある」と司祭が言つた。「取つて来て、身に着けておくことにしよう」。二人は叫んでそうした。それから恐れわななきながら例の黒い姿に近づいた。これこそ泥棒の親方だった。親方は蝟蛄(136)を買い込んで、それらの背中に燃える小蠟燭(ろうそく)を貼り付けた。これが哀れな魂となつたしだい。それからいかにも僧侶らしい髯、僧服、蓍穂摘みの袋を用意したわけ。で、親方は蓄えた金子を取り上げてから、この袋に二人の黒衣「お坊さん」たちをさらい入れた。それから袋の口を紐で縛ると、それを後ろに引きずりながら村を通り抜けたが、水溜まりに差し掛かると、こう叫んだ。「今紅海(こうかい)を通つておる」。それから小川を越える時には、「今キドロンの小川(137)を通つておる」。更に城の寒寒とした控えの間に入ると、「今ヨシャファトの谷(138)を通つておる」。階段を昇りながら、「ここは既に天国の梯子(139)なるぞ」。そして最後に袋を煙突の中の、豚の塩漬腿肉(くんせい)を燻製にするための鉤(かぎ)に吊り下げた。それから下でもうもうと煙を立て、恐ろしい声で「これぞ煉獄(れんごく)なり。こは数年続かん」と怒鳴り、逃げ去つた。そこで司祭と教場の師匠は「人殺しい」と金切り声を張り上げたので、召使いたちが総出で馳せ集まつた。さて泥棒の親方は威勢良く殿様の許に赴いた。「代父様(だいふちやう)、三つ目の試験も遣り遂げました。司祭と教場の師匠は煙突にぶら下がつております。お差し支えなければ、ご自身であれたちがしたばたもがいているのをご覧になれば、悲鳴を挙げているのをお聴きになれます」。——「おお、この大悪党(だいあくどう)にして大盗賊め、この大悪戯者(おおいたずらもの)にして泥棒の親方中の泥棒の親方め」と殿様は叫び、坊様がたを煉獄から救済するよう、すぐさま命令を出した。「そちは余を打ち負かしおつた。当地から立ち去れい。金貨を一枚遣わす。当地から立ち去つて、二度と余の前に現れるな。そして金を盗んで処刑

されるのはそちの勝手しだいだ」。

「まことにもつて忝かたじけうございます。代父バールテの殿様。さようつかまつります」と泥棒は答えた。「さりながら、殿には、わたしめがまつとうに頂戴いたしました担保をお請け出しにならないおつもりでいらっしやいますのか。ご愛馬には二百クローネ、奥方様の結婚指環と敷布には百クローネ、司祭と教場の師匠の所持金には百二十クローネが必要でございます。頂戴できなければ、わたしめはそれを携えて立ち去ります」。殿様はあわや卒中を起こすところだった。そこで言うよう「愛いとしい名付け子や、何もかも冗談いどごとだったのだよ。そなたはそれらの物を持って行くつもりはなからうのう。わたしはそなたに命を恵んだのではないか。——「さてさて、わたしは立ち去ります。して、ああした物は全部戴かぶいてまいります。泥棒の親方はそう言うなり、立ち去って、馬車に馬を繋つがせ、年老いた父親と母親を中に坐らせ、自分は殿様の馬にまたがり、あの素晴らしい指環を指に嵌はめ、敷布だけは短い手紙を添そえて殿様への贈り物とした。手紙にはこう記してあった。「司祭と教場の師匠にあのひとたちの金子を返してやってくださいまし。さもなくば奥方様をお盗み申し上げます。御ご前ぜん様の恭謙こうけんなる名付け子にして泥棒の親方敬けい白」。

そこで殿様は大恐慌をきたし、損害を負担、それからというもの名付け子と一切関わりを持つとしなかつた。もつともあちらからも何も音沙汰はなかつた。なにしろ泥棒の親方は両親を連れてどこか遠国に移住、立派な名望家になったものだから。

## 解題

出典に関するメモ。テューリンゲンの昔話。口承。M・ハウプト「ドイツ古代雑誌」M. Haupt: "Zeitschrift für deutsches

Alterthum, 第三巻中で G・F・r・シュテルツィング Stertzing によつても語られている。

ゲオルク・フリードリヒ・シュテルツィング Georg Friedrich Stertzing はベヒシュタインの最良の協力者。一八四三年、モーリッツ・ハウプト Moritz Haupt によつて出版された「ドイツ古代雑誌」第三巻で「テューリンゲンのある昔話」なるタイトルの下、泥棒の親方の笑い話の数を披露しており、ベヒシュタインもグリム兄弟もこれに基づいている。グリム兄弟はこの作品を同年中に KHM 第五版に KHM 一九二「泥棒の親方」として採録した。ベヒシュタインの方は、筋の運びで忠実にシュテルツィングに従っている KHM とは異なり、その本領を發揮、からかわれたひとたちの視点で筋を展開、悪戯が成功して初めてトリックの種を明かしている。

中・近世のドイツにおいて手工業に携わる者は、親方の許に住み込んで徒弟として年季奉公をし、一通りの技能を身に付けた、と親方に認定されると、職人の資格で各地の同業の親方衆の許に厄介になる「何年かの旅修行」Wanderjahre を体験する。旅修行を終わり、開業するだけの資金を貯め、一人前の親方として認定してもらおうとする職人は、自分の属する手工業組合(成員は全て親方)に名乗り出て、認定試験を受ける。たとえば靴職人なら入念な細工の靴を、黄金細工職人なら精緻な黄金の指環とかを提出するわけ。これが課題作、すなわち親方認定作品 Meisterstück である。この物語の主人公は泥棒の親方(そんな組合があればだが)として認定されるだけの課題作を三つもこなしたことになる。

KHM 一九二「泥棒の親方」Der Meisterdieb に相当。

AT 一五二五「泥棒の親方」The Master Thief. + AT 一七三七「牧師袋に入つて天国へ」The Parson in the Sack to Heaven. + AT 一七四〇「やりがいの背の蠟燭」Candles on the Crayfish.

原題 Die Probestücke des Meisterdiebs.

## 八 ヘンゼルとグレーテル



昔むかし年を取った木樵きこりがいて、妻と二人の子どもたちと一緒に森の中のみすぼらしい小屋に住んでいた。子どもたちの名はヘンゼルとグレーテルといった。この子たちが大きくなるにつれ、この貧しい一家はますます麴麩パンに

事欠くようになった。ご時世も不景気になる一方で、食べ物ほとんど値上がりし、これは両親ふたおやにはなんともひどい心痛の種。ある晩、二人が固い臥床ふしどに転がり込んだ時、夫がほうつと溜息をついてこう言った。「ああ、おつかあ、わしら、子どもたちをどう養ったものかのう。冬は近づくは、わしら自身にだって食うものは何もねえだで」。すると母親はこう言葉を返した。「あたしは、他にどうしようもない、と思うね。早ければ早いほどいいだが、あんた、あの子たちを森へ連れてって、めいめいに麴麩パンを一切れ渡し、焚き火たきびを燃やしてやり、あとは神様にお任せして、いなくなるのさ」。

「おお、神様。どうしてこのわしがそんなことができよう、わしの実の子たちによ。え、おつかあ」と木樵はおろおろ言った。「そいじやいいさ、今のままでいるこった」と妻はかっとなって口走っ

た。「そいであんだ、あたしら四人皆にお棺こしほを拵こしらえて、子どもたちが飢え死にするのを見るがいいのさ」。

二人の子どもはお腹が減って堪たらず、「乾いた」苔で拵こしらえた小さな寢床の中でまだ目を覚ましていたので、母親と父親の相談と一緒に聴き耳を立てていた。そこでちっちゃい妹はしくしく泣き始めたが、ヘンゼルは妹を慰めてこう言った。「泣くんじやないよ、グレーテル、おいらがきつとなんとかしてみせる」。そうして親たちが寝てしまふまで待ち、こっそり小屋から出て、月明かりで幾つも幾つも白い小石を探し集め、それを大丈夫なところに隠すと、またそおと部屋に戻って来た。それからヘンゼルとちっちゃい妹は間もなくすやすや眠ってしまった。

さて朝になると、両親が相談しておいた通りのことが起こった。母親は子どもたちにそれぞれ麴パ麴パを一切れずつ渡して、こう言った。「これで今日の分全部だからね。儉約するんだよ」。グレーテルは貰もらった麴パ麴パを抱え、ヘンゼルは拾っておいた小石を目に付かないように持ち、父親は木を伐る斧を小脇にし、母親は家を閉めると、水の入った壺を手にしてその後続いた。ヘンゼルは母親の背中に回ったので、道道しんがり殿を務めた。そして何度も何度も小屋の方を振り返り、小屋が見えなくなるとすぐ小石を一つ落とし、何歩か歩くとまた一つ落とし、そうやってずっと続けた。

一同が深い森の真ん中に着くと、父親は焚き火を起こした。子どもたちはそれにくべるのに柴しばをたくさん運んで来た。すると母親がこう言った。「おまえたち、大方おおかたくたびれたろ。これから火の傍で横になって、眠るといい。その間あたしたちは木を伐り倒している。後で戻って来て、おまえたちを連れて帰るからね」。

子どもたちが少しばかりとろとろして目を覚ますと、お日様が高く昇って真昼になっており、焚き火は燃え尽きていた。そしてヘンゼルとグレーテルはお腹が減ったので、あてがわれた麴パ麴パ切れを食べ尽くした。両親は戻って来なかった。それから子どもたちはまた寝入ってしまったが、起きると辺りは暗くなっていた。そして相変わらず

二人だけだった。グレーテルはしくしく泣き始め、恐がりだした。でもヘンゼルは妹を慰めて、こう言った。「怖がることはないよ、妹。神様がおいらたちの傍にいらっしやるもの。それにもうすぐ月が上がる。そしたらおうちに帰ろう」。

それから本当に間もなくなるとも綺麗な月が昇り、家路を辿る子どもたちを照らしてくれ、銀のように白い砂利をきらきら輝かせた。ヘンゼルとグレーテルは手を繋いだ。そしてこうして一緒に歩き続け、怖くもなければ、危ないことにも遭わず、白白明けには父親の家の屋根を茂みの彼方にほのかに眺め、森の小屋に着くと、扉をほとほと叩いた。扉を開いた母親は子どもたちを見てとても驚き、叱ろうか喜ぼうか、とまどったが、父親の方は嬉しがった。こうして二人の子どもたちは、よく帰って来た、と小屋に入れて貰った。

でもろくすっぽ経たないうちに、心配事がまた改めて切羽詰まって来、子どもたちを森に連れて行って、そこに置き去りにし、天の配剤にお任せしよう、というあの相談と取り決めが繰り返された。子どもたちはまたしてもこの悲しい相談を隣の部屋で胸を痛めて聴き、小さなヘンゼルは寢床から起き上がり、今度もびかびか光る小石を探そうとした。でも森の小屋の扉には固く鍵が掛かっていた。母親が気づいていて、扉を閉めてしまったので。でもヘンゼルはしくしく泣いているグレーテルを再び慰めて言った。「泣くんじゃないよ、グレーテルちゃん、神様は道という道を全部ご存じだもの、きつと正しい道を教えてくださるさ」。

森に行くのに皆翌朝早く起きなければならなかった。子どもたちは今度も麴麴を渡されたが、前のよりずっとちいちゃかった。道はずっと森の奥深くまでだった。ところでヘンスラインは隠しの中で麴麴をこっそり細かく砕き、前の小石の代わりにその麴麴屑を道道撒いた。これを頼りに妹と一緒にちゃんとうちに帰れる、と思つて。さて、それから起こったことは何もかもこの前と同じだった。大きな焚き火が作られ、子どもたちはまたまた眠らな



う言った。「さあ、妹、おいらたち、おうちに帰ろうや」ってね。

でもヘンゼルが麴麴のかけらを探しても、もう一つも残っていないかった。だって、森の小鳥たちがありったけね、ありったけ啄んで、美味しく食べちゃったんだもの。そこで子どもたちは一晚中森を彷徨い歩き、間もなく道から外れてしまい、迷いに迷って、とても悲しい思いだった。とうとう柔らかい苔の上で眠ったが、朝白白明けに目を覚ますとお腹が空いて堪らなかつた。それもそのはず、もうこれっぽかしの麴麴もなかつたから。そこで喉の渴きと空腹はただただそこにある綺麗な森の草木の実で鎮めるほかなかつた。こうやって二人がまるつきり見当もつかずに森の中をふらふら迷っている、なんとね、一羽の雪のように真つ白な小鳥が飛んで来て、ずうつと子どもたちの前を飛ぶのだつた。まるで道案内をしようとしているみたいに。そこで子どもたちは喜んで小鳥の後に随いて行つた。突然ちいぢな小屋が見え、小鳥はその小屋の屋根に舞い降り、それを啄んだんだよ。子ども

ければならなかつた。そして目を覚ますと二人つきりしかおらず、両親は決して戻って来なかつた。お昼になると、グレーテルは自分の分の麴麴切れをヘンゼルと分けつこした。なにしろヘンゼルが貰つたのはすっかり麴麴屑になつて途中に散らばっていたからね。それから二人はまたまた寝入つたけれど、夕暮れに目を覚ますと、見捨てられて寂しがつた。グレーテルはしくしく泣いたが、ヘンゼルは安心しきつて、麴麴屑で道を見つげられる、と思つていた。月が昇るまで待ち、それからグレーテルの手を取つて、こ



たちがすぐ近くまで行くと、いやもう嬉しがったり不思議がったり。だつてね、その小屋は麩<sup>パン</sup>でできていて、壁と屋根には卵菓子<sup>パンケーキ</sup>が貼り付けてあり、窓は透き通った氷砂糖の板だった。これは子どもたちにはけっこうなこと。小屋の屋根とそれから窓硝子<sup>ガラス</sup>を一枚壊してぱくぱく食べた。すると突然家の中から声が聞こえた。その声はこう叫んだ。

「ぼりぼり、ぼりぼり、嚙<sup>か</sup>ってる。

あたしのうちをぼりぼりやるのはだれだい。」

子どもたちはそれにこう答えた。

「風だよ、風だよ、

空の子さ。」

そうしてどんどん食べ続けた。だつてさ、お腹が空いて空いて堪らなかつたし、とっても美味しかったからね。

すると小屋の扉が開いて、石みたいに「おっそろしく」年を取った、背中にくぐまった、目の落ち窪んだ婆様で、随分とみっともないのが中から出て来た。顔も額も皺<sup>しわ</sup>だらけ、大



きな、大きな鼻が顔の真ん中にある。それから草の緑の目をしていた。子どもたちは少なからずびっくりしたが、老婆はとても愛想の良いしぐさで、こう言った。「おやまあ、愛しい子たちや、さあ、このかわいいおうちにお入りな、さあさ、お入り。中じゃあずとずと美味いお菓子があるよ」。

子どもたちが喜び勇んで老婆にくつついて中に入ると、食卓に食べ物・飲み物を並べてくれたので、なんとも素晴らしかった。きみなんかの欲しいものが何でもあつたんだよ。ビスケット、扁桃菓子、扁桃砂糖菓子、お砂糖と乳、林檎と胡桃、それからすきな味のお菓子の数数が。子どもたちがひっきりなしに食べ続けてご満悦でいる間に、婆様は上等の羽根布団と百合のように真っ白な敷布で小さい寢床を二つ拵え、子どもたちを中に入れて休ませた。二人は天国にいるような思いで、信心深く夕べの祈りを捧げ、すぐさまやすやすや寝入ってしまった。

でもこの婆様にはごくけしからんわけがあつたのさ。これは邪でいやらしい、子どもたちを喰らう魔女だつたのだ。麩とお菓子のかわいいおうちを使って誘き寄せ、まず食べ物をあてがって太らせてから食べちゃうね。

ヘンゼルとグレーテルのことだつて婆様はそのつもりでいたわけ。婆様は朝早くにまだぐっすり眠っている子どもたちの寢床の前に立つと、獲物を眺めてほくほく喜び、ヘンゼルを寢床から引きずり出すと、幅の狭い格子が嵌まった鶯鳥小屋に担いで行き、悲鳴を挙げないように口に物を詰めた。それが済むとかわいそうなグレーテルを叩き起こし、しゃがれ声でこう怒鳴りつけた。「起きな、このぐうたらあまつちよ。おまえの兄弟は鳥小屋に入られてら。わしらはあれのために上等の食い物を料理しなくっちゃならねえだ。あれが太つて、わしの喰う上等の炙き肉になるよになあ」。

グレーテルは死ぬほどびっくり仰天し、しくしく泣いたり、叫んだりしたが、何の役にも立たず、言われた通り起きて、食事を作る手伝いをしてならなかつた。それからそれを自分で鳥小屋まで運んで、閉じ込められているお

兄ちゃんと一緒に泣くのは許された。この子自体はというと婆様からひどくないがしろなあしらいを受けた。こんな風にしてしばらく時が経った。その間婆様はしげしげ鳥小屋に出掛けちゃあ、ヘンゼルに、指を一本格子の隙間から外に出すようお願いした。太ったかどうか、触ってみて調べようってわけ。<sup>15</sup>でもヘンゼルはいつも細い小骨を突き出した。だもんで婆様は、男の子が上等の食べ物を貰っているのいつまで経っても痩せっぱちのままなのが訝しくってならなかった。とどのつまりこれにうんざりして、グレーテルに「つまるところ、あの子は炙き肉にされるんだよ」と言った。そして小屋の隣に立っている麴麴焼き竈（がま）に盛大に火を焚き、それから麴麴を中に入れた。こうやって焼き立てぱりぱりの麴麴を炙き肉に添えよう、と思つてね。グレーテルはどう考えてもうまい思案が浮かばなかった。そのうちとうとう婆様魔女はグレーテルに、竈の麴麴を出し入れする長柄の木篋（きべら）に乗っちゃって、麴麴焼き竈の中を覗（のぞ）け、と言いつけられた。婆様は、グレーテルが麴麴がこんがり焼けたかどうか見届けられるように、ちつとばかし竈の中に入れるだけだよ、と言つたんだが、実はこの哀れな小娘を早いところまず蒸し焼きにしちまえ、と思つたのだった。

でもその時あの雪のように真っ白な小鳥が飛んで来て、「用心、用心、気をつけて」と歌った。そこで老婆の悪巧みを見透かすことができたグレーテルはこう言った。「あたしがどうやんなきゃならないか、先にお手本を見せてください。そうすればあたしやります」。老婆はすぐさま木篋に乗った。そこでグレーテルは長柄を掴んでぐいと押し、長柄の長さの限り竈の奥に押し込んだ。それからがちゃあん、竈の鉄の小扉を閉め、門を差した。竈はただ途方もなく熱かったから、婆様魔女は中でこんがり焼き上がり、数数の悪業の報いとして醜（みに）たらしい死に方をした。グレーテルはというとヘンゼルのところに走って行き、鴛鴦小屋から解放したので、お兄ちゃんは外へ出ると、嬉しくって堪（たま）らず信実（まこと）のある小さい妹の頸（くび）っ玉にかじりついた。二人は接吻（くちづけ）しあい、嬉し泣きをし、神様に感

謝した。

するとまたあの白い小鳥が現れた。森の他の小鳥たちもたくさん、たくさんやって来た。そして小屋のお菓子でできた屋根に舞い降り、そこにあった巣から小鳥たちがめいめい色とりどりの石を一つとか真珠を一つとか取り出し、子どもたちの許もとに持って来てくれた。グレーテルが前掛エプロンけを拡げて、そのたくさんの石を受け止めた。雪のように真つ白な小鳥はこう歌った。

「これらの真珠と宝石は、

皆麴パ麴ン屑のお礼なの」

そこで子どもたちは、小鳥たちがヘンゼルが道に麴パ麴ン屑を撒いたのをありがたがっているのだ、ということに気づいた。さて、例の白い小鳥はまたまた二人の前を飛んで行った。森から出る道を教えようとね。間もなく子どもたちは大きな川に行き当たり、それ以上先へ進めせず、川を渡ることもできなかった。でも突然一羽の大きく綺麗な白鳥が泳いで来た。で、子どもたちは白鳥に向かって「ああ、綺麗な白鳥さん、二人の小舟になつてちょうだいな」と呼び掛けた。すると白鳥は頭を下げ、岸辺に泳ぎ寄って、子どもたちを次次に向こう岸に渡してくれた。白い小鳥はもうばさばさと先回りして、それからはずうっと子どもたちの前を舞って行



き、とうとう二人は森から抜け出して、両親ふたおやの小さな家の傍に帰り着いた。

年を取った木樵とその妻は狭苦しい小部屋にしよんぼりひっそり坐り込み、子どもたちのことを考えてひどく心を痛め、子どもたちを捨てたことを繰り返して後悔し、ほうつと溜息をついてはこう言ったもの。「あのヘンゼルとあのグレーテルがもう一度、ただの一度でもいいから、帰って来てくれればねえ。そしたらもうもう決して森に置き去りになんかしないにさ」とね。——すると丁度その時、叩く音も聞こえなかったのに扉が開いて、ヘンゼルとグレーテルが本当に部屋に入って来たんだ。なんともかとも嬉しいことだった。その上、子どもたちが持つて帰った大層もない値打ちの真珠や寶石がお目見えすると、家の中じゅうどこもかしこも喜びだらけになり、辛労辛苦はもうそれっきりおしまいになった。

### 解題

出典に関するメモ。口承。グリムにも。Fr・フォン・ポツィ Fr・v・Pocciにより再話され、挿絵を付けられている。同じものが独自にグービッツ Gubitzにより「民衆暦」Volkskalender 一八四四年その他で語られている。

ベヒシュタインがKHM一五「ヘンゼルとグレーテル」Hänsel und Gretelを手本として利用したことはあり得る。ただし、ほとんど同一内容だが、母親が実母であること、子どもたちを棄てたことを父親とともに後悔して嘆いていること、この二点が大きな違いである。KHM一五でも初版から第三版までは実母だったが、第四版から「継母」die Steinhutterという語が挿入された（そしてこの継母は子どもたちの帰還に先んじて死んでしまったことになっている）。これはヴィルヘルム・グリムの編集方針による変改である。KHMでは（前述のごとくのちの版ではだが）主人公に対して否定的行動＝悪をなすのは（例の魔女はもちろんだが、他には）一貫して継母である。ベヒシュタインはこうした編集はしていない。これは嬰兒の時彼を金目当てで引き取った里親の許で味わったその悲惨な境遇が十歳で劇的に好転、母の実兄である伯父とその妻に迎えられ、この養父母の許で暖かい家庭生活を味わったことと決して無関係ではあるまい。

パンを出し入れする長柄の木籠に乗った魔女がパン焼き籠に押し込まれるモチーフ（AT一〇二一）「人喰い鬼の妻が人喰い鬼自身

の竈の中で焼け死ぬ」Ogre's Wife Burned in his own Oven.) はDMBのみであって、KHMにはない。

ホッツィ男爵フランツ Franz Graf von Pucci とごうのはおやうく一八三八年に出版された彼の初めての昔話絵本『ハンゼルとグレーテル』のごと。タービッツ、すなわちフリードリヒ・ヴェルヘルム・タービッツ(一七八六—一八七〇) Friedrich Wilhelm Gubitz は人気のあった文人にして版画家。一八三五—六九年『ドイツ民衆暦』*Deutscher Volkskalender* を出版。一八四四年の版で「森の中の子どもたち」Die Kinder im Walde を披露した。ベヒシュタインは彼の出版物に敬意を払っている。

KHM 一五「ハンゼルとグレーテル」Hänsel und Gretel に相当。

AT 三二七「子どもたちと人喰い鬼」The Children and the Ogre. + AT 三二七 A「ハンゼルとグレーテル」Hänsel and Gretel.

原題 *Hänsel und Gretel*.

九  
赤帽子ちゃんロートケプヒエン



昔むかしのこと、いやもう愛くるしいことこの上もない、かわいい女の子がいたんだよ。お母さんとお祖母ちゃんおばあまはごく氣立ての良いひとたちで、このちいちゃい子をとていとおしがつていた。とりわけお祖母ちゃんおばあきた日には、この子をどうかわいがつたらいいかとんと分らないというしまつで、しよつちゆうあれやこれやの贈り物をしていたけれど、一度赤い天鵞絨ロートで拵しこえたすてきな小さい縁無し帽153をやつたことがあつた。これはこの子に飛び切り愛らしく似合つた。この小さな娘もそれが分かつていたので、他のはもう被からうとしなかつた。そこでだれもかれもこの子を赤帽子ちゃんロートケプヒエンと呼ぶようになった。さてお母さんとお祖母ちゃんおばあは一緒に同じおうちに住んでたわけじゃなく、お互い半時間ほど離れていた。そして二軒の家の間には森が一つあつた。ある朝のこと、お母さんがロートケプヒエンに言つた。「好いい子ねえ、ロートケプヒエン、お祖母ちゃんおばあがね、体が弱くなつちやつてご病氣なの。それでこつちへ来られないのよ。お母さん、お菓子を焼きました。このお菓子と葡萄酒ぶどうしゅを一壘ひとびん、お祖母ちゃんおばあに持つて行つてあげて。そして、お母さんが、くれぐれもお大切に、つて言つてます、つてね。それから、転ばないように、壘ひとびんを割つたりしないように、よおく氣をつけるんですよ。さもないと、ご病氣のお祖母ちゃんおばあに何もあげられないでしょ。森の中では

道草を食わないで、途中はきちんとしてね。それからあんまり長いことお外にいないのよ」。

「何もかも言われた通りにしまあす、お母さん」とルートケプヒエンはお返辞して、かわいい前掛けエプロンを締めて、軽い籠を手に取り、それに葡萄酒の壺とお母さんの作ったお菓子を入れて貰もらい、浮き浮きした足取りで森に入って行った。何の懸念もなくとつとこ歩いていると、狼が一頭向こうからやって来たんだ。無邪気なこの子はまだ狼のことなんぞ知らなかったの、一向怖がらなかった。近づくとも狼は「良い日でありますように」「今日は」、ルートケプヒエン」と挨拶した。——「ご挨拶まことにありがとうございますと存じます、灰色髯ひげのお方」。——「こんなに朝早くつから、どこへ行け、って言われたの。かわいいルートケプヒエン」と狼が訊きいた。「年取ったお祖母ちゃまのここへです。具合が良くないの」とルートケプヒエン。「そこへ一体何しに行くんだね。どうやら何か持ってくるのかな。——「あら、もちろんですわ。うちでお菓子を焼いたのよ。それでお母さんがあたしに葡萄酒も一緒に持たせました。お婆ちゃまに飲んで貰もらおうつて。そうすりやまた元気になるでしょ」。

「わたしにもつと教えておくれ、かわいい、愛いとしのルートケプヒエン。一体あなたのお祖母ちゃんはどこに住んでるんだね。その家の傍を通り掛かったら、一度は表敬訪問をしたいもんだ」。

「あら、ここから全然遠くありません。十五分も掛かんないかな。森を出たところのすぐにおうちがあります。あなた、きつとその傍、通り過ぎたことあるはずよ。アイヒエ(15)の樹(15)が何本もおうちの後ろに立っていて、お庭の垣根には榛はしの実みが生なるんです」。ルートケプヒエンはそうべちゃくちやおしゃべりをした。

うわあ、なんともかわいい、涎よだれの垂れるような榛の実ちゃん——邪よしまで腹黒い狼は考えた。おいら、おまえをぜひとも割ってみなくちゃ。おまえの中身は甘いよなあ、と。——で、まだちよいとルートケプヒエンと一緒に歩きたい、といったふりをして、こう言った。「まあ見てご覧よ、向こうのあっちこっちにやとつても綺麗な花が咲いて

る。まあ聴いてご覧よ、鳥たちがなんともすてきな声で歌ってる。そうさ、森の中つてとても美しいのさ。とても美しいのさ。それからね、この森にやあ良い草が生えてるんだよ。薬草がね。かわいいロートケブヒエンや」。

「あなたつてきつとお医者様でいらっしやるのね。そうでしょ、灰色の小父様」とロートケブヒエンが訊いた。「だって薬草のこと、ご存じなんだもん。あたしにも何か教えてくださらない、病氣のお祖母ちゃまに効くのを」。

「あなたは氣立てもいいけど、頭も全く同じにいい子なんだねえ」と狼が褒めそやした。「そうさ、わたしはお医者みたくいなもんだよ。そらね、ありとあらゆる薬草を心得てる。すぐここに一つ生えてるよ、狼鞞皮がね。あそこの日陰にや狼莓が実ってるし、こつちの日当たりのいい斜面にや狼の乳の花が咲いてる、向こうのあそこにや狼の根っこが見つかるとよ」。

「薬草つて皆『狼』つて名前が付いてるんですか」とロートケブヒエンが訊ねた。

「極上のはね、極上のもものだけにさ。かわいい、優しいロートケブヒエン」と狼は鼻で嗤ってこう言った。だってね、狼のやつが名前を挙げたのは全部毒草だったんでな。でもロートケブヒエンは無邪氣だからそれらの草を薬草と思ひ込んで、お祖母ちゃまのところへ摘んで持って行こうとした。すると狼いわく。

「じゃあ元氣でね、氣立てのいいロートケブヒエン、あなたとお近づきになれて嬉しかった。わたしは急いでおるんで。年寄りで、体の弱い、病氣のご婦人のお見舞いをせにゃならんのだ」。

こう言つて狼は急いでそこを離れ、拍車を掛けられたようにロートケブヒエンのお祖母ちゃまの家へ向かった。その間ロートケブヒエンは綺麗な森の花を摘んで花束にし、薬草だと思ひ込まされたのを集めていた。

ロートケブヒエンのお祖母ちゃまの小さい家に来てみた狼は、鍵が掛かっているのに氣づいて、どんとんと扉を叩いた。老女は寢台から起き上がつて、だれが来たのか覗くことができなかったので、「外にいるのはだあれ」と







声を掛けた。

「ロートケプヒエンよ」と狼は声色を使つて叫んだ。「お母さんが、お祖母ちゃまに、葡萄酒とそれからお菓子も持たせたの。おうちで焼いたのよ」。

「戸口の穴から手を入れて下を探つてご覧。そこに鍵があるよ」と老女が声を張り上げた。狼はその通りにして、扉を開け、うちのなかに入り、小部屋のお祖母ちゃまをいきなりぐいと一呑みにして——その着物を着込むと、寝

台に横になり、掛け布団を引っ張り上げ、寝台の帳を閉めた。しばらくしてやって来たロートケプヒエンは、どこもかしこも開けっ放しなのを見て、とつてもびつくりした。だつて普段だとお祖母ちゃまは錠と門を下ろして閉じ籠もっているのが好きだったのでね。そこで幼心に心配で心配で堪らなくなった。

ロートケプヒエンが寝台の傍に寄ると、年取つたお祖母ちゃまがそこに横になっていて、大きな寝間頭巾を被つており、ろくすっぽ顔が分からなかった。ほんの少し見えたのはなんだかおつかない様子だった。「あら、お祖母ちゃま。なんでそんなに大きなお耳をしているの」とロートケプヒエンが叫んだ。——「おまえの聲がよお聞こえるようにさ」つてのが返辞。——「あら、お祖母ちゃま。なんでそんなに大きなお目をしているの」。——「おまえの顔がよお見えるようにさ」。——「おやまあ、お祖母ちゃま。なんて大き

な毛むくじやらのお手手をしてるんでしょ。——「おまえをよおく擱おつかんで放さないでおけるようにさ」。——「あら、お祖母ちゃま。なんて大きなお口と長い歯をしてるんでしょ。——「おまえをよおく喰くちまえるようにさ」。そしてそう言うなり、残忍な狼が丸ごと寝台からわあつと出て来て、かわいいそんなルートケプヒエンを喰くってしまった。ルートケプヒエンはいなくなっちゃったんだよ。

こうして狼はすっかり満腹したし、婆様の小部屋と柔らかい寝台の中がすこぶるお気に召したので、またごろんと横になると寝入ってしまい、粉挽き小屋の歯車仕掛け歯車仕掛けがぎいぎい鳴つてるように辺り一面に響き渡るいびき駾おびきを聞いた。

たまたま獵師が一人ここを通り掛かった。へんてこな騒音が聞こえたものだから、こう考えた。おやおや、中の気の毒な婆様がひどい駾おびきをかいてござる。死に際きわで喉のどをごろごろいわせてるのかもなあ。こりゃあ一つどうしても入つてつて、どんな具合なのか様子を見届けてやらねばなるまい、と。考えるなり、実行。小さい家に入った獵師はイーゼグリム殿63「狼」が婆様の寝台に寝ているのを発見したが、婆様の姿はどこにも見当たらなかった。「きさまだったか」と獵師は言つて、鉄砲64をさつと肩から外した。「さあ勝負だ。きさま、何度もわしから逃げおつたな。もうたくさんだろうて」。狙いを定めた——が、その時ふと気づいた。——待てよ、婆様がおらん。つまるところこのけだものめがそっくりぐい呑みにしおつたのだろう。もともと小柄で痩せたひとだったでな、と。そこで獵師は撃つのを止めて、鋭い獵刀ヒルシュエンガー65を抜くと、ぐつすり眠っている狼の腹をこく静静と切り開いて行つた。すると中から赤いちいちな縁無し帽が覗のぞいた。それからかわい、愛くるしいことこの上もないルートケプヒエンが出て来た。そしてこう言つた。「お早うございます。ああ、中はなんて暗くつて狭苦せまがしかったことでしょう」。そしてルートケプヒエンの後ろでは年取つたお祖母ちゃまがもがいていた。お祖母ちゃまもまだ生きていたわけ。もつとも狼の

お腹の中は二人にそう広がったわけじゃないけどね。——狼は相変わらず昏昏と眠っていた。そこで二人は石を幾つもの拾って来て、七匹の仔山羊の昔話の母さん山羊がやったのとそっくりそのまま同じに、それを狼の腹に詰め込み、でかっぱらを縫い合わせた。それが済むとそおと隠れた。そして猟師は一本の樹の蔭に入り、狼がやがて何をするか見届けることにした。さて狼は目を覚ますと、寝台から出て、小部屋から出て、小さなおうちから出て、よろよろ井戸へと歩いて行った。だつてとつても喉が渴いたもんで。途中言うには「皆目分からん、皆目分からん。腹ん中じゃごろんごろんと転げとる。石ころみたいにごろごろ、ごろごろ。——これが婆様とロートケプヒエンだつてのやよ」。——そして井戸端に着いて、水を飲もうとしたら、石の重みに引つ張られて、釣り合いを失くし、中に落つこちて、溺れ死んでしまった。そこで猟師は弾丸の節約ができ、狼を井戸から引つ張り上げ、皮を剥いだ。それから三人皆、猟師とお祖母ちやまとロートケプヒエンは、葡萄酒を飲み、お菓子を食べ、心底満足した。お祖母ちやまはまた元気を恢復、達者になり、ロートケプヒエンは空っぽの小籠を提げておうちに帰って、こう考えた。もうもう二度と道から逸れたり、森へ入ったりしないだもん、お母さんが、いけません、つて言ったら、とね。

### 解題

出典をベヒシュタインは挙げていない。が、どうやらKHM二六を手本として利用、場合によっては彼独自の、まことにおどけた改作を施したらしい。

かわい女の子と狼を扱ったフランス民話を素材として教訓譚「ちいぢな赤頭巾」Le Petit Chaperon rouge を編んだシャルル・ペロー（「過ぎし昔の物語あるいはお伽話、ならびに教訓」またの名『鶯鳥おばさんのお伽話』（一六九七）Charles Perrault: *Les Histoires ou Contes du temps passé. Avec Moraltiz (=Morales) / Contes de ma mère l'Oye (=l'Oie)* の二番)は、狼が女の子を食

てしまったところでお話をおしまいにし、かわいい女の子は優しそうな男狼の言葉を信用してはいけません、としている。ベヒシュタインの「うわあ、なんともかわい、涎たばの垂れるような榛の実ちゃん——邪まで腹黒い狼は考えた。おいら、おまえをせひとも割ってみなくちゃ。おまえの中身は甘いよなあ、と」との書き込みはペローの元元の意図を十分意識したものと思われる。それに「ロートケプヒェンは空っぽの小籠を提げておうちに帰って、こう考えた。もうもう二度と道から逸れたり、森へ入ったりしないんだもん、お母さんが、いけません、って言ったら、とね」という結びの教訓もあることだし。

KHM二六「赤頭巾」Rotkäppchen に相当。

AT三三三「大喰らう」The Glutton (「赤頭巾」Red Riding Hood)。

原題 *Das Rotkäppchen*

## 二二 幸せ者のハンス

昔むかしお百姓の倅せがれがあつて、名をハンスと叫ぶた。真つ正直な気性で、逆さまに落つこちた「ぼうつとしてゐる」とは思えなかつた。この男、ある倅せがれい、金持ちのご主人に奉公し、信実まことを籠めて陰日向かげひなたなく何年も仕えた。でもとうとう故郷ふるさとが恋しくて堪たまらなくなり、おつかさんのところに帰りたい、と思ひ立ち、ご主人に、ご奉公のお給金を頂戴したい、と申し出た。ご主人はハンスに黄金きんの塊かたまりを一つやつた。これはハンスの頭ほどの大きさだつた。そうしてハンスの頭はほつそり型の、ごくちいぢやいってたぐいいう類たぐいじゃなかつた。貰もらつたこちららは満足し、その重い黄金塊きんかたまりを布切れにくるみ、膝栗毛ひざぐりげでぼくぼく出立(107)した。でも歩くのは艱難かんなん辛苦で、ハンスはだらだら汗をかいた。なにしろ黄金塊きんかたまりはおつそろしく重かつた。頭に載せようと、肩に担かかごうと、どんな風に持もつたつてさ。

そこへ一人の馬騎うまのりりが軽やかな速歩はやあしでやつて来て、気持ち良さそうにハンスの傍を通り掛かかつた。乗のつてゐるのは鏡のように滑らかな毛艶けつえんの駒。「やれまあ」とハンスは大声を出した。「乗馬乗馬つてのはすばらしい伎倆わざづだて。それができて、馬うまがあればだが」。すると馬騎うまのりりは駒を止めた。ハンスの科白せりふが耳に飛び込んだんでね。そして、一体何をそんなに大骨折おほいこたげつて運はんでゐるのか、と訊きいた。

「ああ、こりゃ黄金きんだだよ。重たい純金じゆんきんだあよ。人間様が辛い駄獸だじゆうになつてゐるだ」と黄金塊きんかたまりを地面に投げ出しながら、ハンスは言いつた。

「やれまあ」と馬騎うまのりり。「あんたが馬うまに乗りたのいんなら、一つ取とつ替かへつこをしようぢやないか。あたしにその厄やくな塊かたまりをよこして、代かわりにあたしの馬うまを取りなよ」。ハンスは相手に二度まで言いわせず、嬉うれしがつて叫こんだ。「決けつまりだ。手打ちと行くべえ」。かくして取り引きは成立。馬騎うまのりりは黄金きんを受け取り、ハンスに見えないところへ



え——一目散に駆け去った。

ハンスはとある旅籠屋はこむらやに入ると、なけなしのヘラー銅貨(86)何枚かを全部使って飲み食いした。なにしろこの牝牛が

さっさと退散した。この取り引きをハンスが後悔する、と思つてね。

さてハンスは馬に攀じ登り、砂煙を上げて駆け出した。ところがそれほど経たないうちに、馬がぴよんと跳ねたので、馬術のできないハンスは胡桃くるみの袋みたいにどざりと落ちた。ろくすっぽ手足を動かすこともできない始末。牝牛を一頭連れて道をやつて来たお百姓が、ひとの乗つていない馬を捕まえ、ハンスが転がっているところへ牽いて来た。

こちらは泣きながら体中の骨をさすっていた。「もうもう二度と馬には乗らねえ。体によくねえ。そこなおめえさまのように穏やかな牝牛メウつこでも持つてればのう。そうすりゃ毎日まいにち乳が飲めてよ、牛酪バタールや乾酪チーズが喰えるだに。落馬することもねえし」。

「やれまあ」と狡賢ずるがしいお百姓いわく「牝牛がおめえさまにそねえに気に入つたと同じで、おらにゃあおめえさまの元気な馬が気に入つた。その馬の代わりにこの牝牛をやるだよ」。

「こいつはけっこうな取っ替えつこだ。そりゃええ」とハンスは言つて、牝牛を受け取り、追いつて行つた。一方お百姓は駒にうちまたがり、そら行ハイディけ、てなしだいで——いやあ、あんたに見せたかつたね

あるから、もう金は要らない、と思つたわけ。そしてどんどん歩き続けた。けれどもその日はすこぶる暑く、ハンスの生まれ在所で母親が住んでいる村までまだ随分道のりがあつたので、ハンスは喉がからからになつた。そこで牝牛の乳搾りをしようとした。ところがひどくぶきつちよにやつたので、乳が出ないばかりか、とうとうハンスは牝牛に一発蹴飛ばされ、ぼうつと気が遠くなつてしまい、なにやらわけがわからなくなつた。ちようどそこへ一人の肉屋が若い豚を一頭連れて通り掛かり、打ち身を拵へたハンスを気の毒がつて具合を訊いてくれ、持つている酒壺から一口飲むよう勧めてくれた。ハンスが自分の冒険を物語ると、肉屋は、そんなに年を取つた牝牛から乳を搾ろうというのは無理だ、そりゃ潰さにやらん、と注意した。「ふうむ」とハンスは言つた。「それにたいした炙き肉もできねえな、婆さん牝牛の肉じゃあよう。こんなにかわいい太つた仔豚を持つてりゃあな。これは旨えし、豪儀な小型腸詰にならあ」。

「な、おまえさん」と肉屋が言つた。この仔豚がそんなに気に入つたんなら、一つ取つ替へつこをやるうじやないか。五分五分でだ。おまえさんが豚、わしが牝牛。これでいいかね。——「ええともさ」。ハンスは心の底から自分の幸せを喜んで、そう言つた。それから浮き浮きと道申しながら考へた。「おいらは正真正銘の果報者だて。損してもしょつちゅう埋め合わせして貰えるんだからの。ああ、この豚肉の炙いたの、どうやって喰おうかのう」。間もなく一人の若者が同じ道をやつて来て、ハンスに追いついた。そちらは肥えた、ずつしり重い、白い鷺鳥を小脇に抱えていた。ハンスに挨拶して、二人はお互いにおしゃべりをし、若者はハンスに、この鷺鳥は子ども洗礼祝いの炙き肉にすることになつてゐる、これはまたと類のない炙き肉になるに違いない、と語つた。そう言いながら、鷺鳥の目方を量つてみる、とハンスに抱かせ、両の翼の下の脂肪の塊に触れさせた。

「この鷺鳥は上物だ。けんとおいらの豚っこだつてばかにはできねえだ」とハンス。「この豚、一体どこで手に入





れた」と若者が訊いた。で、ハンスがついさつき取り引きしたばかりだ、と語ると、相手は子細ありげに辺りを見回していわく「ま、聴きな。内内で一言<sup>ひとこと</sup>。この後ろのとつっきの村でたった今村長が仔豚を盗まれただ。その泥棒がおぬしにそれを売りつけただよ。耕牧地監視人がこれからおらたちに追いついたらよ(おら、あいつの槍があそこの麦の穂の上でぴかりと光ったの、見えたような気がするだ)、おぬしをその泥棒だと思つて取っ捕まえるさ。そしたら、おぬし、その豚連れておっかさんの台所へ行く代わりに、悪魔の台所へ直行だあよう」。

「ああ、神様、神様、神様。おいら、なんて巡り合わせの悪いやつだんべえ」とハンスは悲鳴を挙げた。「親切なおめえさま、どうか後生だからおいらを助けてくんろ」。

「どうだろうな」と若者。「急いでその豚、おらに渡しちやあ。で、おぬしはおらの鷺鳥を受け取るだ。おらはこの界限<sup>かいはい</sup>の抜け道は心得とるで、きつと姿をくらましてみせるだ」。

言うが早いかたちだちに実行、取り引き成立とあいなつて、二回瞬<sup>まばた</sup>く間に若者と豚はハンスの目から見えなくなつた。「おいらはほんとに果報者だあ」とハンスはほくそ笑んで、しばらく鷺鳥を運んだ。耕牧地監視人とかその他追跡してくる者なんぞは皆目見掛けなかつた。ハンスが、上等の炙き肉だとか、採<sup>と</sup>れる脂だとか、「羽根布団になる」羽根だとか、おっかさんの喜びようだとかを胸算用しているうちに、自分の村の一つ手前の村までやって来た。そこでは刃物研ぎ屋<sup>⑦</sup>が手押し車の傍らに立っており、上上のご機嫌と見え、刃物を研ぎ研ぎ口笛を吹き、口笛

吹き吹き刃物を研いで、回転砥石がぶんぶんぶん。そして歌うは陽気な小唄の「くさり」。

「若い研ぎ師がやって来て、

小刀や鉞を研いだとさ。

好きでやってるこの仕事、

まともやるわさこの仕事。

「あなたにや関わりないことさ。

なんで気に病むことがある」。

ハンスは不思議で堪らず鶯鳥を抱えたまんま立ち止まった。そして研ぎ屋の陽気なのをひたすら訝しがった。それから、今日は、と挨拶をして、こう訊いた。「そんなに陽気で楽しそうだと、おめえさま、さぞかしけっこうな暮らし向きだんべえなあ」。

「おお、そりゃそうさね、お友だちどん」と刃物研ぎ屋が言った。「わっちはいつだって陽気だよ。研ぎ師の隠しにやしよっちゅう金があるなあ。そんな鶯鳥を持つてるんだから、あんたもやつぱりそうだろう。その鶯鳥、どうやって手に入れた」。

「豚と取っ替えっここで手に入れた」とハンスが陳述。「それでその豚は」——「牝牛と取っ替えっここで手に入れた」——「それでその牝牛は」——「馬と取っ替えっこの取り引きをした」——「それでその馬は」——「黄金の塊を一つやった。おいらの頭ほどの大きさの」——「おお、このずるめ。それで、その黄金はよ」——「七

年奉公して、給金に貰った。「頭のいいやろうだなあ。あんた、全く申し分はないが、ただ、研ぎ師にならないのが残念だ。わっちのようによ。研ぎ師になりやあ隠しポケットという隠しポケットで金がちやりんちやりん鳴るぜ。それには上等の脳味噌研ぎ砥石がありさえすりゃいい。わっちはまだ一つここに転がしてある。確かにもういくらか使い古しだけだよ、それでもなんとかなるさな(あんたが担いで行きやあな)。これ、あんたが鶯鳥をくれればやるよ。欲しいか」。

「欲しいかって。もちろんだ」とハンスは大喜びで叫んだ。「隠しポケットという隠しポケットに金つちゅうのはすてきな稼業だの」。

性悪の研ぎ屋はお人好しのハンスに古い砥石を一つと、道端に転がっていたごろた石を一つ渡し、ハンスは前へ進んで歩き出した。ごく幸せで。何もかもこうとんとんとうまく行つたちゅうのは、おいら、幸せ皮(17)を被かぶつて生まれたにちげえねえ、と思つて。

でも太陽がきらきら照りつけ、灼やけるように暑かつた。ハンスは腹が減り、喉のどが渴かわき、へとへとにくたびれた。そして二つの石は重かつた。ほとんどあの黄金の塊かたまりくらいに重かつた。そこでハンスは考えた。おいら、どうしてこの砥石をえつさらおつさら運ばにやならんのか、と。道端に小さい井戸があつた。ハンスはそこから水を汲んで喉の渴きを鎮めようとし、屈かがみ込んだ。屈んだ時、石が両方とも井戸の中に転がり落ちた。幸せ者のハンスほど喜んだ者があつたらうか。何もしないのに重たい石からいっぺんに解放されたんだ。嬉しくて嬉しくて跳び上がった。心配事や厄介事は一切なくなり、おいらこの上なく幸せな人間だ、と鼻高高で、心浮き浮き、おつかさんのところに到着した——幸せ者のハンスはね。



解題

出典に関するメモ。口承。グリムの昔話集八三。シャミツンの詩。同じものは画家ホルバインの挿絵でグービッツの『民衆暦』Gubitz Volkskalendar 一八三七年および一八三八年に。

ベヒシュタインは、アーダルバート・フォン・シャミツン（一七八一—一八三八）によって一八三一年に書かれた詩「幸せ者のハンス」 Gedicht „Hans im Glück von Adelbert“ von Chamisso および一八一九年に初めて活字にされたKHMのテキストを共に手本としている。しかし結局は両者共通の源泉である、ある口頭伝承に基づいてアウグスト・ヴァーニッケ August Wernicke によって一八一九年雑誌「占棒」Wünschelrute に報告された物語にも依拠した。なお、ベヒシュタインがグービッツの出版物に敬意を払っていることは周知である（DMB八「ヘンゼルとグレーテル」解題参照）。

この笑い話はおそらくベヒシュタインの好みにびつたりで、彼一流の筆致が明白に看取れる。

KHM八三「果報にくるまったハンス（幸せ者のハンス）」 Hans im Glück に相当。

AT一四一五「幸運なハンス」 Lucky Hans.  
原題 Hans im Glücke.

#### 四一 粉挽きと女の水の精

昔むかし粉挽きがいた。財産は豊かで妻と一緒に満ち足りた暮らしを送っていた。けれども突然災厄に見舞われた。粉挽きは貧乏になり、とどのつまり自分の持ち物と言えるのはせいぜい仕事で坐りこんでいる水車小屋だけとなった。昼間は悩み事で胸を一杯にしてうろろしている、夜横になっても安らぐことはできず、一晚中悲しい物思いに耽<sup>ひ</sup>つて目を覚まし続けるのだった。ある朝明るくなる随分前に起き上がり、家の外に出た。外の方がいくらか気が軽くなるかも知れない、と考えたわけ。水車池の堰<sup>せき</sup>を鬱鬱<sup>うつうつ</sup>として行ったり来たりしていると、突然池の中でざわざわという水音が聞こえた。そちらへ目を向けると、白い肌の女が水面から姿を現すところだった。これは池に棲<sup>す</sup>む女の水の精<sup>セイ</sup>にちがいない、と悟った粉挽きは怖<sup>おそ</sup>くて堪<sup>た</sup>まず、逃げた方がよいのか、動かずにいた方がよいのか、分からなかった。そうやってぐずぐずしていると、女の精<sup>セイ</sup>は声を立てて粉挽きの名前を呼び、どうしてそんなに悲しがつているの、と訊<sup>たず</sup>ねた。親切な言葉を聞いた粉挽きは勇気を出し、これまではとても裕福で幸せだったが、現在はとても貧乏で、気苦労が絶えず、どうしたらよいか途方に暮れている、と物語った。すると女の水の精<sup>セイ</sup>は慰<sup>なぐさ</sup>めの言葉を掛け、以前よりずっとお金持ちにしてあげる、その代わり今<sup>いま</sup>方<sup>がた</sup>お家で生まれたものをくれればね、と約束した。粉挽きは、相手が飼い犬か飼い猫の仔<sup>こ</sup>をほしがっているのだ、と思ったので、くれ、と言われたものを上げる、と承知<sup>しり</sup>し、上機嫌<sup>じょうきげん</sup>で水車小屋に戻った。すると家の戸口から女中が嬉<sup>うれ</sup>しそうな様子で迎えに出て来て、おかみさんがたった今坊ちゃんをお産<sup>う</sup>みになりましたよう、と呼び掛けた。そこで粉挽きは立ちすくみ、こんなに早くとは思ってもいなかった子どもの誕生<sup>たんじ</sup>を喜ぶことができなかった。しょんぼりと家に入り、妻と、それから集まっていた親戚<sup>しんせき</sup>たちに、自分が女の水の精<sup>セイ</sup>にやる、と誓<sup>ちか</sup>ったもの<sup>もの</sup>のことを打ち明けた。「あれがお



れに約束した幸運なんてなにもかも消え失せたつてかまわん」と粉挽き。「子どもを救えさせずればな」。けれど皆が勧めた手立てはただ一つ、生まれた子どもが絶対に池に近づかないよう、用心深く気を配ってやらなければいけない、ということだけだった。

男の子はすすくと成長し、その間粉挽きはだんだんに財産を取り戻し、いくらかも経たないうちに以前より金持ちになった。しかし運が向いて来たのを心底喜ぶことはできなかった。年がら年中交わした取り決めのことを考え、遅かれ早かれ女の水の精が履行を迫るだろう、と恐れていたのだ。しかし一年また一年と過ぎ去り、男の子は大きくなって狩猟の伎倆を習い覚えた。そして粹な獵師になったので、村の領主が雇い入れた。それから獵師はあるうら若い女に求婚し、のんびり楽しく暮らしていた。

ある時狩りをしていて兎を一匹追い掛けた。これがとうとう開けた畑地へ逃げ出したので、熱心に追跡して一発で撃ち倒した。すぐさまはらわたを抜きに掛かったが、子どもの時から、近寄ってはいけない、と戒められていた例の池の近くに来ていることに気づかなかった。間もなくはらわた抜きを済ませた若者は血だらけの両手を洗おうと水辺に歩み寄った。池の中に手を浸した途端、女の水の精がさつと浮かび上がって、濡れた両腕に若者を抱き締め、我が身もろとも水中に引きずり込んだので、波がその頭上でざぶんと打ち合わさった。

狐師が家に帰って来なかったので、その妻はとっても心配になり、探しに行った者が水車池の畔で夫の持っている獲物囊ぶくろが転がっているのを見つけたとなると、夫に何が起こったのかもはや疑わなかった。束の間つかも休むことなく池の周りを彷徨さまよい歩き、昼も夜も悲嘆まにくれて夫を呼び続けた。とうとう疲れ切つてとろりとまどろんだ時、こんな夢を見た。花の咲き乱れる野原を小屋を目指して歩いて行くと、そこには一人の女魔法使い(17)が住んでいて、夫と再会できる、と約束してくれたのだ。朝方目を覚ますと、このお示しに従つて、その女魔法使いを捜し当てよう、と心を固めた。そこで家を出て歩き出し、間もなく花の咲き乱れる野原、それから小屋に着いた。そこには女魔法使いが住んでいた。妻は自分の苦しみと、相手が夢で助言を授けてくれ、自分は救われる、と約束してくれたことを語った。女魔法使いは彼女にこう教えた。満月になったら池の畔に行き、黄金こがねの櫛くしであんたの黒髪を梳とかし、それからその櫛を岸辺に置くのだよ、と。若い狐師の妻は女魔法使いにたつぷり贈り物をして、家路に就いた。

満月までの時の過ぎ方はゆっくりだった。やつとのこと満月になると、狐師の妻は池に出掛け、黄金の櫛で黒髪を梳かし、それが済むと黄金の櫛を岸辺に置き、じりじりしながら水中に目を凝らした。するとざわざわ轟轟とつとつという音が深処ふかみから上がって来て、波が一つ黄金の櫛を岸辺から洗い去った。間もなく夫が水の中から頭をだし、彼女を悲しげに見詰めた。しかしすぐにまた波が一つどぶうんとやって来て、頭は沈んでしまった。一言もしゃべらずに。池はこれまでと同じくまたひっそりかんとなり、月明かりにきらきら輝いた。そして狐師の妻はそれで何一つ前よりましにはならなかった。

どうしようもなく惨めな思いで幾日も幾夜も眠れずにいたが、とうとう疲れ切つてとろりとまどろんだ時、妻は、女魔法使いのことを啓示してくれたあの夢と同じ夢を見た。朝になると彼女はまたしても花の咲き乱れる野原

を指して、あの小屋を指して出掛けて行き、女魔法使いに自分の苦しみを訴えた。老女は彼女にこう教えてくれた。満月になったら池の畔に行き、黄金こがねの横笛を吹き、それからその横笛を岸辺に置くのだよ、と。

満月になると、獵師の妻は池に出掛け、黄金の横笛を吹き、それが済むと黄金の横笛を岸辺に置いた。するとざわざわ轟轟という音が深処から上がって来て、波が一つ黄金の横笛を岸辺から洗い去った。間もなく獵師が水の上を頭をもたげ、どんどん体を上に出し、とうとう胸まで現すと、妻に向かって両腕を上げた。それからまた波が一つどぶうんとやって来て、夫を深処に引き戻した。喜びと希望で胸を一杯にし、岸辺に立っていた獵師の妻は、夫が水中に消えて行くのを目の当たりにして、深い悲嘆に沈んだ。

でもまたまた見た夢が慰めになった。夢は、花の咲き乱れる野原、女魔法使いの小屋へ行け、と指し示してくれた。老女は今度はこう教えた。満月になりしだい、池の畔に行き、黄金の糸繰車を回して糸を紡ぐのだ、それが済んだら糸繰車を岸辺に置くのだよ、と。満月になると、獵師の妻は言われた通り、池の畔に行き、そこに腰を下ろし、黄金の糸繰車を回して糸を紡ぎ、それが済むと糸繰車を岸辺に置いた。するとざわざわ轟轟という音が深処から上がって来て、波が一つ黄金の糸繰車を岸辺から洗い去った。そして間もなく獵師が水の上に頭をもたげ、どんどん体を水の上に出し、とうとう岸に登って来て、妻の頸すかつ玉に縋りついた。途端に水がざわざわ轟轟と鳴り始め、岸を越えてそこいらじゅうに氾濫はんらんし、しつかり抱き合ったままの二人をどっと押し流した。心の底から恐怖に襲われた獵師の妻は老女の助けを求めて叫んだ。すると突然獵師の妻は蟻蛙ひきがえるに、獵師は蛙かえるに変身した。<sup>(18)</sup>でも二人は一緒のままではいられなかった。水は二人を別別の方角へ流し去ったのだ。氾濫はんらんが収まった時、二人は確かにまた人間の姿に戻ったけれど、獵師とその妻はそれぞれ見知らぬ土地に取り残され、お互いの消息はさっぱり分からなかった。獵師は羊飼いになって暮らそうと決心し、その妻も女羊飼いになっていた。そうやって二人は長年自分の





羊の群れの番をした。お互い、遠く離れて。

ところがある時ふと、男の羊飼いが女の羊飼いが暮らしているところへやって来た。彼はこの地方が気に入って、自分の羊群に草を食ませるのに絶好の豊かな土地柄だ、と見て取った。そこで自分の群れをそこへ連れて行き、以前と変わらず番をした。男女の羊飼いは親しい友だちになったが、お互いのことがどうしても分からなかった。

けれども、とある宵のこと、満月の照らす中二人並んで坐り、それぞれの群に草を食ませていた。男の羊飼いは携えている横笛を吹いた。すると女の羊飼いは、自分が満月の折池の畔で黄金の横笛を吹いたあの宵のことをそぞろ想った。そこでもうそれ以上気持ちを抑えきれず、大きな声でどっと泣き出した。男の羊飼いは、どうしてそんなに泣くのか、何が悲しいのか、と訊ねた。女の羊飼いは自分の身に起こったことを全て相手に物語った。すると男の羊飼いは目から鱗が落ちたように、これは妻だ、とはっきり分かり、また、自分のことも分かった。さてそれから二人は心楽しく故郷に戻り、だれ憚ることもなく一緒に平和に暮らした。

解題

出典に関するメモ。上ラウズイツツの口承。モーリッツ・ハウプトによって彼の「ドイツ古代雑誌」に報告されている。この源泉（モーリッツ・ハウプト「上ラウズイツツのある昔話」〈ドイツ古代雑誌〉一二巻。ライプツィヒ／ベルリン 一八四一—六五。第一巻）はベヒシュタインと同様グリム兄弟も利用している。グリムはそれ自体極めて美しい語り口の昔話をより自由に処理しているが、ベヒシュタインはこれに対しごく僅かしか変えていない。

KHM 一八一「池の女の水の精」Die Nixe im Teich に相当。

AT 三二六「水車池の女の水の精」The Nix of the Mill-pond.

原題 *Der Müller und die Nixe*.

## 四七 七匹の仔山羊

昔むかし年取った牝山羊(めやぎ)がいましたね、七匹の小さい仔山羊(こやぎ)を持っていたの。牝山羊はある時森へ行きたいと思(182)い、こう言いました。「好(こ)い子の仔山羊たちや、狼に用心するのよ。そうしておうちへ入れちゃいけませんよ。さもないと、おまえたち皆どっかへ行っちゃうんですよ」。そう言い聴かせてから出掛けたのさ。

しばらくするとね、またおうちの戸口でがたごと音がして、こんな呼び声が聞こえました。「開けてよ、開けて、子どもたち。母さんが森から帰りましたよ」。でも七匹の仔山羊はそのがらがら声で自分たちの母さんじゃないってすぐに分かったんだよ。そこでこう叫びました。「うちの母さんはそんながらがら声じゃないやい」。そうして扉を開けませんでした。

しばらくすると、また戸口でがたごと音がして、とっても綺麗な低い声でこう呼ぶ(183)。「開けてよ、開けて、子どもたち。母さんが森から帰りましたよ」。

でも小さい仔山羊たちが扉の隙間から覗(のぞ)いてみると、二本の真っ黒けな足が見えました。そこでこう叫びました。「うちの母さんはそんなじゃないやい」。そうして扉を開けませんでした。

さあ、そこで狼(おおかみ)は、うん、だってこれ、狼だったんだもん、狼は



ね、急いで水車小屋へ走って行って、足を粉の中に突っ込んだんで、とつても白くなりました。それからまた戸口の外に来て、足を隙間から突っ込んで、またしても低い声で呼びました。「開けてよ、開けて、子どもたち。母さんが森から帰りましたよ」。

そこでね、仔山羊たちは白い足を見て、低い声を聞いたので、これは母さんだ、と思い、急いで扉を開けました。でも、開けたとたん、狼がぱつと跳び込んで来たんだ。ああ、かわいそうな仔山羊たち、なんてびっくりしたことでしょう。どんなに隠れたかったことでしょう。一匹は寝台の下へ、一匹は卓子の下へ、一匹は燧炬の後ろへ、一匹は椅子の後ろへ、一匹は大きな乳入れの後ろへ、そしてもう一匹は振り時計の箱の中へ跳び込んだんだ。でもね、狼は皆見つけちゃってさ、一纏めにしちやつた。それから外へ出て行って、おうちのお庭の一本の木の下に寝っ転がると、ぐうすか眠り始めました。

あとで年取った牝山羊が森から戻って来ると、おうちが開けっ放しで、お部屋が空っぽなのに気づきました。そこですぐに、これはただごとじゃないって思い、大事な仔山羊たちを探し始めました。でも、どこを探しても見つけられませんし、大きな声で呼んでも返辞がありません。最後にお庭に行ってみました。するとね、あの狼はまだ木の下に寝っ転がって、眠っていました。木の枝がどれもぶるぶる震えるほどごうごう軒をかいていましたよ。母さん山羊が狼にもっと近寄ってみると、狼のお腹の中で何かがあるのが分かりました。母さん山羊は喜んで、仔山羊たちがまだ生きてるかも知れない、と考えました。さあ、急いでおうちの中に跳んで入ると、鉞を取って来て、狼のお腹をじよきじよき切り開けました。すると七匹の仔山羊が次次に中から跳び出して来ました。皆まだ生きてたんです。それから母さん山羊は急いでごろた石を七つ取って来て、狼のお腹の中に入れ、元通り縫い合わせました。

狼が目を覚ますと、喉のどが渴かわいていたので、水を飲もうと井戸端に行きました。でも一歩歩くとお腹の中でごろた石がぶつかり出しました。そこで狼はこう言いました。

「腹はらん中で

なにやらがたがたごとごと。

仔山羊どもが入つとる、と思つとつたが、

こりゃあてつきりごろた石だて」。

狼が井戸端に着いて、水を飲もうとしましたら、ごろた石が引つ張り込みましたので、溺なれて死んでしまいました。そこで母さん山羊は仔山羊たちと一緒に井戸端をぐるぐる踊り回りましたよ。

### 解題

出典に関するメモ。至るところでの口承。KHM五。ここではA・シユテーパー Stöber の『エルザス小民衆本』による。

ベヒシュタインはグリム兄弟収録の物語によらないでアウグスト・シユテーパー (一八〇八—一八四) 編著『エルザス小民衆本』 August Stöber: *Elsässisches Volksbüchlein*. Straßburg 1842. に基づいた (DMB 八および DMB 五五でもこれを利用している)。彼はこれをほぼ逐語的に翻訳した。



KHM五「狼と七匹の仔山羊」Der Wolf und die sieben Geißlein に相対。

AT三三三「大喰おおく」The Glutton (「赤頭巾」Red Riding Hood)。

原題 *Die sieben Geißlein*.

## 五一 雪白ちゃん

昔むかし王妃がおりました。子どもがいませんでした。それでとつても寂しかったものですから、一人欲しいなあ、と願っていました。さてある日のこと、王妃は坐つて刺繍ししゅうをしながら、黒檀こくたんの窓枠を眺めていました。雪の日で空から綿屑わたくずのような雪が落ちていました。王妃は深い物思いに耽かへつていたので、指をひどく刺してしまい、血が三滴、真っ白な雪の上に落ちました。するとまた子どもがいけないことを考えずにはいられなくなり、「ああ」と溜め息をつきました。「子どもがいればねえ。血のように赤く、雪のように白く、黒檀のように黒い子が」。

少しして王妃に子どもが授かりました。女の子でした。この子は肌が雪のように白く、頬は血紅色の薔薇ばらのように美しく、髪の毛は黒檀のように真っ黒でした。王妃は喜んで、この子を雪白ちゃんと呼びました。それから間もなくお亡くなりになりました。王は鰥夫ぐもめになつたわけですが、いつまでも鰥夫でいたくなかったので、また別の女のひとと結婚しました。このひとは素晴らしい美貌の豊満な女性でしたが、この上もなく高慢でもあり、自分は世界中で一番の美人だ、と自惚うぬぼれておりました。ことにある魔法の鏡のせいでそう思い込んでいたのです。このひとが鏡を覗のぞいてこう訊きくと、鏡はいつもこう返辞へんじしたのです。



「鏡よ、壁の鏡さん、

国中で一番綺麗なものはだあれ」。

「あなたです、王妃様、あなたが国で一番お綺麗」。

それからね、鏡はおべっかを使ったものではありません。どの鏡でもそうですが、本当のことを答えたのでした。

ちいちゃな雪白ちゃん、そう、この王妃の継娘ままじすめはすくすく成長して、他にこんなのはありっこないこの上もない綺麗な姫君になりました。美しい王妃よりずっとずっと美しくなったのです。雪白ちゃんが七歳になった時、王妃が嘘を言わない鏡にまた訊いたのです。

「鏡よ、壁の鏡さん、

国中で一番綺麗なものはだあれ」。

するとね、鏡はいつものような返辞をしないで、こう答えました。

「王妃様、あなたはここでは一番綺麗、

でも雪白ちゃんはあなたより何千倍も美しい」。



これを聞いて王妃は死ぬほどびっくり仰天し、胸の中で小刀がぐりぐり抉り回されているような気がしました。それにまた王妃の心臓は、無邪気な雪白ちゃんが憎くて憎くてのたうちましました。雪白ちゃんの途方もない美しさをどうすることもできないのですから。さて、王妃は自分の邪で妬み屋の心臓のために夜も昼も休まらなかつたので、お付きの獵師を呼び寄せて、こう言いました。「あの子を、雪白を、深い森の中へ連れて行って、殺しておしまい。わらわの言いつけを果たした証拠として肺臓と肝臓(6)を持ってまいるのだ」。

かわいそうな雪白ちゃんは獵師にくつついて森の中に行かなければなりませんでした。茂みの奥の奥に来ますと獵師は得物を引き抜いて、子どもを刺し貫こうとしました。雪白ちゃんは痛ましく涙を流し、どうか生かしておいてちょうだい、わたしは何も悪いことはありません、と嘆願しました。無邪気な子どもの涙と嘆きは獵師を心の底から揺り動かしたので、こう考えました。おれはどうしてこの綺麗な無邪気な子どもを殺して、おれの良心に重荷を背負わせにやならんのだ。いいや、それより逃がしてやろう。多分野獣どもが喰つちまうだろうが、したら王妃様が神様の御前(7)でその責任を取りやあいんだ、と。そこで雪白ちゃんをどこへでも行きたいところへ行かせてやり、獣の仔を捕まえると、刺し殺し、はらわたを抜いて、肺臓と肝臓を邪な王妃のところを持って行きました。王妃は二つを受け取ると、塩と脂で焼いて、ぺろりと食べてしまい、元通り自分だけが国中で一番の美女になった、と思いついで嬉しがりました。森の中の雪白ちゃんはすぐにびくびく怖くなりました。この子は独りぼっちで茂みを押し分けて歩いたのですし、堅くて尖った石を踏むのは初めてでしたし、着ている物は茨(8)に引き裂かれたのです。ましてや野獣を見たのも初めてだったのですもの。でも野獣たちはこの子に全然害を加えませんでした。雪白ちゃんをじいっと見詰め、それから藪(9)に入ってしまうのでした。こうして女の子は丸一日歩き続け、七つの山を越えました。

その日の夕方、雪白ちゃんは森の真ん中にある一軒のちいちゃなおうちに辿り着きました。そして休ませて貰おうと中に入りました。だってもうくたくたでしたし、とつてもお腹が空いていましたし、とつても喉が渴いていたのです。そのちいちゃな、ちいちゃなおうちの中はなにもかもなんともまあかわいらしく、華奢にできていて、とつてもきちんとしていました。部屋にはちいちゃな卓子が一つ置いてあり、雪のように白い布が掛かり、その上にはどれにも野菜と麩がちよつぱり載ってるちいちゃなお皿が七枚、それからちいちゃな匙が七本、小刀と肉叉が七組、ちいちゃな酒杯が七個ありました。壁際にはどれも純白の敷布と布団被いに覆われているちいちゃな寢床が七つ据えてありました。さてお腹がぺこぺこの雪白ちゃんは七枚のちいちゃなお皿から食べましたが、どれからもちよつぱりしか取りませんでした。それから全部の酒杯からそれぞれ葡萄酒をほんの一滴飲みました。それから休ませて貰おうと七つの寢床の一つに横になってみました、これはちいちゃ過ぎました。そこで別のを試したのですが、どれも寸法が合いません。とうとう七つ目がぴたりだったので、雪白ちゃんはこれにするりと潜り込んで、お布団を掛け、神様にお祈りをして、寝入りました。お祈りを済ませた信心深い子どもの眠り方はそうですが、深く、ぐっすりとね。

そのうちに夜になりました。するとおうちの主人たちが、七人の山小人たちが、めいめい体の前の腰帯のところ(187)に燃えている坑内用洋灯を提げて帰って来ました。そしてすぐさまだれかがおうちに入ったのに気づきました。皮切りに一番目がこう訊ねました。「わしの椅子に坐ったのはだれだ」。二番目が訊ねました。「わしの皿から食べたのはだれだ」。三番目が訊ねました。「わしの麩をちぎったのはだれだ」。四番目「わしの野菜を味見したのはだれだ」。五番目「わしの小刀で切ったのはだれだ」。六番目「わしの肉叉で刺したのはだれだ」。七番目「わしの酒杯から飲んだのはだれだ」。こんな具合に訊ねてから、小人たちは自分たちのちいちゃい寢床の方を振り向いて、

「わしらの寢床ベッドで寝たのはだれだ」と訊きました。でも七番目はそうは訊かないで、「わしの寢床ベッドに寝ているのはだれだ」と訊いたのです。だって、そこには雪白ちゃんが寝ていたんですもの。山の小人たちは洋灯ランプを持ち寄って照らし出し、美しい子どもの姿を見て驚きました。そしてそのままそっとしてやり、七番目の小人はとうとう他の皆が順番にめいめいの寢床ベッドに寝かせました。夜が明けるまでほんの一時間づつね。朝になって曙あけぼのの光がちいちゃな、ちいちゃな小人たちのおうちに射し込むと、雪白ちゃんは目を覚まして小人たちを怖がりました。でも小人たちはとつても優しく親切で、怖がることはない、と言い、なんて名前、と訊ねました。そこで雪白ちゃんは名を名乗り、どんな目に遭あったのか何もかも話しました。すると小人たちはこう言いました。「わしらのところで家の仕事をやるがいい、雪白ちゃん。わしらの食べ物を料理して、わしらの洗濯物を洗って、何もかもきちんと綺麗にさっぱりと片付けて、わしらの寢床ベッドも作るといい」。これは雪白ちゃんにはけっこうなことでしたから、小人たちのために家の仕事をやることにしました。小人たちは昼間は山山の地面の下深くで黄金きんやら宝石やらを探す仕事をし、夕方になると帰って来て、食事をし、めいめいの七つの寢床ベッドで寝るのでした。

ところで一方邪な王妃は意地悪な胸ちゅうの裡うちで、これで自分が元通り一番綺麗になった、と思い込んでほくそ笑んでいました。そしてまたまた鏡を試すことにして、こう訊いたのです。

「鏡よ、壁の鏡さん、

国中で一番綺麗なのはだあれ」。

すると鏡はこう答えました。



「王妃様、あなたはここでは一番綺麗、

でも、七つの山を越えた、

七人の優しい小人たちの許もとにいる

雪白ちゃんはあなたより何千倍も美しい」。

これは王妃様の高慢ちきな心臓にぐっさり刺さったあいくち匕首の一撃でした。さあ、こうなると王妃は、どうしたら雪白ちゃんの命を奪えるか、と昼も夜も考え続け、とうとう変装して自分自身雪白ちゃんのところへ出掛けることを思いつき、顔を作り、みすばらしい衣装を着込むと、ごたまぜの小間物の荷を持ち、七つの山を越え、ちいちな、ちいちな小人たちのおうちに来て来ました。そして扉をほとほと叩き、「ほうい、ほうい、綺麗な品物、買わんかねえ」と叫んだもの。ところで小人たちは前から雪白ちゃんに、知らないひとには注意するんだよ、とりわけあの邪な王妃にはね、と言っておりました。そこで女の子は用心深く外を覗のぞきました。すると女が売りに来た綺麗な小間物類、素晴らしい頸飾くぼりとか飾り紐ひもといったいろんなお洒落道具しゃれが目についたのです。そこで雪

白ちゃんは何の懸念もなく、小間物売りの女をおうちに入れ、頸に巻く飾り紐を買い取りました。すると女は、この紐はどんな具合に巻くといいか教えてあげましょう、と言い、この子のうしろから頸をぎゅうつと絞め上げたので、雪白ちゃんはすぐに息ができなくなり、崩折れて死んでしまいました。「これがおまえの途方もない美しさの報いさ」。そう言い捨てて邪な王妃は立ち去りました。

それから間もなく帰って来た七人の小人たちは、うちの綺麗なかわいい雪白ちゃんが倒れて死んでいるのを見つけ、紐で縊り殺されたことを知り、急いで紐を真つ二つに切り、雪白ちゃんの血の気のない唇に黄金チンキ剤(88)を数滴垂らすと、子どもはかすかに息をし始め、だんだんにまた元気になりました。話すことができるようになった雪白ちゃんが、小間物売りのお婆さんがわたしの頸をひどく絞めたの、と物語ると、小人たちは「その女はあの不実な王妃だったに決まってる。わしらが留守の時は、このちいちゃなおうちに人っ子一人入れないよう用心するんだよ」と叫びました。

悪事を働いてから帰宅すると、王妃はすぐさま鏡の前に行き、こう訊ねました。

「鏡よ、壁の鏡さん、

国中で一番綺麗なのはだあれ」。

すると鏡はこう答えました。

「王妃様、あなたはここでは一番綺麗、

でも、七つの山を越えた、

七人の優しい小人たちの許にいる

雪白ちゃんはあなたより何千倍も美しい」。

そこで王妃の心は慕蛙むきがるのお腹みたくに怒りのあまり膨れあがり、またしても、どうすれば雪白ちゃんの命取りになるか、と昼も夜も考え続けました。そしてやがてまた顔を作り、余所よその土地の衣装を着て、別の女の姿に扮装ふんざうし、毒入りの櫛くしを一つ拵こしらえしました。これを他の小間物と一緒にし、七つの山を越え、ちいちな、ちいちな小人たちのおうちにやって来ました。ここに着くと、再び扉をほとほと叩き、「ほうい、ほうい、綺麗な品物、買わねえ。ほうい」と叫んだのです。雪白ちゃんは窓から外を覗き、「わたし、だあれも中に入れちゃいけないの」と言いました。でも櫛売りの女は「こんな綺麗な櫛がもつたいないねえ」と大声を挙げながら、毒入りの、総体きん黄色にさらさら輝いている櫛を見せびらかしました。すると雪白ちゃんはこの黄金の櫛が心こゝろから欲しくて堪たらなくなり、何の懸念もなく、扉を開けると、小間物売りの女をおうちに入れて、その櫛を買いました。

「さ、それじゃ、この櫛でどうやって髪を梳すき、どんな具合に髪に挿せばいいかも教えてあげようねえ、かわいい、かわいいお嬢ちゃん」。櫛売りの女の偽者はそう言うのと、櫛で雪白ちゃんの髪を梳きました。するとすぐさま毒が効いて、子どもはかわいそうにぱったり倒れて死んでしまいました。「そら、これで多分おまえは生き返るのを忘れることだろうよ」と邪な王妃は言い捨てて、ちいちなおうちから逃げ去りました。

それから間もなく———ありがたいことにね———夕方になったので、七人の小人たちが帰って来、かわいいそうな雪白ちゃんが死んじゃった、と思ったのですが、この子の綺麗な髪の中に毒の櫛を見つけました。急いでこれを抜き



取りますと、子どもは息を吹き返しました。そこで小人たちは、いいかね、絶対にだあれもおうちに入れちゃいけないよ、と改めでよくよく言い聴かせたのです。

うちに帰った王妃はまた鏡の前に行き、こう訊ねました。

「鏡よ、壁の鏡さん、

国中で一番綺麗なものはだあれ」。

すると鏡はこう答えました。

「王妃様、あなたはここでは一番綺麗、

でも、七つの山を越えた、

七人の優しい小人たちの許にいる

雪白ちゃんはあなたより何千倍も美しい」。

そこで雪白ちゃんに対して企んだ邪な策略が何の実も結ばなかったことを知った王妃は、憎しみの激怒に駆られてすっかり我を忘れ、どうしたって雪白は死ななくっちゃならない、そのためには自分の命を投げ出したっていい、と恐ろしい呪いの言葉を吐きました。それから一個の見事な林檎りんごをひそかに毒入りにしました。でも、この上

もなく素晴らしい半分だけをね。そうしてそれに籠一杯の普通の林檎を混ぜ、顔を作り、百姓女のような身なりになると、またしても七つの山を越え、ちいちゃな小人たちのおうちの扉をほとほと叩いて、こう叫びました。「ほうい、見事な林檎を買わんかねえ、買わんかねえ」。雪白ちゃんは窓から外を覗き、「お余所へ行つてちょうだい、おばさん。わたし、扉を開けちゃいけないし、何を買つてもいけないの」と言いました。

「それでもかまわないよ、好い子ちゃん」と偽の百姓女。「あなたが買わなくなつて、あたしや、この見事な林檎は皆片付けちまえるだろうよ。あなたにや一つただであげよう」。

「いいえ、とつてもありがたいんですけど、わたし、何も戴いたけませんわ」と雪白ちゃん。「この林檎に毒がある、とでも考えてるんかね。ほら、ご覧な、あたしや自分で味見するよ。なんてまあ美味しいんだろ。あなた、生涯こんな林檎、食べたことはありませんさ」。こう言いながらまやかかし女は毒入りじゃない方の半分に噛みついてみせたの。だもんで雪白ちゃんはむらむらとなつて、林檎に手を差し伸べました。百姓女は林檎を渡すと、その場を動かないでいました。雪白ちゃんが林檎の綺麗な赤いほっぺをした半分を噛んだとたん、雪白ちゃんの綺麗な赤いほっぺからさあつと血の気が引き、ぱったり倒れて死んでしまいました。

「さて、これでおまえはおだぶつさ、このあまつちよ」と王妃は言い捨てて立ち去り、帰り着くとまた鏡の前に行き、またこう訊ねました。

「鏡よ、壁の鏡さん、

国中で一番綺麗なものはだあれ」。



すると鏡は今度はこう答えたのです。

「あなたです、王妃様、あなただけが国で一番お綺麗」。

こうして邪な王妃の心はすっかり満ち足りました。邪さ、悪巧み、人殺しの罪で一杯の心が満ち足りる限りです  
 けど。

一方七人の優しい小人たちは、帰って来て、うちの雪白ちゃんがすっかり死んでしまっているのを見つけた時、  
 なんてびっくりしたことでしょう。その原因を調べようと思いましたが無駄でした。黄金チンキ剤の靈験れいげんを試してみ  
 ましたが無駄でした。雪白ちゃんは今はもう死んでしまって、そのままでした。

そこで悲しみにくれた小人たちは愛いとしい子どもを棺台に横たえ、その周りに坐り込んで、三日の間涙を流し、そ  
 れから埋葬しようとなりました。でも雪白ちゃんは一向に死んだようには見えず、眠っている女の子のように活き活  
 きしていました。そういうわけで小人たちはこの子を独りで土の下に沈めてしまいう気にはなれず、硝子ガラスで美しい柩ひつぎ  
 を拵え、その中に寝かせ、上に「雪白ちゃん、王女」と記しました。——それから柩を七つの山の一つの頂いたadakiに据  
 え、いつも小人たちの一人がその傍で見張りに立ちました。森の中から動物たちもやって来て、雪白ちゃんを悼いたん  
 で泣きました。梟ふくろうや鴉からすや小鳩こばとがね。

こうして雪白ちゃんは何年も何年も柩の中に横になっていましたが、腐ったりせず、それどころか、降ったばかり  
 の雪のように爽さわやかで真つ白でしたし、頬っぺは元通り咲き立ての血紅色の薔薇ばらみたいに真つ赤になり、髪の毛  
 は真つ黒な黒檀色でした。さて、うら若い端麗な王子が七つの山の中で道に迷って、ちいちな小人たちのおうち



に辿り着き、硝子の柩が据えてあるのを目にし、その上に記された「雪白ちゃん、王女」という碑銘を読みました。——そして、雪白ちゃんの入っている柩をどうか譲ってください、わたしはこれを買いたい、と小人たちに頼みました。

けれども小人たちは「わしらは黄金をたつぷり持っている。あなたの黄金など要らない。それに世界中の黄金と引き替えだつてこの柩を渡しはしない」と言いました。——「それなら贈り物としてください」と王子は懇願しました。「わたしは雪白ちゃんなしではいられない。わたしはこの子をこの上もなく敬い、神聖なものとしてかきずくつもりです。そしてわたしの居城の最も立派な部屋に安置させます。どうかお願いします」。

すると小人たちは憐れに思つて心を動かし、硝子の柩の雪白ちゃんを王子への贈り物としました。王子は柩を従者たちに預け、注意深く運んで行くよう言いつけ、物思いに沈みながら、そのあとを随って行きました。すると従者の一人が木の根っこに躓いたので、柩がぐらりと揺れ、あやうく落としてしまいそうになりました。こんな風に揺さぶられたので、雪白ちゃんがまだ口に含んでいた(なにしろ嚙んだものを呑み込まないうちにはったり倒れたものですから)毒のある林檎のかげらが口の中から飛び出し、雪白ちゃんは一遍に甦りました。

王子は急いでこの子を下に下ろさせ、柩を開くと、両腕に抱いて外に出し、事情を全て語って聞かせました。そしてこうなるといよいよますます愛しくて堪らず、奥方にすることにし、すぐさま父王のお城に連れて行きました。やがて絢爛豪華なご婚礼の準備が調い、高貴なお客様がたがたくさん招待されました。その中には例の邪な王妃もいたのです。王妃はこの上もなく美しくおめかしをして、鏡の前に行き、またこう訊ねました。

「鏡よ、壁の鏡さん、

国中で一番綺麗なものはだあれ」。

すると鏡は答えました。

「王妃様、あなたはここでは一番綺麗、

でも、若い王妃は

あなたより何千倍も美しい」。

王妃は妬みと羨望のあまりどうしたものやら訳が分からなくなり、不安で不安でならず、初めはご婚礼などへ全然行きたくありませんでした。でもそれから、自分より美しい、とされた女を見たくなり、出掛けて行きました。そして大広間に足を踏み入れると、雪白ちゃんがこの上もなく美しい花嫁として立ち現れたのでした。そこで王妃は驚きのあまりくたくたとくずおれてしまいました。

さて雪白ちゃんはこの上もなく美しいばかりでなく、寛大で気高い心の持ち主でしたから、不実な王妃から蒙こうむつた悪事に自分から仕返しをするようなことはありませんでした。でも毒蛇が出て来て、これが邪な王妃の心臓を喰い尽くしたのです。この蛇というのは妬みでした。



**解題**

出典に関するメモ。口承。しかしながら大体は人口に膾炙しているグリムの昔話集ムルヒツ五三から。

KHM五三「雪白姫」*Sneewitchen* (一八二二年にはまだ括弧付きで *Schneeweißchen* なる表題が併記されていた) がベヒシュタインの専らの手本だったことはあり得る。

KHM五三「雪白姫」*Sneewitchen* に相当。

AT七〇九「雪白」*Snow-White*.

原題 *Schneeweißchen*.

五二  
茨姫いばらひめ

昔むかし王と王妃がおりましたが、子どもがありませんでした。でも明けても暮れても、子どもが欲しい、と思いついていました。さて、王妃が沐浴もくよくして、独りつきりになった時、溜め息をついて「ああ、子どもがいたらなあ」と洩こぼらしたことがありました。すると水の中から蛙かえるがびよんと跳び出して、「願ねがった通りになりますよ」と申しました。

そしてそれから王妃はお姫様を授たまかったのです。この子は飛び切り綺麗きれいでした。王は一番の願ねがいが叶かなったのでこの上もなく喜び、盛大な祝宴しゆいを催もよほして、これに友人たちを全て招待しょうたいしました。ところでこの国にも賢かしこい女おんなたちが住すんでいました。このひとたちは魔法まほうを使い、奇蹟きせきを起おこす力を備おそえており、あらゆる民衆たみしゆからとても畏おそれ敬うやまつわられていました。で、王もこのひとたちを招まねいて、黄金きんのお皿わんで食べてもらうことにしました。でもその頃は王侯わうこうだつて今いまみたいにそんなにたくさん「黄金きんの」鉢わんやお皿わんを持もっていたわけじゃありません。この王わうが持もっていたのは一打いちだつ、つまり十二枚じふにまいだつたのですが、賢かしこい女おんな



は十三人いたのです。そこで十二人しか招待できず、十三人目はほったらかしでした。そのことをこの女は悪く取りました。

賢い女たちは王の子にごくごく素晴らしい贈り物をしました。美しさじゃありませんよ。だって、この子にはもうそれはあつたのですから。そうじゃなくて、愛嬌あいきょう、明るさ、優雅さ、優しい気立て、慎ましき、敬虔けいけんさ、淑やかさ、美德、誠実さ、分別、富といったもので、丁度十二番目の賢い女が自分の願い事を口に出そうとした時、招かれなかった十三番目が部屋に入って来、怒りに燃えてこう叫びました。「十五歳になったらこの王女は紡錘つむぎに刺されて倒れて死ぬことになるのだ」。こう言い捨てるなり性悪な妖精アルルメは姿を消し、他の一同は仰天して立ちすくみました。なぜって、賢い女というのは効き目のない言葉は吐かないものですから。ありがたいことに十二番目の賢い女は自分の願い事を口に出していませんでした。なるほどこのひとは、だれか賢い女が、こうなるぞ、と一旦予言した脅しを打ち消すことはできませんでしたが、穏やかなものに変えられはしたのです。そこで大声でこう申しました。「王女はただ深い眠りに落ちるだけ。その眠りは百年間続きますが、それ以上にはなりません」。王はすぐさま国中に布告おふこを出し、これに基づいてあらゆる紡錘は廃止され、その代わりに糸繰車いとくくるくるまが使われることになりました。さてそうこうするうちに綺麗な王女は、美しさでも優雅さでも愛嬌でも温和さでも謙虚さでも貞淑さでも気立ての良さでも美德でも分別でもまたと類のない乙女に成長し、十五歳になると、この姫君を知るだれからも愛されたのです。いや、崇拜された、と言った方がいいでしょう。姫君は丁度この時お城の中をちよつと見て廻りたくなり、幾つもの部屋を通り抜け、とある階段にやって来ました。この階段は古い塔に通じていました。姫君はそれを昇って行くと、小さな扉に辿り着きました。これには古い、錆びついた鍵が差し込んでありました。うら若い乙女は皆そうですが、知りがり屋の姫君はぐるりとその鍵を回しました。すると扉はすぐに開きました。中にはおそ



かりました。お城暮らしたのはとても退屈だったのかも知れませんが、宮廷のひとたち全体、侍従長から厨房の下働きのこぞうまで寝入りました。このこぞうはしくじりをやらかしたので丁度料理番がその髪の毛を引っ掴んで、横つ面にびんたを喰らわそうとしていたんですが。料理番も酒蔵番も、年輩の侍女も若い侍女も、有象も無象も、犬も猫も、屋根の上の鳩も雀も、孔雀も鸚鵡も、壁に止まっていた蠅までも、皆寝ました。竈の火は横になって眠り、風も静まり、何もかも小鼠みたいにひっそりかんとして、小鼠の囁き音もお城中どこでももう聞こえませ

ろしく年を取った婆様が一人坐っていて、紡錘を使ってせつせと糸を紡いでいました。この女はどうやら王の命令を聞いたり読んだりしたことがなかったのでしょうか。それともとっくに忘れちゃったのかも知れません。びよんびよこ踊り回り、上にと下にと旋回する紡錘を見たうら若い王女はとても嬉しがり、さっと紡錘を掴み、自分も糸紡ぎをしようと思いました。そしてそれで手を刺してしまったのです。なにしろ丁度、あの憤慨した賢い女の予言が成就する日だったんですもの。そこで王女は倒れて眠りに落ちました。この同じ眠りは王と王妃、それからお城中にも襲い掛



んでした。なにしろ小鼠も眠っていましたから。そしてこの魔法に掛かった、まどろみのお城にやって来る人間はもはやおりませんでした。お城の周りには巨大な茨の生け垣が生い茂り、毎年何靴尺シューか背丈109が高くなつたので、とうとうお城の一番高い塔より伸びて、旗や風見鶏かざみどりさえ見えなくなり、幅もとても分厚いので、人っ子一人通り抜けられませんでした。そこでこのお城のことはだんだんに忘れられ、茨の向こうにお城が一つあり、その中に魔法の掛かった王女の茨姫が眠っている、もうどれくらい眠っているのか、これからどれくらい眠るのか、だれにも分からない、という言い伝えだけがあるのです。なるほど時時王子たちがやって来て、生け垣を押し通ろうとしました。けれども生け垣はなんとも厚過ぎましたので、お城まで行き着くことはできず、茨の中に絡み込まれたまま、そこで惨めな死に方をしたのです。

さてこんな具合にして百年が過ぎ去り、茨姫がまた目を覚ますはずの時が到来しました。でもだあれもそのことをちゃんと知りませんでした。そこへまた一人王子がやって来ました。このひとは眠っている茨姫の物語のある爺様じいの口から聴いたので。爺様は、王子にこの話は本当です、なにしろてまえの父親と曾祖父109が何度も何度も語って聞かせたのですから、と請け合つたもの。そして爺様は王子を厭いとわしい噂の茨の生け垣のところへ案内しなければなりません。そうなのはまさに茨姫が魔睡に陥つてから百年目の当日でした。茨の生け垣には薔薇ばらの花が一面に咲いていました。こんなことはついぞ覚えがないことでした。それから王子が茨の生け垣を通り抜けることもできました。王子の着ているものに棘とげ一本触れはしませんでした。王子のうしろですぐ生け垣は元通り閉じるのでした。そして王子には何もかも昔のまんまなことが分かりました。風が吹いた跡も雨に濡れた跡もなく、百年という刻ときはまどろんでいるものたちの頭上をごくひっそりと飛び去って行つたのです。白鳥が夢見ている睡蓮すいれんで一杯の静かな湖の上を越えるように。どの蠅もどの小鼠もまだ眠っていました。雄鶏おんどりも雌鶏めんどりも、猫も犬



も、下女げじょも侍女も、侍従も従僕も、眠っていました。それから王も王妃もね。これら全てを目の当たりにして大層驚嘆した王子は、今度は例の塔の中を昇って行きました。そしてあの部屋に入りました。そこには愛らしい茨姫が横たわり、とても安らかに眠っていて、あどけなさという後光、美しさという輝きに神神しく包まれておりました。王子は身を屈かがめて、茨姫に接吻くちづけしました。

するとそのとたん、姫は目を開けました。王子は姫に、起こったことを一切物語り、案内してお城に降りました。すると何もかも目を覚ましました。王も王妃も、小人も小間使いも、犬たちも馬たちも、火も水も、風も風見鶏も。そして料理番は厨房の下働きのこぞうの横っ面に百年前に払うはずでそのまんまになっていたびんたを喰らわせ、全て元通り動きましたのです。それから壮麗なご婚礼、つまり、王子と眠りから救い出された茨姫のご婚礼が執とり行われ、二人は生涯を終わるまで幸せに何不足なく一

緒に暮らしました。

### 解題

出典に関するメモ。口承。グリムの昔話集五〇。E・ノイロイター<sup>メルヒェン</sup> E. Neureuther によるこの上なく機知に富んだ腐蝕技法の挿絵あり。この昔話の冒頭は「雪白ちゃん」Schneeweißchen を想い出させる。

オイゲン・ノイロイター (一八〇六—一八二二) Eugen Neureuther は図案家にして画家としてミュンヘンに在住していた。一八三五年彼は茨姫の昔話を銅板に腐蝕技法で絵にした。ベヒシュタインは直接KHM五〇「茨姫」Dornröschen に依拠したことは確実。グリム兄弟の方はシャルル・ペローの「眠れる森の美女」La Belle au bois dormant 「森の眠れる美女」La Belle dormant au bois と理解すべきであろうか。『過ぎし昔の物語あるいはお伽話 ならびに教訓』またの名「鶯鳥おばさんのお伽話」(一六九七) Charles Perrault: *Les Histoires ou Contes du temps passé. Avec Moralitez (= Moralités) / Contes de ma mère l'Oye (= l'Oie)* の一番に於て遡る。

KHM五〇「茨姫」Dornröschen に相当。

AT四一〇「眠れる美女」Sleeping Beauty.

原題 *Das Dornröschen*.

六二 灰かぶり



男と女が二人の娘を持っていました。それからもう一人継娘もいました。これは男の方の初めてのかわいい子で、ごく敬虔けいけんで良い気立てでした。でも継母まははと義理の姉たち(195)から好かれず、ひどい扱いをされていました。一日中台所で過くわごし、ありとあらゆる台所仕事をこなし、朝早くに起きて、炊事、洗濯、掃除をしなければなりません。夜は夜で屋根裏部屋(196)で寝なくっちゃならなかったのです。でもこの子は、時時かまど竈の暖灰ぬくばいに這い込んで、体を温める方がましだ、と思ったので、どうしたってさっぱりとは見えませんでした。そこで母親と姉たちは灰かぶり(197)と呼ぶようにさせなりました。蔑みと意地悪根性からそういう綽名あだなを付けたのです。

ある時父親は大市(198)に行くため旅に出ることになり、娘たちに向かって、何を土産に持って帰ろうか、と訊たずねました。すると一人は、綺麗な衣装を幾着か、もう一人は真珠と寶石(199)が欲しい、と言いました。でも灰かぶりは一本の緑の榛はしほみの若枝(199)しか望みませんでした。父親はこの望みも叶かなえてやりました。姉たちはおめかしをしたり、飾り立てたりしましたが、灰かぶりは若枝を母親のお墓(200)に植えて、毎日それに自分の涙を注ぎました。すると若枝はとても早く育ち、見事な小さい木になりました。そして灰かぶりが母親のお墓の上で涙を流すたびに、いつも一羽の小鳥が飛んで来て、

この子をいとおしげに見詰めるのでした。

さて、王が祝宴を催して、これに国中の未婚の乙女たちを招くことになりました。王子に乙女たちのうちから花嫁を選ばせようというのです。そこで姉たちは飛び切り魅力的にめかし込み、灰かぶりは姉たちの髪を梳かして、綺麗に編んでやらなければなりません。灰かぶりもどんなにか一緒に舞踏会に行きたかったのですが、そんなことはだあれも考えもしません。とうとう思い切つて、行くのを許してください、と口にする、舞踏会に行きたいなんてよくまあ思いついたものね、だつて綺麗な衣装一つありやしないじゃないの、それに靴さえなくせにさ、とこつぴどく笑い飛ばされました。性悪の継母は急いで鉢一杯の扁豆ひらまめを持って来ると、これを灰の中に入れて、こまかく砕いて、こぼして来ると、「それ、それ、灰かぶり。しなきゃならないことをするんだよ。まず扁豆を選び分けるんだ。そしたら一緒に行つていい。でも、二時間で済ませなきゃいけない」。

かわいそうな子どもはお庭に行つて、榛の木に止まっているいつもの小鳥と、それから鳩たちにも、良いのはお鍋の中に、悪いのは餌袋えがくろの中に選り分けてちょうだい、と呼び掛けました。するとすぐに鳩たちや他の鳥たちが群がって来て、ろくすつば経たないうちに、鉢一杯の扁



豆は綺麗さっぱり選り分けられました。人の好いこの娘が喜び勇んで扁豆を持って行くと、継母は機嫌を悪くし、今度は鉢二杯分の扁豆を灰の中におちまけ、これも二時間で選り分けるんだ、と言いつけました。灰かぶりは泣きました。また小鳥たちに呼び掛けました。今度の仕事もすぐに片付きました。それなのに約束は守って貰えず、笑い飛ばされたのです。だって、あんたは衣装や靴を持ってないじゃないか、それにそのまんまじゃ決してひとさまの前に出されたものじゃない、王子様やその他だれかれがあんたなんぞと踊るような悪いご趣味をお持ちでもねえ。こう言い捨てて高慢ちきな女たちは出掛けてしまい、灰かぶりは悲しみのどん底に突き落とされてあとに残されました。灰かぶりは自分の小さい木のところに行つて、ひどく泣きました。するとあの小鳥が飛んで来て、こう叫びました。

「かわいい子、何が欲しいか言つてご覧、

そしたらおまえにあげるから」。

そこで灰かぶりは木にすが縋りついて言いました。

「かわいい木、ゆさゆさ揺れてちょうだいな、

かわいい木、ぐらぐら揺れてちょうだいな、

綺麗な衣装をわたしに投げて」。

すると綺麗な衣装が一着と高価な靴下と靴がひらりと落ちて来たのです。灰かぶりは急いでそれを身に着けると舞踏会に出掛けました。この娘はとても綺麗でした。いやはや、だれにも覚えがないほど綺麗でした。母親と姉たちでさえこの娘がだれだか分かりませんでした。王子はこのひととしか踊りませんでした。他の乙女たちとなんかじゃなくてね。そしてこの娘が宵になって帰る時、うちまで送ろうとしたのですが、娘はさっと逃げてしまい、お墓の上の木の下に急いで衣装と靴を脱ぎ捨て、お馴染みの灰の中に横になりました。衣装と靴はあつという間に消えました。

こんなことがそれからまだ二回ありました。灰かぶりはいつでも見抜かれず、ますます見事な衣装で舞踏会に行き、王はいつもこの娘としか踊らず、いつも送って行こうとしました。そして三回目に灰かぶりは偶然小さな黄金きんの靴を片方なくしました。王子はこれを拾い上げ、その華奢きゃしゃな作りを讚歎して大声を挙げ、伝令官たちに命じて、この小さな靴に足がぴったり合う乙女を自分の妃にする、と布告させ、試すために馬に乗って家から家を回りに掛かりました。

二人の姉たちはその小さな靴を試してみましたが無駄でした。まるで足がひどく大きくなったみたいでした。そこで王子は、娘が三人いるのではないかと訊ねました。すると主人は「おりますとも、王子様。まだ小さい灰かぶりっ子がおります」と答こたえました。母親はすぐに「あんなのはひとさまの前に出されたものじゃございません」と付け加えました。でも王子は、どうしても会いたい、と言い張りました。灰かぶりが体をさっぱりと洗い清めて部屋に入りますと、いつもの灰色の短い仕事着でしたが、その美しさのために姉たちはまるでかすんでしまいました。それから灰かぶりがあの黄金きんの靴を履はきますと、鑄型はに嵌めたようにものの見事にぴったり合いました。それから王子はすぐさま見分けもつき、「これこそわたしの優雅な踊り相手、わたしの愛いとしい花嫁」と叫ぶなり、灰か

ぶりを抱き締め、お城へ連れて行き、盛大な婚礼の祝宴を催すよう命令しました。

教会に入る時灰かぶりは黄金きんずくめの衣装を身につけ、小さな黄金きんの冠を頭に載せました。姉たちは妬み心ねたで一杯で灰かぶりの右側と左側に付き添いました。すると小さな榛の木から例の小鳥がやって来て、それぞれの片目をつついたので、こちらの目は見えなくなりました。花嫁が教会から出る時、またまた例の小鳥がやって来て、またしてもそれぞれの別の目をつついたので、姉たちは妬みと意地悪さのために生涯失明してしまいました。

### 解題

出典に関するメモ。口承。周知。さまざまに変形。グリムの昔話集メメルヒンの「灰かぶり」Aschenputtelは極めて詳細。冒頭は「胡桃の小枝」Nußkweigen (DMB一六)と類縁あり。その他の幾つかとも。

ペヒシュタインのテキストはKHM二一「灰かぶり」Aschenputtelに依存している。しかしずっと短く、説明箇所がより多く、具体的描写がより少ない。細部を書き込む具体的描写を放棄するなど、およそペヒシュタインらしからぬこと。KHM二一、それも決定版(一八五七)と比較にならぬほど詰まらない。

KHM二一「灰かぶり」Aschenputtelに相当。

AT五一〇A「シンデレラ」Cinderella.

原題 *Aschenbrödel*.



## 六六 杜松の木

昔むかしの大昔、まあ二千年くらい前のこと、裕福な男があつた。男には美しく敬虔な妻がおり、二人は心底愛し合つていた。けれども子どもがなかつた。だが夫婦は子どもが欲しくてならず、妻はこれを願つて日夜何度も祈つたが、とんと全く授からなかつた。家の前には庭があり、ここに杜松の木(20)が一本立つていた。冬のある日、妻はこの木の下に立つて林檎を剥いていた。すると指を切つてしまったので、血が雪の中に滴り落ちた。「ああ」と言いながら溜め息をついた妻は目の前の血を見詰め、深く憂いに閉ざされた。



「どうぞして子どもができればねえ。血のように赤く、雪のように白い子が」。こう口に出した時、またまた心寒しくなつた。まるで本當にそうなりそうな気がしたのだ。そして再び家に入ったのだが、一月経つと雪が消え、二月経つと緑が萌え、三月経つと大地に花が開き、四月経つと森ではありとあらゆる木がひしめき、緑の大枝が伸びて互いに交叉し合つた。鳥たちの囀りさえずりで森全体が鳴り響き、花が木木から落ちるほど。五月目が終わると、妻はまたしても杜松の木の下に立つた。嬉しさのあまり胸がときめき、跪ひざまずいてなすすべも知らなかつた。そし

て六月目が終わると果実はがっしり強くなり、妻はごく平静になった。七月目に妻は実に手を延ばして心行くまで食べた。すると悲しくなり、病気になった。八月が過ぎ、妻は夫を呼び、涙を流してこう言った。「あたしが死んだら、あの杜松の木の下に埋めてください」。そう言うのとすっかり安心して、九月が終わるまで楽しくしていた。すると子どもが誕生した。雪のように白く、血のように赤い子が。この子を見ると、妻はとても喜び、とても喜んだので死んでしまった。

そこで夫は妻を杜松の木の下に埋葬し、なんともひどく泣き始めた。しばらくするとだんだん鎮まったが、まだいくらか泣いた。それから快活さを取り戻し、しばらくするとまたしても妻を娶った。二度目の妻との間に娘を一人儲けた。ところで最初の妻の子は男の子だった。この子は血のように赤く、雪のように白かった。妻は自分の娘を見るたびに、かわいくてかわいくてならなかった。でも、男の子を見るたびに、いつも心臓をえぐられ、どこでもかしこでも自分の行く手に立ちはだかっているような気がした。それからしよちゅう、どうしたら娘に財産を全部やれるか、思い巡らすのだった。こんな考えを吹き込んだのは悪魔だった。さてそこで妻は男の子に大層邪慳になり、隅から隅へと押しこくり、ぶったりこづいたりしたので、子どもはかわいそうにいつもびくびくしていた。学校から帰ってもものんびりできる場所はなかった。

ある時妻が部屋に入ると、小さな娘もあとから上がって来て、「母さん、お林檎一つちょうだい」と言った。「ええ、いいわよ」と妻は答えて、見事な林檎を長櫃から出してやった。さてこの長櫃には大きくて重たい蓋があつて、これには鋭い鉄の錠前が付いていた。「母さん」と娘。「お兄ちゃんには上げないの」。これを聞いて妻はむらむらと癩を立てた。しかし、その気振りを見せずに、「そうね、学校から帰ったらね」と答えた。そして窓越しに男の子の姿が目にと留まると、まるでもう悪魔に取り憑かれたようになった。素早く娘から林檎を取り上げると、



「お兄ちゃんより先に何か貰<sup>も</sup>っちゃいけないわねえ」と言うなり、その林檎を長櫃に投げ込み、蓋を閉めた。さて男の子が戸口から入って来ると、妻はごくにごやかに「坊や、お林檎欲しいかい」と言ったが、目付きはとても憎憎しげだった。「母さん」と男の子。「どうしてそんな怖い目でぼくを見るの。ええ、林檎ちょうだい」。「一緒においで」と言つて妻は蓋を開けた。「自分で林檎を一つお出し」。そして男の子が櫃の中に屈<sup>か</sup>み込むと——悪魔が尻押しして——ばたあん、妻は蓋を勢いよく閉めたので、男の子の頭がもげて、真っ赤な林檎の間に落ちた。とたんに愕然<sup>がくぜん</sup>とした妻はおそろしく不安になつて「なんとかあたしがやつたんじやないことにしなくちゃ」と考え、一階の部屋に降りると箆<sup>たんす</sup>の一番下の抽斗<sup>ひきだし</sup>から白い布を一枚取つて来た。それから頭を胴体の上に据え、何も見えないように頸巻きを巻き付け、玄関の外の子に男の子を坐らせ、片手に林檎を持たせた。

それからすぐにマルレーンヒエン<sup>205</sup>が台所にいる母親のところによつて来た。母親は火の傍に立ち、絶えず鍋の中をかき回していた。「母さん」とマルレーンヒエンが言った。「お兄ちゃんが玄関の外にいて、真っ青<sup>まお</sup>なお顔してるよ。お林檎を手を持つてるの。あたしにお林檎ちょうだい、つて頼んだんだけど、返辞しないの。それであたしとっ



でも怖くなっちゃった。「もう一度行つといで」と母親が言った。「そうしてまた返辞をしようとしなかったら、顔をびしゃりと一つぶってやるよ」とい。そこでマルレーンヒエンは行つて、「お兄ちゃん、あたしにそのお林檎ちょうだい」と言った。でもお兄ちゃんは黙りこくっていたので、マルレーンヒエンが顔を一つぶつと、頭が転がり落ちた。そこでマルレーンヒエンはびっくり仰天して、わいわい泣き始め、母親のところを走つて行つて、こう訴えた。「ああ、母さん、あたし、お兄ちゃんの頭をぶつて落しちゃった」。そして泣いて、泣いて、どうしても泣き止まなかった。「マルレーンヒエン」と母親は言った。「おまえ、なんてことをしたの。でも、ひとに気づかれないように静かにしなさい。こうなったらもうしようがない。お酢で煮てしまいましょ」。そして母親は男の子を運んで行つて、ばらばらに切り刻み、鍋に入れて、酢で煮た。マルレーンヒエンはというとその傍に立って、泣きに泣き、涙は全部鍋の中に落ちた。そこで塩は全然要らなかつた。

どこにいる」。すると母親は酢<sup>シユウ</sup>風味<sup>アルツツ</sup>黒<sup>ツツ</sup>吸<sup>ツツ</sup>い物<sup>ツツ</sup>の入<sup>ツツ</sup>った<sup>ツツ</sup>大<sup>ツツ</sup>きな<sup>ツツ</sup>、大<sup>ツツ</sup>きな<sup>ツツ</sup>鉢<sup>ツツ</sup>を出<sup>ツツ</sup>した。マルレーンヒエンは身も世もなかつた。すると父親は「いったいわしの息子はどこにいる」と繰り返した。「あら」と母親。「あの子はね、田舎の大<sup>お</sup>伯<sup>お</sup>父<sup>お</sup>さん<sup>お</sup>の<sup>お</sup>と<sup>お</sup>ころ<sup>お</sup>に<sup>お</sup>ま<sup>お</sup>い<sup>お</sup>り<sup>お</sup>ま<sup>お</sup>した<sup>お</sup>よ。しばらくあちらにいるんだ、と申しまして。「いったいあつちで何を

ことがある。わしにさよならも言わないで。「あちらへ行きたがりましてね、六週間ほどいてもいいか、とあたしに訊ききましたの。なにせあの子はあちらじゃちやほやされますから。「ああ」と夫。「わしはほんとに悲しい。こいつは感心せんな。やつぱりわしにさよならを言うべきだった」。そうして食べ始め、「マルレーンヒエン。何を泣いてる。お兄ちゃんは大丈夫戻つて来るさ」と言った。「ああ、女房や」と更に言葉を継いで、「この料理はなんて旨うまいだろう。もっとおくれ」。そして食べれば食べるほど欲しくなり、こう言い続けた。「もっとおくれ、おまえたちには何もやらない。こりゃありったけわしのものみたいだわい」。そして食べるに食べ、骨は皆食卓の下に投げ落とし、とうとう全部おしまいになった。ところでマルレーンヒエンは自分の箆へらのところに引き、一番下の抽斗から持つている中で極上の絹の布を取り出し、食卓の下の骨を残らず拾い出し、その絹の布に包み、玄関の外に持ち出して、血のような涙を流した。それからその杜松の木の下のの緑の草の中に骨を置いたが、置いたとたん一遍に気持ちがとても軽くなり、もう泣かなくなった。すると杜松の木自体が動き出し、何本もの大枝が絶えずさあつと開いては閉じ、開いては閉じし、まるでひとがとても喜んで両手をそんな風にするような様子だった。同時に木の間から霧のようななものが立ち昇り、その霧の間から火のようなものが燃え上がり、その火の中から一羽の美しい鳥が飛び出した。鳥は素晴らしい声で歌い、空高く飛んで行った。鳥がいなくなると、杜松の木は以前と同じに戻ったが、骨を包んでいた布は



なくなっていた。でもマルレーンヒエンはお兄ちゃんがまだ生きているみたいにすっかり満足し、ごく朗らかに家の中に戻り、食卓について御飯を食べた。

さて飛び去った鳥は黄金細工師の家の上に止まって歌い始めた。

「母さんがぼくを殺した、

父さんがぼくを食べた、

妹のマルレーンヒエンが、

ぼくの骨を残らず拾って、

絹の布に包んで、

杜松の木の下に置いた。

キーヴィット、キーヴィット、

なんて美しい鳥なんだろ、ぼくは」。

黄金細工師は仕事場に坐って、丁度黄金の鎖を作っていたが、家の屋根に止まって歌っている鳥の唄を聴きつけると、至極素晴らしい、と思った。そこで立ち上がったが、廊下を通り抜ける時、上履き靴を片方落とした。でもちゃんと通りの真ん中まで出て行つた。上履き靴と短か靴下を片方しか履かず、革の前掛けを掛け、片手に黄金の鎖を、もう片手にはやつとこを持つたまま。太陽は明るく通りを照らしていた。黄金細工師は鳥がよく見えるところ立つと、「鳥や」と言った。「おまえはなんて綺麗な声で歌えるんだらう。その唄をもう一度わしに歌っておく

れ。「いいや」と鳥は言った。「二度目はただじゃ歌わない。その黄金の鎖をくれれば、もう一度歌うよ」。「そら」と黄金細工師。「黄金の鎖をやるよ。さあ、もう一度わしに歌っておくれ」。すると鳥は飛んで来て、黄金の鎖を右脚で掴むと、黄金細工師の前に止まって歌った。

「母さんがぼくを殺した、

父さんがぼくを食べた、

妹のマルレーニヒエンが、

ぼくの骨を残らず拾って、

絹の布に包んで、

杜松の木の下に置いた。

キーヴィット、キーヴィット、

なんて美しい鳥なんだろ、ぼくは」。

それから鳥は飛び去り、靴屋の屋根の上に止まって歌った。

「母さんがぼくを殺した、

父さんがぼくを食べた、

妹のマルレーニヒエンが、

ほくの骨を残らず拾つて、

絹の布に包んで、

杜松の木の下に置いた。

キーヴィット、キーヴィット、

なんて美しい鳥なんだろ、ほくは」。

それを耳にした靴屋は上着も引つ掛けないで玄関の外に駆け出し、家の屋根の上を見た。太陽に目を眩くらまされなように片手をかざさなければならなかった。「鳥や」と靴屋は言った。「おまえはなんて綺麗な声で歌えるんだろう」。そうして家の中に声を掛けた。「女房や、まあ出ておいで。鳥がいてね、とにかく綺麗な声で歌うんだ」。それから娘、子どもたちや職人たち、徒弟たちや女中も呼んだ。そこで皆通りに出て来て、鳥を眺めた。鳥はなんとも美しかった。とても見事な赤と緑の羽を持ち、頸くびの周りは純金のよう、両眼はその頭で星さながらきらきらしていた。「鳥や」と靴屋は言った。「さあ、もう一度その唄をあたしに歌っておくれ」。「いいや」と鳥は言った。「二度目はただじゃ歌わない。あんた、何かほくに贈り物をくれなくっちゃ」。「女房や」と亭主。「店に行っておくれ、あの一番上の棚だが、あそこに赤い靴が一足ある。あれを持っておいで」。妻は行って、靴を持って来た。「鳥や」と亭主。「さあ、もう一度その唄をあたしに歌っておくれ」。すると鳥は飛んで来て、その靴を左脚で掴むと、また屋根の上に飛んで行って歌った。

「母さんがほくを殺した、



父さんがぼくを食べた、

妹のマルレーニヒエンが、

ぼくの骨を残らず拾って、

絹の布に包んで、

杜松の木の下に置いた。

キーヴィット、キーヴィット、

なんて美しい鳥なんだろ、ぼくは」。

歌い終わると、飛び去った。右脚に鎖を、左脚に靴を持ち、遠くの水車小屋に飛んで行った。水車はがたごと、がたごと、がたごと、がたごとと動いていた。水車小屋の中では粉挽きの徒弟が二十人入り込んで、石切り仕事の最中で、かっちゃんこっちゃん、かっちゃんこっちゃん、かっちゃんこっちゃん、かっちゃんこっちゃんと切っていた。そして水車はがたごと、がたごと、がたごと、がたごと。鳥は水車小屋の前に立っているしなリッの木の上デに止まって歌った。

「母さんがぼくを殺した」

すると徒弟が一人仕事を止めた。

「父さんがぼくを食べた」

すると二人が仕事を止めて、聴き入った。

「妹のマルレーニヒエンが」

すると四人が仕事を止めた。

「ぼくの骨を残らず拾って」

これで石を切っているのは十三人だけになった。

「絹の布に包んで」

今はもう七人だけ。

「杜松の木の」

今は五人だけ。

「下に置いた」

あと一人だけ。

「キーヴィット、キーヴィット、

なんて美しい鳥なんだろ、ぼくは」

すると最後の徒弟も中止してしまい、尻尾のところを耳にした。「鳥や」と徒弟は言った。「おまえはなんて綺麗うすな声で歌うんだ。もう一度歌っておくれ。「いいや」と鳥は言った。「二度目はただじゃ歌わない。その石の碾ひきき白うすをくれれば、もう一度歌うよ」。「うん」と徒弟。「もしもこれがおいら独りのものだったら、おまえにくれてやるんだが」。すると他の連中いわく「あの鳥がもう一度歌ってくれるんなら、これにくれてやるさ」。すると鳥は降りて来た。そこで二十人の徒弟が手を掛け、梃て子こ棒ぼうを使って石を持ち上げた。鳥は頸をその穴に突っ込むと、襟飾かりらみたいに身に纏まとい、また木の上に舞い戻ると歌った。

「母さんがぼくを殺した、

父さんがぼくを食べた、

妹のマルレーニヒエンが、

ぼくの骨を残らず拾って、

絹の布に包んで、

杜松の木の下に置いた。

キーヴィット、キーヴィット、

なんて美しい鳥なんだろ、ぼくは」。

歌い終わると、翼を上げ、右脚に鎖を、左脚に靴を持ち、頸の周りに石の碾き臼を掛けて、父親の家目指して飛び去った。部屋の中では父親と母親、それからマルレーンヒエンが食卓についているところで、父親がこう言った。「ああ、なんて軽やかでいい気分なんだろう」。「ああ、とんでもない」と母親。「あたしはひどい嵐でも来るように心配だわ」。でもマルレーンヒエンは坐ったままで、泣きに泣いていた。そして鳥が飛んで来て、屋根の上に止まると、父親が言った。「なんとも心が浮き浮きする。外じゃお日様が綺麗に輝いているし、まるで古い知り合いと再会するような気がするよ」。「ああ、とんでもない」と妻が言った「あたしは心配で堪らない。歯ががちがち鳴ってるわ。まるで血管の中に火が燃えているみたい」。でもマルレーンヒエンは隅っこに坐って泣いていた。目に布切れを当てていたが、涙で布切れはぐっしり濡れていた。すると鳥が杜松の木の上に止まって歌った。

「母さんがぼくを殺した」

母親は両の耳を塞いで、両の目をぎゅっと閉じた。なにせ見たくもないし、聞きたくもなかったから。でも歌声はこの上もなく激しい嵐のように耳に轟轟と押し入って来、目は燃え上がって稲妻のようにきらきら光った。

「父さんがぼくを食べた」

「ああ、母さんや」と夫。「あれは美しい鳥だなあ。素晴らしい歌声だ。お日様はあんなにぼかぼか照っている。どこもかしこも五月の花ばかりのような香りがする」。

「妹のマルレーニヒエンが」

マルレーニヒエンは顔を膝につつぷして泣き続けた。が、夫はこう言った。「わしは外へ出て来る。どうしたってあの鳥を近くで見なくっちゃ」。「ああ、行かないで」と妻。「家中がぐらぐら揺れて、炎を上げているような気がする」。しかし夫は外へ出、鳥をじっと眺めた。

「ぼくの骨を残らず拾って、

絹の布に包んで、

杜松の木の下に置いた。

キーヴィット、キーヴィット、

なんて美しい鳥なんだろ、ぼくは」。

歌いながら鳥は黄金の鎖を落とした。鎖はまさしく夫の頸の周りに掛かり、ぴったりで大層よく似合った。そこ

で夫は家の中に戻り、こう言った。「ほら、ご覧。あれはなんていい鳥なんだろう。わしにこんな見事な鎖をくれたよ。とても豪華に見えるじゃないか」。けれども妻は不安でならず、くずおれてしまった。その際帽子が頭から転がり落ちた。と、鳥がまた歌った。

「母さんがぼくを殺した」

「ああ、あれを聞かずに済むように地面の下何千クラフター<sup>(21)</sup>ものところにいられたら」。

「父さんがぼくを食べた」

妻は死んだようになって倒れた。

「妹のマルレーニヒエンが」

「ああ」とマルレーニヒエンが言った。「あたしも外へ出て、あの鳥があたしに何かくれるかどうか見て来る」。そして外へ出た。

「ぼくの骨を残らず拾って、

絹の布に包んで」

すると鳥は靴を落としてよこした。

「杜松の木の下に置いた。

キーヴィット、キーヴィット、

なんて美しい鳥なんだろ、ほくは」。

マルレーンヒエンはすっかり満足して嬉しくなり、その新しい赤い靴を履くと、踊りながらびよんびよん跳んで家に入った。「ああ」とマルレーンヒエン。「あたし、外へ出る時はとっても悲しかったけど、今はとっても楽しい。あれはとにかく素晴らしい鳥だわ。あたしに靴を一足くれた」。「だめだ」と妻は言って、跳び上がった。髪の毛が火炎のように逆立っていた。「まるで世界が滅びるような気がする。あたしも外へ出よう。もしかすると、いくら気分が軽くなるかも知れない」。そして玄関から外へ出ると、どしいん、鳥が石の碾き臼をその頭に投げ落としたので、ペしやんに押し潰つぶされてしまった。その音を聞いて父親とマルレーンヒエンが外へ出ると、そこに霧もやと炎と火とが見え、それが消え失せると、お兄ちゃんが立っていて、父親とマルレーンヒエンの手を取った。三人は皆全く満足して家に入り、食卓について御飯を食べた。

解題

出典に関するメモ。ペヒシュタインは一八五三年、これがKHM四七「杜松の木の話」Von dem Machandelboomの「全く逐語的翻訳」である、としている。

KHM四七は(KHM一九「漁師とその妻の話」Von dem Fischer un syner Fru & De Fischer un sine Fruと共に)北ドイツはポンメルン地方の都市ヴォルガスト出身の画家フィリップ・オットー・ルンゲ(一七七七一八一〇) Philipp Otto Rungeが同地方の方  
言で書いた記録による。

ヨーロッパの諸言語で記されたテキストが多く存在するが、奇妙なことに鳥の唄は全くよく似た詩行で唱えられる。

KHM四七「杜松の木の話」Von dem Machandelboom (Van den Machandelboom) に相当。

AT七二〇「母さんがほくを殺した、父さんがほくを食った。杜松の木」My Mother Slew Me: My Father Ate Me: The Juniper Tree.

原題 *Der Wachholderbaum.*



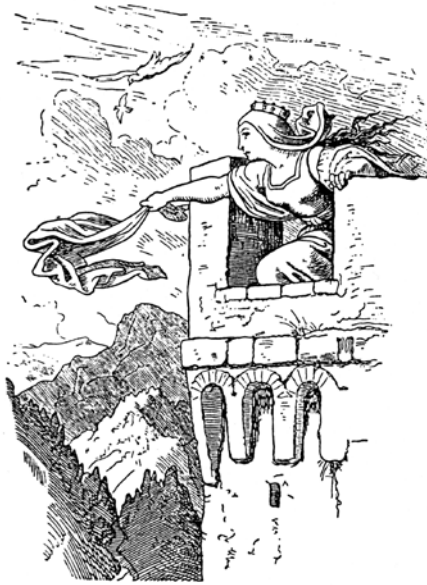
七〇 青髯騎士の昔話あおひげ  
メルヘン

昔むかし権勢ある騎士があつた。財産は夥しく、その居城で栄耀栄華の暮らしをしていた。髯が青かつたので、ひとびとは、青髯騎士、と呼んだ。元来は別の名だつたのだが、本当の名はもう分からない。この騎士は既に一度ならず結婚したことがあつた。しかし、妻たちはどれも次次に早死にした、との噂だつた。いつたいどんな病気でだつたのかついぞ聞かえては来なかつた。さて青髯騎士はまたしても妻捜しを始めた。居城の近くにある貴婦人がおり、二人の麗しい令嬢と何人かの雄雄しい子息を持っていた。そしてこのはらからはお互い同士とても細やかに愛し合つていた。青髯騎士は、令嬢たちの一人と結婚したい、と申し入れたが、二人のどちらもあり乗り気ではなかつた。なにしろ騎士の青い髯が怖かつたし、それに双方離ればなれにならなかつたから。けれども騎士は母夫人と令嬢たち、子息たちを一人残らず壮大で美しい居城に招待し、狩猟、ご馳走、舞踏、勝負事、それから趣向を凝らした祝祭といった愉快な気晴らしと楽しみ事の数を盛りだくさんに提供したので、とうとう姉妹の妹の方が勇氣を出して、青髯騎士の妻になる決心をした。その後間もなく結婚式も絢爛豪華に執り行われた。

しばらくすると、青髯騎士は若妻に向かつてこう言った。「わしは旅に出なければならぬ。ついてはそなたに城全体の差配を任せる。城に附属する一切合切を含め家屋敷のなほ。ここに大部屋小部屋全ての鍵もある。そなたはこのどの部屋なりといつ何時でも足を踏み入れてよい。したが、この小さい黄金の鍵はあのですらりと部屋の並んだ端にある一番奥まった小部屋を閉ざしておる。これにはな、愛しいひと、入ることをそなたに禁じねばならぬ。わしの愛とそなたの命が大切ならばのう。もしそなたがこの小部屋を開こうものなら、この上もなく恐ろしい好奇心

の罰を蒙ろうぞ。わしは我と我が手でそなたの頭を胴から斬り分かつ破目になろう」。妻はこう聞かされてその小さい黄金の鍵を受け取ろうとしなかったが、そうこうするうち仕方なくそうして、きちんと保管することになってしまい、かくなるしだいで、あの小部屋の鍵を開けて中に踏み込むようなことはいたしません、と約束して夫に別れを告げた。

騎士が留守になると、若妻は姉と兄弟たちの訪問を受けた。兄弟たちは狩りに出掛けるのが好きだった。そして城のたくさんの部屋ベヤの素晴らしさが来る日も来る日も喜び勇んで検分された。そうしてとうとう姉妹はあの小部屋のところによって来た。若妻は、自身大層好奇心に駆られていはしたが、断じて開けようとしなかった。けれども姉の方は妹の慎重なのに笑い出し、青髯騎士はただもう依怙地なばっかりにこの中に自分の財宝のうちで一番貴重で値打ちがある品を隠しているのだ、と言った。そこでいくらかびくびくしながら鍵が錠前に差し込まれ、すぐに鈍い音を立てて扉がぱたんと開いた。そして薄暗い部屋の中に見えたのは——なんと恐ろしい光景だったことか——青髯の先妻たちの血まみれの頭だった。先妻たちは今の妻同様好奇心の衝動に抵抗できず、邪な夫が我と我が手でその首を全て刎ねたのだった。死の恐怖に震え上がって、妻たちとその姉は後ずさった。ぎよつとしたあまり妻の手から鍵が落ちた。拾い上げると血の染みが付いていて、こすっても綺麗にならなかった。同じく扉を元通り閉ざすのもうまく行かなかった、なにしろこの錠前には魔法が掛けられていたので。その時城門の外で角笛が鳴り響いて騎馬の者の到着を告げ知らせた。妻はほっと安堵の吐息をついて、あれは狩りから帰るのを心待ちにしていた兄弟たちだ、と思った。けれども青髯自身だったのだ。青髯は早速、妻はどこにいる、と訊ねた。そして若妻が蒼白な顔をして震えながら茫然自失の態で出迎えると、例の鍵のことを問いただした。妻が、鍵を取ってまいります、と言うと、すぐあとから随いて来て、鍵に染みが点点と付いているのを見て取ると、態度をがらりと一変し



て、こう怒鳴った。「妻よ、そちはこうなったら我が諸手で死なねばならぬ。わしはあらゆる権力をそちに委ねた。何もかもそちのものだった。そちの暮らしは豊かで素晴らしかった。しかるにわしへのそちの愛はさほどに取るに足らぬものだったのか。この性悪女め。わしのたった一つのささやかな頼み、わしの初めての指図をないがしろにしたすとはなあ。死ぬ支度をいたせ。そちはおしまいだ」。

愕然とし死の恐怖に一杯となった妻は姉の許に駆けつけ、急いで塔の鋸壁に登り、兄弟たちの帰りを見張り、姿が見えたら、救難の合図を送って欲しい、と頼んだ。それから自分は床に身を投げ、命が助かりますように、と神に祈った。その合間に「姉様、まだだあれも見えないの」と叫んだ。「だあれも」。返るはなんとも情けない答え。

——「妻よ、下りてまいれ」と青髯騎士が怒鳴った。  
「そちの猶与は過ぎたぞ」。

「姉様、だあれも見えないの」と震えながら妻が叫べば、「土煙が——あらあら、あれは羊の群だわ」と姉の返辞。「妻よ、下りてまいれ、さもなければわしが連れに行くぞ」と青髯騎士が怒鳴った。

「お慈悲を。すぐにまいりますから。姉様、だあれも見えないの」——二人の騎士が馬でこちらへやって来る、わたしの合図に気づいたわ、風のように馬を駆っている」。

「妻よ、これからそちを連れに行くぞ」。声が雷のよう

に轟き、青髯が階段を昇って来た。けれども妻は勇気を奮い起こし、扉をがちゃんと閉めると、固く押さえた。そうしながらできる限りの大声で姉ともども助けを求めて叫んだ。そうこうするうち兄弟たちが稲妻のように馳せ付け、猛然と階段を駆け昇り、青髯騎士が扉を力づくでこじ開け、抜き身の剣を持って部屋に押し入ったところに間に合った。短い闘いがあって、青髯騎士は倒れて死んだ。妻は救われたが、己の好奇心が生んだ結果から長いこと立ち直れなかった。

### 解題

出典に関するメモ。口承で広まっている。しかしながらおそらく本が元であるに過ぎないか。多様の異形あり。

ペヒシュタインが「口承で広まっている」と記しているのは、さまざまな場所で民衆の間にこの物語のタイトルや筋が知られているのに行き会う、くらしいの意味か。

この物語の民間への普及に関しては、シャルル・ペローの「青髯」La Barbe bleue（『過ぎし昔の物語あるいはお伽話、ならびに教訓』またの名「鶯鳥おばさんのお伽話」（一六九七）Charles Perrault: *Les Histoires ou Contes du temps passé. Avec Moralitez (= Moralties) / Contes de ma mère l'Oye (= l'Oie)* の三番）の影響が余りにも大き。

KHMでは初版第一部（一八一）に六二「青髯」Blaubartとして採録。ペローとの関連が余りにも明白なため第二版（二八一）からは削除された。

AT三一「巨人殺しと巨人の犬（青髯）」The Giant-killer and his Dog (Bluebeard).（指図に従わなかったために殺されようとしている末妹が祈りのために猶与を求める。彼女の兄弟が動物たちの助けを借りて人喰い鬼を殺し、姉妹たちを救う）／AT九五「強盗婿」The Robber Bridegroom (KHM四〇「強盗婿」Räuberbräutigam) にも幾らか共通点あり。

原題 *Das Märchen vom Ritter Blaubart.*

訳注

(1) ヴァルター・シエルフ Walter Schertl 一九二〇年マインツ(現ラインラント＝プファルツ州)に生まれる。児童文学・昔話<sup>メルヘン</sup>研究者。

(2) ハンス・イェルク・ウター Hans-Jörg Uther. 一九四四年北西ドイツのヘルツベルク・アム・ハルツ(現ニーダーザクセン州)に生まれる。文芸学者・口承文芸研究者。ゲッティンゲンの『昔話百科事典』<sup>メルヘン</sup> *Enzyklopädie des Märchens* 編集スタッフ上級メンバー。ATU編纂者。MdW前編集者。KHM(一九九六、二〇〇四)、『ハウフ昔話集』(一九九九)、DMB(ウターの略称はLBM B)・MDMB(一九九八)などの校訂編纂(いずれもMdWシリーズの一卷)を出版。その他業績は夥しい。

七五 鳥のホールゴットと鳥のモーザム

(3) 蒼鷺<sup>あおぞらぎ</sup> *Fischreier*. 鸛目鷺科蒼鷺属。湖沼、河川、湿原、干潟などに棲息。魚、両棲類、小型哺乳類、甲殻類、昆虫などを食べる。体長八八―九八センチ。翼開張一五〇―一七〇センチ。体重一二―一八キロ。

(4) 鸚鵡<sup>かぶと</sup> *Fischadler*. 鷹目鸚鵡属。主として海岸に棲息するが、湖沼、広い河川、河口にも棲息。主として魚類を食べるが、貝類、爬虫類、小型の鳥類をも食、べることがある。体長五四―六四センチ。翼開張一五〇―一八〇センチ。体重一二―二キロ。

七六 二匹の猿の話

(5) 疥癬<sup>かいせん</sup> *Raute*. *Raude*. *Räude*. *ラウデ*は特に動物の權<sup>かか</sup>る疥癬(皮膚病の一種)。

七七 狼と野猫たちの話

(6) 野猫<sup>おねこ</sup>というか猫<sup>ねこ</sup>というか *Maushund oder Katzen*. 『グリムドイツ語辞典』によれば、十七世紀初頭の文献に, *Maushund oder Wildkatze* <sup>マウスマンツ</sup> <sup>の</sup> <sup>ネコ</sup> <sup>の</sup> <sup>マウスマンツ</sup> <sup>は</sup> <sup>野猫</sup> (= *Wildkatze*) と訳しておいた。

七八 猫と鼠

七九 山鶉やまうす

(7) 山鶉 *Rebhuhn*. これはヨーロッパ山鶉。学名「ペルディクス・ペルディクス」*Perdix perdix*。雉目雉科山鶉属。ヨーロッパから中国西部、北米の一部に棲息。ヨーロッパでは狩猟鳥として最も重視される。その肉は猟鳥獣のうち極めて佳味なものの一つ。全長約三〇センチ。ずんぐりした胴体、短い尾。赤褐色の斑点のある灰色。茂みのある平地、森の縁、葡萄畑を好む。餌は植物性。幼鳥は昆虫をも。

(8) 酌人 *Schenk*. 掌酒子。食事の折主君たる王侯貴族に酒を注ぐ係。毒味役でもあったろう。近臣中の近臣である。王としては、この男なら信頼できる、と考えたに違いない。DMB三三「風呂屋の国王」にも出る。

八〇 ぞこつする

(9) 逆さまに落っこちた *auf den Kopf gefallen*. 「頭から先に落ちた」。利口とはいえない人を、あれは赤ん坊の時、抱いていた子守などにうっかり頭から先に落とされ、頭を打ったのだらう、として、遠回しに「魯鈍だ」とからかう時の言い方。

(10) 頭の前に板っ切れがぶらぶらがついてた *hatte ein Brett vor dem Kopf*. *ein Brett vor dem Kopf haben*, は、ルツ・レーリヒ編著『諺的慣用句事典』Lutz Röhrich: *Lexikon der sprichwörtlichen Redensarten* によれば、農民の所帯から出た慣用句とのこと。十七世紀末の文書に「強情っぱりの牡牛も目の前にぶら下がる板切れ一枚で目眩まじされる」とある。

(11) ヘンスヒェン *Hänschen*. 「ハンス」*Hans* の縮小形（「ヘンゼル」*Hänsel* も同じ）。ハンスちゃん、ハンスぼうず。ヨハンネス *Johannes* に由来するハンスはドイツ語圏で最もありふれた男性名だが、ありふれているだけに、「やつ」「やろう」の意にもなり、「もし……なら、おれはハンスと呼ばれたっていい」*Ich will Hans heißen, wenn……* という慣用句では「たわけ」「愚か者」の代名詞である。

(12) マッテス *Matthes*. 「マティーアス」*Matthias*（ハブライ語の男性名「マタイ」＝「神の贈り物」に由来）の訛った形。

(13) 卸し金 *Reibsen*. 粉チーズにするチーズ、パン粉にする固くなった小麦パン、じゃがいも、西洋山葵などを搗き卸すのに用いる。

(14) 教会の聖物保管係兼教場の師匠 *Küster und Schulmeister*. 「キュスター」*Küster*（ラテン語 *custos*〈番人〉から）は福音派（新教）における教会堂の管理人（「教会の奉仕者」*Diener der Kirche*）。建物（鐘楼を含む）の鍵類と聖物の保管に当たる。カトリック（旧教）教会においては「メスナー」*Mesner*（ラテン語 *mansionarius*〈家の番人〉から）と称し、聖堂世話係。福

- 音派の場合と同じく建物の鍵類と聖物の保管に当たたる。新旧両派いずれにあつても、ドイツ語圏においては十八世紀末まで村の児童に初歩的教育を与える先生役を副業として務めた。更に、鐘撞き、墓掘り人、墓守、堂守、洗礼帳簿係のような細分化された役割が加わり、これのいづれかを兼ねたり、他の人間がいずれかを専務、あるいは臨時に処理したり、ということになつたようだ。この物語の「教会の聖物保管係兼教場の師匠」には妻がある。それゆえ、カトリックの聖職者(副助祭以上)や修道士でないことは明白。カトリック教会でも司祭に委任された平信徒(俗人)の聖物保管係はあり得るが、その場合、この物語では村の学校の先生を兼ねているのだから、村人の中でも一目置かれていられる存在である。福音派教会であれば、牧師に委任されたしかるべき平信徒。従つて新旧いずれの教会であつても、この足を折られたかわいそうな御仁は村でまずまずの地位にある平信徒と思われる。
- (15) 晩鐘 Abendlocke. 修道院および教会で夕刻定時に鳴らされる鐘。晩禱(夕べの祈り)に誘う鐘。一日の終わりを告げる。夏季にはたいてい八時〔ドイツ語圏ではまだまだ明るい〕が、冬季には七時〔ドイツ語圏では真つ暗〕。ただし、日曜および祝祭日にはもっと早い。これ以降日の出までが魍魎(ワウワウ)が徘徊する夜の時間帯。
- (16) 人形芝居のカスパー Kasper im Puppenspiel. 「カスパー」とあるが普通は縮小形の「カスベルレ」Kasperle。ドイツの人形芝居の人気者／道化役。英国の「パンチ」Punch、フランスの「ギニョール」Gigoulに相当する。ドイツの人形芝居の出し物としては中世には聖書の物語が好まれたが、間もなく民衆本(「ファウスト博士」Dr. Faust)や「ゲノフェーファ」Genovevaなども素材を提供するようになった。これらの人形芝居におけるカスベルレの活躍ぶりについては、テオドール・シュトルム(一八一七—一八八八)の美しい短編「ポールのポップペンシユペラー(人形使いのポール)」Theodor Storm: Pole Poppenspielerに見事に描かれている(同書では「カスベルル」Kasperl)。
- (17) 妙ちきりんなやろう Labuzel. 妖怪、お化け、怖い男。
- (18) 丁度数は七人だ。ほら、よく言うように、絞首台一杯だ。 gerade ihrer sieben, was man so sagt: ein Galgen voll. 「絞首台一杯」ein Galgen vollとは「七人」「七つ」という意味の慣用句。一つの絞首架には七人の犯罪者分の場所があつたことに由来する。
- (19) 吹きっ曝しの絞首台の下に unterm lichten Galgen. かつての「リヒト」licht(普通「明るい」の意)という形容詞は「ガールゲン」Galgenには付きものだった。ルッ・レーリヒ編著『諺的慣用句事典』によれば、もしかすると、絞首台が通常町から離れた丘の上に設けられたことに由来するのもかも知れない、とのこと。そこで「吹きっ曝しの」と訳語を当てた。
- (20) 諺に言うようになんともおぞましい abschaulich, wie das Sprichwort sagt. この諺未詳。どなたか、高教を。

- (21) やどなしおんなや同じ、ほろきれおんな同じ gleiche Lumpen, gleiche Lappen. 宿無し(浮浪人)も、襤褸ぼろきれもそれぞれ皆似たり寄つたり。
- (22) 荷馬車の御者 Fuhrmann. 荷馬車を御してしよちゅう街道を往復している運送業者である。従つて、やがて言及する旅籠に泊まったり、飲食したりして、どうもひどくほりやがる、とかねてからおもしろくなく思っていたので、このとんまな旅の若者をからかうと同時に、旅籠の主人をも皮肉つたしだい。
- (23) つけ Kriede. 元来の意は「白墨」。客が馴染みの店で現金でそのつど支払わず借りておく場合、売り主はその売掛金の金額を黒板に白墨で「つけ」ておいた。そこで客から言うのと「借り」、すなわち「つけ」をこう称した。
- (24) 騒霊 Poltergeist. 特定の家に出没する精霊で、家具類、食器類を投げたり、家鳴り震動させたり、極めて騒がしい。乱暴なことが多く、これに憎まれる家人は怪我をさせられることもある。通常は姿を見せない。
- (25) あんたはきこと火薬を發明したこつたらうて Ihr hättet sicher das Pulver erfinden. 「火薬を發明しなかつた」das Pulver nicht erfinden haben という慣用句は「足りない」「莫迦な」「単純な」という意味。ゆえに旅籠の主人は「あんたは利口者だ」と褒めているわけだが。
- (26) 物彫り台 Schmitzbank. Schmitzbankのこと。桶屋や彫刻師などの仕事台。
- (27) 轆轤台 Drehbank. 轆轤細工師の使う仕事台。轆轤とは丸い挽き物を作る工具。DMB三八「ちいぢやな卓子デッフル食事の仕度、驢馬公踏ラッブんばれ、棍棒ホック出て来い袋から」の訳注「轆轤細工師」も参照のこと。
- (28) 三枚葉つば Dreiblatt. カード三枚でやるゲーム。なお「ドライブラット」とはクローバーのこと。また「三人組」の意もある。
- (29) ポッヘン Pochen. Poch, Pochspiel. ポーカー。五枚のカードの組み合わせで強弱を争うゲーム。ただし、はつフッたりで弱い組み合わせが強い組み合わせに勝つこともある。賭け勝負には持つてい。
- (30) 蒸気車 Dampfwagen. 世界最初の鉄道はイングランド北部のストックトンとダーリントン間に一八二五年に開通。一八三五年十二月七日、ドイツの地で初めて蒸気機関車に牽引された列車がニュルンベルクとフルトの間を走った。十五箇月後ライプツィヒ・ドレスデン鉄道が路線を開設。デンマークの作家ハンス・クリステイアン・アンデルセン(一八〇五—七五)は、『詩人の市場』(一八四〇—四一)の旅の結実。一八四二刊)の中で夢中になって当時流行のこの鉄道という現象を叙述している。それゆえ、DMBが出版された一八五七年には、蒸気で走る車はなるほどまだ新奇な乗り物ではあつたにしても、知識人の常識だつたわけである。



- (31) シェーン「端麗」一族 Familie Schön. ドイツ語「シェーン」schönは「美しい」「美しく」の意の形容詞・副詞。シェーン姓はベヒシュタイン在世時実在した。たとえばプロイセンの高級官僚だったハインリヒ・テオドーア・フォン・シェーン(一七七三—一八五六)。ヘンスヒェンはそれと掛けて魔物どもの容貌を皮肉っているようだ。と申すか、ベヒシュタインの相変わらずのおふかけである。
- (32) 九柱戯。Kegel. ボウリングに似た競技。細長い円錐形の木柱を九本方形に並べ(後に木柱の形も並べ方も変わった)、これに木製の球を転がしてぶつけ、倒れた木柱の数で得点を競う。オランダ黄金時代(十七世紀)の画家ヤン・ステーンJan Steenの「宿屋の外で九柱戯をする人人」(一六六〇—六三頃)は有名。また、アメリカの文人ワシントン・アーヴィングの短編小説集『スケッチ・ブック』(一八二〇年頃) Washington Irving: *The Sketch Book of Geoffrey Crayon* に収められた一編「リップ・ヴァン・ウインクル」Rip van Winkleでは主人公リップが山中で九柱戯をしているオランダ風の古風な服装の男たち(オランダ出身の開拓者たちの亡霊)と出会う。
- (33) プレットシュピール Brettspiel. 本来は遊戯板の上で石や駒を動かして二人が勝負をする遊び(碁、チェス、将棋、バックギャモンなど)のこと。ここでは九柱戯のルールの一つを指すか。未詳。どなたかご高教を。
- (34) パルテンス Partens. 九柱戯のルールの一つを指すか。未詳。どなたかご高教を。
- (35) あいさ Ou. フランス語の肯定の返辞。DMB一七「心臓の無い男」では野豚がこう返辞して跳び出して来る。なおフランス語「アデュー」Adieu(「機械嫌やう」「さようなら」)を訛った「アーシエ」AdjoがDMB六六「杜松の木」に出て来る。同様の訛り「アーデ」Adeは「まだに」南西ドイツの農山村部で用いられている。
- (36) 煙突掃除夫 Schutdeger. 狭い煙道に溜まった煤を掃除する人夫。普通は体の小さい少年。DMB五三「白鳥貼り付け」訳注「煙突掃除夫」参照。
- (37) 弾み車を蹴って軸棒を回し trat das Rad, und drehte die Spindel. これは弾み車式輓轆台である。重い円盤状の弾み車を足で蹴って回転させる。円盤は最初こそ動かすのに力が必要が、一旦弾みがつくと、自身の重さのため小さな力では減速しなくなり、一定の回転速度が保たれる。円盤の回転は軸棒に伝えられる。ヨーロッパの輓轆師はこの軸棒の先端に木材、骨、象牙、海泡石など用材を固定し、鑿を当てて削った。陶工の場合は軸棒と連結した回転台の上に粘土を置いて手で成形した。弾み車式輓轆台のお蔭で輓轆師も陶工も両手を用いて作業ができるようになった。それ以前の手回し式輓轆台に較べ格段の進歩だった。
- (38) 鮎とか鮠 Gründlingen und Etrizen. 「タリェントリント」Gründling(鮎はFlußgründling)は鯉科指魚属「ヘルリッ

ツエー Eritze は柳鱈、棘魚で、いずれも淡水に棲息する小型の魚である。なお、グリュントリンゲン(学名ゴビオ・フルウィア ティリス *Gobio fluviatilis*) はヨーロッパ、西アジアの河川、湖沼に非常に多く、食用、飼料用として好まれる。ドイツの河川、湖沼で釣り人の鉤に掛かるのは、グリュントリンゲンやエルリッツエの他にはたとえば、アアル Aal(鰻)、エッシェ Äsche(河姫鱒)、バルシユ Barsch(ペルカ)、ブラッセ Brasse(ブリーム)、デーベル Döbel(うぐい)、フォレレ Forelle(虹鱒)、ヘイト Hecht(河かまふ)、カルプフェン Karpen(鯉)、ロートアウゲ Rotauge(銅色うぐい)など。

## 二 シュヴァーベン七人衆の昔話

(39) シュヴァーベン Schwaben. 現在はバイエルン州の二行政区画。中世初期にはシュヴァーベン公国(この公国はライン河を越えエルザスをもち、ボーデン湖の南のスイス北東部をも領有。従ってボーデン湖は公国の中央に位した)。公国は七代(一二三八—一二五四)に亘ってドイツ王・神聖ローマ帝国皇帝(とりわけ有名なのはフリードリヒ赤髯王・帝<sup>フリードリヒ一世</sup>)を輩出したホーエンシュタウフェン家の終焉とともに消滅、小諸侯、諸都市、大司教・大修道院長などの高位聖職者は神聖ローマ帝国直轄となった。ただしやがて域内にヴュルテンベルク公国(成立一四九五)が勃興すると、シュヴァーベン地方はその覇権を承認せざるを得なかった。シュヴァーベン地方というのは、西はライン河、南はボーデン湖とスイス、北はプファルツ、ネカー川中流域、マインフランケン、東はレヒ川まで拡がっているアレマン・ドイツ語圏と考えればよからう。中心の大都市はウルム。

(40) アウクスブルク Augsburg. 現バイエルン州。シュヴァーベン地方東端の有力都市。商工業組合による民主的支配(一二六八以降一五四七まで)で繁栄。イタリアとの中継貿易の拠点という地理上の優位もあり、十六世紀には富豪フッカー家やヴェルザー家の活躍で知られる黄金時代を迎えた。

(41) 親方 Meister. ただ「親方」とあるが、これはもちろん武器製造業者の親方である。

(42) ボーデン湖 Bodensee. 「シュヴァーベンの海」Schwäbisches Meerとも呼ばれるこのドイツ最大の湖は面積五三六平方キロ(内ドイツ領は三三〇平方キロ)、ドイツ最南端にある。ドイツとスイスとオーストリアの国境が湖上に。温和な気候に恵まれ、太古から人類の生活が営まれた。

(43) 男の身の丈七人分の槍 e spieß von siebe Mannstängen. 標準ドイツ語 ein Spieß von sieben Mannstängen. 「男の身の丈」を仮に五・五フィートと見積ると、三・八・五フィート=一二・六メートル強となる。中・近世にヨーロッパで活躍した頑強なイス人傭兵(歩兵)の長槍は一八フィートで、これは六メートル弱。若き日の織田信長が部下に装備させた朱塗りの大身の槍

- は三間半で、これは六・四メートル弱に当たると。
- (44) 安物の剣 Bratspieler. 「プラートシュピース」は本来は「炙き串」、すなわち、肉片や鳥を串刺しにして、回転する輪に接続、烈火(これを回す役のごぞうは熱気を避けるため顔を布で覆わねばならなかった)の前でぐるぐる回して、炙り焼きにするための先の尖った細い鉄の棒のこと。ここでは俗語で「剣、それも安物の」の意。
- (45) 鉄兜 Stumhut. 「シュトゥムムフト」。十六世紀の歩兵の鉄兜。
- (46) 後ろへ蹴り飛ばすのに zum Hintenaus schlagen. 実際、多人数が棍棒や短剣や剣で闘い合う場合、混戦の最中後ろから襲い掛かれたら、あらかじめ長靴に装着しておいた拍車で蹴り飛ばすのは有効な心得だった。
- (47) 胸甲. Harnisch. 「ハルニッシュ」は本来「鎧」「甲冑」の意。ヨーロッパ中世騎士の防具全体を指す。しかし、十七世紀には、胸を守る鋼鉄製の胸板と背中を守る同じく鋼鉄製の背板から成り、双方を合わせて尾錠で留めるものになっていた。これが「胸甲」である。それではなければ十全な防具とは言えない。ところがゼーハースことヨッケレは胸板部分だけで満足したようである。頸から布紐か何かでぶら下げたのだろう。事実そういうシユヴァーベン七人衆の絵がある。
- (48) ええ気 Curasche. フランス語「クラージュ」Courage (勇氣、元氣)の訛り。
- (49) 聖ウルリヒ教会 St. Ulrich. 聖ウルリヒ・聖アフラ教会のこと。ルター派の信仰を認めたアウクスブルクの宗教和議(一五五五)を記念して建立された。カトリック(旧教)と福音派(新教)の教会が同一の場所にある世界でも珍しい教会。旧市街の中心市庁舎広場から旧市街の南半を南北に貫くマクシミリアン通りの南端ウルリヒ広場に面している。
- (50) 御弥撒 eine Messe. カトリック教会で、神を讚美し、罪の贖いを願い、神の恵みを祈る儀式。司祭が立て(執り行い)、通常は信徒がこれに与る(参加する)最も重要な典礼。
- (51) ゲッピンゲン門 Goppinger Tor. ヴュルテンベルクの古い都市ゲッピンゲンへ通じる街道がここから発しているの、市門にこの名称があったか。
- (52) 上等のアウクスブルク腸詰をいろいろ gute Augsburg' er Würste. アウクスブルク・ソーセージは数あるドイツの加工肉食品のうちでも有名。各種あるが、たとえば、中くらいの大きさの茹でソーセージ(炒めるのではなく、沸騰しない熱湯ないしブイヨンで皮が破裂しないよう数分暖めて食べる。これが難しければ、一旦沸騰した湯ないしブイヨンの下の火を止め、ソーセージを投入、五分ほどして引き上げればよからう)。豚肉、仔牛肉、豚の脂身が原料。白ソーセージ Weißwurst も近隣の大都市である現バイエルン州都ミュンヘンのそれに劣らず有名。
- (53) 雲雀 Lerche. 雲雀は、鶉、鶉、鶉、鶉とともにヨーロッパの美食家が好む小禽類である。炙って詰め物をした雲雀は古代ロー

- マ以来珍味とされている。
- (54) アルゴイアーのシュルツさん der Herr Schulz der Allgäuer. 「アルゴイアー」Allgäuerは「アルゴイ男」の意。「アルゴイ」はバイエルンからシュヴァーベンに掛けての高地。山国の人らしく雄雄しいと思われているわけ。ちなみにこの人だけが敬意を表して敬称付きの姓で呼ばれている。
- (55) ヨッケレで、別名ゼーハース der Jockele, genannt der Seehaas. 普通「ゼーハース」Seehaasは標準ドイツ語の「ゼーハーゼ」Seehase。直訳すれば「海兎」、すなわち雨降らし科の腹足類である軟体動物の「あめふらし」のこと。しかし、ここでは「湖兎」の意。なにせ、あめふらしは淡水には棲息しない。
- (56) マルレ、綽名してネステルシュヴァーアプ der Marie, genannt der Nestelschwab. 「ネステル」は「紐」「シュヴァーアプ」は「シュヴァーベン人」の意。
- (57) イェルクレ、通称ブリッツシュヴァーアプ der Jerkle, war der Blitzschwab heißen. 「ブリッツ」は「稲妻」の意。
- (58) シュビーゲルシュヴァーアプと異名を取ったミッセル der Michel, Spiegschwab zubenahmet. 「シュビーゲル」は「鏡」の意。
- (59) クネプフェレシュヴァーアプのハンス der Hans, Knöpfelschwab. 「クネプフェレ」は後掲訳注参照。
- (60) ファイトレで、これはゲルプフェースラー Velti, das war der Gelbfüßler. 「ゲルプフェースラー」は「黄色足」の意。
- (61) コリヤぶったまげた Potz Blitz. 「これはこれは」「たまげた」。
- (62) シュベツツレともいう旨いクネプフェレ gute Knöpfe oder Spätzle. シュヴァーベンのスードル(標準ドイツ語「クネデー」Knödel. この類は諸種あるが、麵状ではなく、団子状のものが普通)であるシュベツツレの基本的レシピは以下の通り。  
材料。小麦粉二五〇グラム。鶏卵二個。塩小匙一。水八分の一リッター。バター大匙一およびパン粉大匙一(炒め用)。  
調理。材料を混ぜ、掻き混ぜ匙か捏ね棒で泡立つまで練り上げて固く粘った生地を作る。それから生地を少しづつシュベツツレ用板の上に広げ、シュベツツレ削り Spatzenschaber (長方形の鋼鉄の薄板。持つ方の一端は丸く、その反対側は刃状)あるいは長くて幅広の包丁で薄い帯状に切り、沸騰した塩入りの湯に入れる。シュベツツレを投入している限り、湯は絶えず沸騰していなければならぬ。再びシュベツツレが浮き上がって来たら、網杓子で掬い取り、別の塩入りの熱湯に潜らせ、よく水気を切ってから、暖めておいた皿に空ける。こうして全部の生地が処理されたら、全部をバターで煎ったパン粉とともに炒める。お手製のシュベツツレで名声を博したければ、生地に水を使わず、粉が吸収する限りの卵を入れるとよい。(ルドルフ・ヴェルク監修『シュヴァーベン美食探査行』Regie Rudolf Werk: Kulinarische Streifzüge durch Schwaben, Stitz Verlag.

Wurzburg 1979.)

生地にレバーを入れたもの、ほうれんそうを入れたものなども。なお、現代ドイツでは、シユベツツレの類は通常単独で食べるのではなく、シチュウヤや肉料理の付け合わせとする。

(63) クネーデル Knödel 標準ドイツ語「クネーデル」Knödelに当たる。

(64) クレーセ Klöße 標準ドイツ語「クローズ」Kloßの複数形。「クローズ」は「クネーデル」をも指すが、肉団子をも言う。

(65) ポプフィンク地方 Bopfinger Landschaft. ポプフィンゲン Bopfingen は古くからある現在バーデン＝ヴュルテンベルク州の小さな町。もとよりシユヴァーメンに属する。かつての神聖ローマ帝国直屬都市。

(66) 乾し草月 Heumond. Heumonatとも。家畜の飼料にする乾し草の収穫月である七月。

(67) 雀蜂 Hornib. Hornisse のこと。膜翅目雀蜂科の昆虫。大型蜂で体長約四〇ミリ。腹端に毒針を持ち、毒は強烈。

(68) 凹道 Hohlweg. 両側が急斜面の道。切り通し。谷あいの道。

(69) 自分の最後の麩麩は焼かれて、平らげられちゃった sein letztes Brot wäre gebacken und bereits verzehrt. 「あるひとの麩麩は焼かれた」 ihm ist sein Brot gebacken は「あるひとは間もなく死ぬだろう」「あるひとの麩麩はもうすぐ食べ尽くされる」 sein Brot ist bald aufgegessen は「あるひとの盛りりの歳はもう過ぎた」の意の慣用句。

(70) さあて、それからとある森に踏み込んだが Kamen nun just in einen Wald und. この挿話は状況がよく分からない。森の突破を図ったアルゴイアーが、なぜ茂みへではなく大地に槍を刺したのか。クネプフェレシユヴァープがなぜ樹と槍の間に挟まれたのか。槍が抜けないアルゴイアーが、思案の挙げ句、太い幹の樹の方を根こぎにしたのはお笑いだ。DMB (一八四五)には標準ドイツ語で収録されているこのDMB IIの解明に役立った「Das Märchen von den sieben Schwaben, (Nr.19)にはこの挿話は入っていない。

(71) 打ち錠遊びで叩かれた球 der Ball beim Prischenschlag. 「打ち錠遊び」は球技の一種。杭の頭に乗っている木片(屋根葺きの桧板など)上に置かれたボールをである打ち錠(道化師の道具)状の棒の一撃で高く打ち上げる。

(72) 六クラフター sechs Kafter. 「クラフター」は成人男子が両腕を左右に広げた時の指先から指先までの長さ。尋(たずね)。日本では一・八メートルほど。ドイツ語圏では一・九メートルほど。

(73) アルゴイアーは心臓を洋袴の留め革の下に落としちゃった der Allgäuer das Herz nicht im Sprungriemen fangt. 「臆病者の心臓はスボンの中に落ちる(滑り込む)」 Dem Feigling fällt (rutscht) das Herz in die Hosen. 同様の慣用句を敷衍した表現。難解ですな。

- (74) ミュンヘン München. 現バイエルン州の州都。上バイエルン高地のイザール河畔の大都市。人口一三三万余(二〇〇九年)。一〇〇〇年以降この名称。一五〇年以降塩の集散地。一五八八年ザクセン公にしてバイエルン公ハインリヒ獅子公によって貨幣鑄造地として承認され、間もなく都市となる。このように都市としての発展の基礎を作ったといふべきハインリヒ獅子公が、ドイツ王・神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ赤髯王・帝とのちに不和になり、ゲルンハウゼンで追放刑を受けると、ヴィッテルスバッハ家のオットー一世が一八〇年バイエルン公となり、以来バイエルンが王国となつてもヴィッテルスバッハ家がバイエルンを支配した(一九一八終焉)し、ミュンヘンをその首都とした。バイエルンは今こそ往古のシュヴァーベンのかなりの部分をその行政区域に包含しているが、かつてはその西隣に位し、方言も支配者も異なる文化圏であり、こうした場合によくあるように、対抗意識を抱いていた。
- (75) シュヴァーベン人 Schwabe. 「シュヴァーベ」Schwabeの訛り。
- (76) 麦芽乾燥場 Mälzdarre. ビール醸造用の麦芽を乾燥させるための簀子台が並んでいる醸造所内の一室。
- (77) 例の黒い虫やも die schwarzen Käfer. 「くまぶり」は「カーカラク」Kakerlakだが、「シヤーベ」Schabeともいふ。「シュヴァーベ」と「シヤーベ」は音が似ている。
- (78) 瘡蓋の上に虱を這わせる die Laus über den Grind lauten lassen. 『諺的慣用句事典』によれば、「あるひとの肝臓の上を虱が這った」Es ist ihm eine Laus über die Leber gelaufen. (彼は立腹した、憤った)という慣用句(「肝臓」は情緒を司る器官)は載っているが、標記の言い回しは見えない。「瘡蓋の中の虱みたいな」Wie die Laus im Grind (Schorf) sitzen は「ちびの癖して做岸不遜」の意なので、これとは関係ない。まあしかし、それでなくても痒くて堪らない瘡蓋の上を虱が這い回ったら、いらいらむしゃくしゃくするはずだから、そういう意味に違いない。
- (79) 乾し草棒 Wiesbaum. 荷車に満載した乾し草あるいは穀物の束を固定するためその上に置かれたかなり長く太い棒。その両端を荷車に固く縛り付ける。
- (80) かもし草朝鮮鼠 Queckenhamster. 「クヴェツケ」は稲科の雑草。「ハムスター」は古高ドイツ語の「ハムストロ」hamster (穀物虫)が語源。ユーラシア大陸の乾燥・半乾燥地帯が分布区域。中央ヨーロッパにはフェルトハムスター Feldhamster (見られない)。齧歯目絹毛鼠科。地中に掘った穴の中に棲む。昆虫や地虫も食べるが、果実や木の実が主たる食餌である雑食性。
- (81) マルター袋 Malersack. 穀物が丁度一マルター入る袋。この昔の容積単位一マルターは地方により異なるが、一五〇—七〇〇リッター。

- (82) 聖クリシュトフ様 *der heilich Kirschhof*. 「聖クリストフ(クリストフォルス)」*der heilige Christoph (Christophorus)* の訛り。聖クリストフォルスはあらゆる旅行者の守護聖人。カナン巨人レプロプスは最も強い存在に仕えようと志し、結局悪魔に奉公するに至ったが、悪魔が十字架を避けるのを見て、イエス・キリストに帰依しようとする。贖罪のためある危険な大河で旅人を肩に背負って渡し続ける。長い歲月、数多くの人人に奉仕したあと、幼子イエスを渡すついに贖罪を果たし、以降「キリストを担ぐ者」(ラテン語)と呼ばれるようになる。
- (83) 思い切って始めりや、半分泳いじまったようなもんだあやう *Fisch gwohnt ischt halb geschwonne*. 「思い切って始めれば、半分できたようなもの」*Fisch gewagt( ) ist halb gewonnen*. (S. 226)。
- (84) こいごは儲けた *Jetzt hent mers gwonne*. 今のドイツ語方言の和訳は類推。よなたか( )高教ぞ。
- (85) メンメンケ *Memmenge*. シェツマーゲンの都市メンミンゲン Memmingen (S. 114)。
- (86) 胸板 *Brett*. 今の和訳は類推。よなたか( )高教ぞ。
- (87) 葎穂 *Hopfen*. 麻科の蔓性多年草。受粉前の雌株が持つ葎花の黄金色の粉(ルプリン)には芳香と爽やかな苦味があり、ビールに香味を付けるのに用いられる。防腐作用もある。DMB 二二「名付け親になった死」訳注「葎穂」参照。
- (88) がたがた糸巻き棹 *Runkunkel*. 年老いた女性に対する蔑称。「クンケル」*Kunkel* (糸巻き棹)は女性の象徴であり、女性を指す。
- (89) 鶺鴒 *Bachstelze*. 雀目鶺鴒科。小さくほっそりしている。真っ直ぐでほっそりした嘴。長い翼。長く、丸く凹んだ尾。かなり高い、細い脚。ちよ( )ちよ( )歩きながら尾を上下に振る。水辺で休み。
- (90) ぶうすか熊さん *Buumbar*. 直訳すれば「唸り熊」。気難し屋。不平家。
- (91) ロイトキルヒ門 *Leutkircher Tor*. 現在バーデン・ヴュルテンベルク州の都市ロイトキルヒ(かつての神聖ローマ帝国直屬都市)へ向かう街道が( )から発するので、この名があったか。もとよりメンミンゲンの市門の一つ。
- (92) 三月麦酒 *Märzenbier*. 「メルツェンビア」とは三月に醸造された強い貯蔵ビール(「ラーガー・ビア」*Lagerbier*)のこと。一五三九年施行のバイエルン公国ビール醸造条例によれば、ビールの醸造が許されたのは九月二十九日(聖ミカエル大天使の祝日)から四月二三日(聖ゲオルギウスの祝日)までだった。暑くて乾いた夏の間の火災の増加を防ぐためである。そこで「メルツェンビア」は夏の数箇月間洞窟や地下の穴蔵に貯蔵された。洞窟や穴蔵の出入り口の正面には陽光を遮るために葉の大きな枋の木などが植えられた。そればかりでなく、長期保存ができるようにビール自体の比重とアルコール度も増やされ、ホップ添加も強化された。昔の「メルツェンビア」については「濃褐色でこくがある」との記述がある。

- (93) アイマー Eimer. 昔の液量単位。六〇—八〇リッター。
- (94) マース Maß. 南ドイツ、オーストリア、スイスでのビールなどの古い液量単位で二—三リッター。おそらくここでは「マースクルーク」Maßkrug（一リッターほど入るジョッキ）一杯分であろう。
- (95) ランゲンザルト Langensalz. ザクセンの町ランゲンザルトツァ Langensalza のこと。
- (96) 本命 Kern. 「ケルン」は「神髄」「核心」の意。
- (97) 中麦酒 Mittelbier. 中くらいの品質と強さのビール。強ビールより弱く、弱ビールより強い。幾つもの種類がある。
- (98) 弱麦酒 Kowent. 「デュンビア」Dümbier（薄いビール）の方言。通常の強ビール（濃いビール Dickbier）を醸造した使用済みの残り汁に水を加え、再び加熱して作った。アルコール度は低い（二%以下）だし、旨くもなんともないが、生水がしばしば疫病の原因となった中近世では水代わりに子どもにも、朝食時にも飲まれた。DMB三八「ちいちゃな卓子食事の仕度、驢馬公踏んばれ、棍棒出て来い袋から」訳注「弱麦酒」参照。
- (99) クローンブルク Kronburg. クローンブルクの館 Schloß Kronburg はメンミンゲン南方一〇キロにある。現在バイエルン州で最も美しいルネサンス期の城館とされる。イラー川屈曲部の小高い丘（標高七五二メートル）の上に位置する。
- (100) 郷士 Junker. ベヒシュタインが私淑していた J・K・A・ムゼーウスは V d D の中で、爵位は持っていないが広い土地の領主である紳士階級のある人物を「ユンカー」と読んでいる。そこで V d D の訳出に当たって訳者鈴木は「郷士」とした。ここでもそれを踏襲する。
- (101) 牛攻め犬 Bullenbäber. 英国で牡牛と闘わせるために品種改良(?)された犬の種類。鼻が口より後退しているので、牡牛の喉に咬みついて呼吸ができる。
- (102) シュニッツレプツ Schmitzleutz. 未詳。どなたかご高教を。
- (103) 足痛風 Zippelrin. 足指（特に親指）や足首に起こる痛風 Fußgicht の俗語。痛風は血液内の尿酸値が高くなり、これが関節部、とりわけ足の親指などに結晶となって析出するため起こる炎症反応。高尿酸血症はビールの多飲や肉食によって惹き起されるリスクが高い。しかしこれが遺伝的に起こり易い体質もあるとのこと。発作の痛みは骨折の痛み以上の激痛のことも。従って日頃温和な郷士殿も極めて怒りっぽくなっていたのである。
- (104) 醸造鍋 Braupfanne. 銅製のビール醸造鍋。直径一五〇センチほどだろうか。
- (105) 野天での食事 Halt. 狩猟用語。狩猟の際の戸外での食事。
- (106) 時 Stündlein. 「あるひとの時が来る」Sein Stündlein kommt. とこのは普通は「あるひとの死期が来る」の意で、太平洋な



- ネステルシユヴァーブは母親の言った「時」をやはりそう解釈したのだが、母親は「運に恵まれ栄える時」「勢いに乗る時」の意で用い、ぐうたら息子に愛想を尽かし、「おままたにや時節到来することなんぞありっこない」と決めつけたのである。
- (107) 匙 Löffel 狩猟用語で「兎の耳」を指す。
- (108) ハウ、フェルハウ、ハウ、ハウハウ Hau huelhaul Hau, hauhau 打つ、飛び掛かれ、打つ。打つ。打つ。hauen=hielen, huelen=hurlen=hurl (英語)。
- (109) 肥やし飼いの牡牛 Mastochs 食肉用に肥育された去勢牡牛。
- (110) 三人懸かりぶんど酒 Dreimännerwein 三人懸かり葡萄酒 Dreimännerwein の訛り。粗悪で、飲めたものではないワイン。これを飲むには男が三人懸かりになるのでさう呼ばれる。つまり、一人の男がもう一人の男にすっかり抑えられ、三人目が抑えつけられた男の口にこれを注ぎ込まねばならないから。これは『グリムドイツ語辞典』の説明による。
- (111) 喉掃除 Rachenputzer 酸っぱい、粗悪なワインの戯称。「だが、たとえばヘッセンでは火酒を指すように、喉がひりひりする強い酒のことも言う)。
- (112) しんせレマ帝国の im heilige remische Reich 「神聖ローマ帝国の」im Heiligen Römischen Reich の訛り。この物語の背景と思われる十七世紀、ドイツ語圏の大部分は現実には、王国、公国、諸侯領、大司教などの高位聖職者領、帝国直屬都市などと、諸小邦が分立していたが、「ドイツ民族の神聖ローマ帝国」das Heilige Römische Reich Deutscher Nation なる統一名称を戴いていた。
- (113) 湖産のぶんど酒 Seewei 湖産葡萄酒の訛り。ここではポードン湖沿岸や湖内の島でできるワインを指している。芳醇で名高い。温和な気候に恵まれている同地では、既に八四四年神聖ローマ帝国皇帝カール三世がイーバリーング湖(ポードン湖の北西部で細長くなっている)の北西端の小村ポードン湖に掛けてのポードン地方一帯はさまざま美酒で有名。この辺りではドイツ語圏にもそもシユヴァールツヴァルトからポードン湖に掛けてのポードン地方一帯はさまざま美酒で有名。この辺りではドイツ語圏には珍しく赤ワインをも産出、そればかりかこれには大いにこくがある。湖畔の町メルスブルクのグラウブルグンダーは最上。シユペートブルグンダーもお勧め。ベヒシュタインはどんな恨みがあって、かくも事実無根の罵詈雑言を並べているのやら。
- (114) 酸い葉 Sauerampfer 「酸い葉」は蓼科の多年草。ギシギシ、スカンボ/スカンボ(これらは同様に酸っぱく、若い莖が食用にされる虎杖をも指す。ただし虎杖は日本産)の別名でもある。北半球の温帯に広く分布し、耕牧地や道の端でよく見掛ける。ヨーロッパでは古来しばしば若い莖や葉が食用とされ、スープの実などに使われた。蓼酸を多く含むので莖や葉を噛むと酸っぱい。

- (115) 自己の皮を市場に運んで行く龍なんぞいやしな、 kein Drache sein Fell zu Marke getragen. 「自分の皮を市場に運ぶ」 sein Fell zu Marke tragen は「他人のために」命を張る」という意の慣用句。ベヒシュタインはこれを借りて、「龍の皮は市場では買えな」とふざけているのである。
- (116) 衣蛾 Motte. 鱗翅目広頭小蛾科の一種。体長一〇ミリ内外の黄白色の幼虫が毛織物、毛皮などを食ひ、毛を綴り合わせて扁平な筒状の巣を作り、中で蛹化する。成虫は開張一〇—一四ミリ程度で黄褐色。

三 肝臓を食へちまったシュヴァーベン男の話

- (117) 御難同士の仲間やい Mein Leiden-Gesell. 「我が受難の同胞よ」という呼び掛け。救世主はこのシュヴァーベン男同様浮浪者よろしくの恰好をなやっていたからだろう。
- (118) グルデン銀貨 Gulden. 「グルデン金貨」Goldgulden であれば、以下の説明が当て嵌る。西欧では長期に亘り銀貨の単独支配が続いたが、一二五二年イタリアのフィレンツェ共和国で初めて金貨が鑄造された。これが「グルデン金貨」と後にドイツ語圏で称されるようになる貨幣。片面には市の紋章である百合の刻印と「フィオレンティア」の文字があったので、「フィオリノ」(イタリア)、「フローリン」(フランス)、「フローレン」(ドイツ)と呼ばれた。しかし、十七世紀半ばにはほとんど無くなり、グルデン銀貨に取って代わられる。クロイツァー銅貨との対照ではこちらだろう。
- (119) クロイツァー銅貨 Kreuzer. 十九世紀半ばには六十クロイツァーで一グルデン。となると救世主とシュヴァーベン男の稼ぎの比率は、六〇〇〇対一ですな。
- (120) もやい gemein. 共通。共有。
- (121) 臓物とか臟腑とかいふの das Gehänge oder Geräusch. 解体された動物の内臓。
- (122) シュヴァーベン男が口をくぐむことをお望みだった Wolle er haben, daß der Schwab still schwieg. 自分自分の名にかけて真つ赤な嘘をつかれては、主なる神としては誓言を繰り返してお聴きになりたくなかったのも無理もなし。

四 泥棒の親方の認定試験

- (123) じゃがいものビュエテス(団子) Kartoffelntes (Klöße). テューリンゲンの素朴な郷土料理。後の記述にあるように、じゃ

がいの皮を剥いて、搗り潰し、搾り、少しの脂(豚とか鷲鳥とか、あるいは牛とかの)を入れて団子に丸め、それを茹でるといふもの。次に記すのはこれとは少し異なる「ヒューテス」(テューリンゲン風団子) Hutes (Thüringer Klöße) のレシピの一つである。

たつぷりのじゃがいもの皮を剥く。りっぱで大きい芋を選ぶこと。その三分の二を卸し金で搗り潰し、ぎゅっと搾る。搾った塊をほぐし、小麦粉かじゃがいも澱粉(日本で「片栗粉」と称されているもの)を少し混ぜ、塩でちよっと味を付ける。それからじゃがいもの三分の一を茹でて潰して滑らかなビュレにする。両方を混ぜ、強く攪拌し、直径五センチくらいのお団子の間に纏める。その際、ゼンメル(小型の丸い白パン。プレーチェン)を賽の目に切って油脂でこんがり揚げたものを真ん中に入れる。沸騰する湯に団子を入れてゆっくり一〇分ほど茹でる。綺麗な白い団子ができる。勧める時には「ヒューテス!」*Hüttes!* と言ふ。

これは酢漬け牛肉の焼き物、こつてりした猟鳥獣料理、グーラシユ(ハンガリア風パブリカ入り牛肉シチュウリグヤーシユ)などに合う。一皿の肉料理あるいはシチュウに二個添える程度。

(124) そのためこの団子は南テューリンゲンの数多くの土地で「ヒューテス」と呼ばれているのだ。davon denn auch die Klöße an vielen Orten Südhünigen Hutes heißen. 一説によれば、この料理を食卓に供する際「ヒューテス!」*Hüttes!* と言ふのは、レシビヤ準備を余所者にしやべらないよう「気をつけろ」ということで、名前の由来はここにあり、とのこと。

野暮を承知で一言申せば、L・リヒター描く挿絵では人物の服装から見てこの物語の背景が十八世紀に設定されているが、十八世紀も四分の三近く経過するまでのドイツ語圏では、新大陸産の食用植物の一つであるじゃがいもの栽培は全く普及していなかった。いわんやその食文化においてをやである。たとえば、一七七二年恐ろしい飢饉がシュヴァーベンを襲ってから、この地はようやくじゃがいも栽培とじゃがいも食を受け入れたが、それでも旨いもの好きのシュヴァーベン人にとって不承不承、心外千万な思いのことだった、という。アイルランドからロシアに至るまでの広大な大地をこの高カロリーの根塊植物が征服し終わったのは十九世紀前半。

(125) 代父 Pate. 名付けの父親。キリスト教の幼児洗礼(カトリックおよび英国聖公会)に立ち会って、洗礼を受ける者の神に対する約束の証人となる大切な存在。男であれば代父(名付けの父)、女であれば代母 Patein (名付けの母)。名付け親は当の嬰兒にとつては将来ともに両親同様、あるいはそれ以上に頼りになる。丘の上の城のご領主様が、城下の村の住民とはいえ、貧乏百姓の赤児の洗礼式に立ち会い、名付け親になったのは、まことキリスト教徒に相応しい行為だったのだが。

(126) 領主裁判権 Gerichtsban. 領主に与えられた、所領内での犯罪を裁き、刑を執行する権限。

- (127) 拳銃 Pistole. DMB一三「黍泥棒」訳注「拳銃」参照。
- (128) 司祭 Priester. 福音派(新教)地帯なら「牧師」と訳すべきだが、名付け親・名付け子なるカトリック教会(英国国教会もそうだが)の用語が使われている上、物語末尾近くで、「煉獄」(これはカトリックのみの概念)という言葉が出て来るので、テューリンゲンでもカトリック地帯と解釈して「司祭」とした(もともと十八世紀テューリンゲンの都市住民の大方は新教徒だった、と考えてよからう)。この物語では擲楯の対象にされていてお気の毒だが、編著者ベヒシュタインは新教徒なので、カトリックのお坊様に対する敬意に欠けるのは是非も無い仕儀か。
- (129) 教場の師匠 Schullehrer. 村の学校で児童に初歩的教育を与える先生。聖堂の管理人でもあったはず。DMB八〇「ぞっとする」の訳注「教会の聖物保管係兼教場の師匠」参照。L・リヒターの挿絵を見ると、髪を被り、フロックコートを一着におよんだしかるべき地位の平信徒(俗人)のようだ。だとすると、のちに出るように、司祭と併せて「二人の黒衣」[お坊さん]とあるのはおかしい。なお、ドイツ語圏においては十八世紀末まで初歩的教育はもっぱら副業として行われていた。修道院学校、それも平信徒のためのいわゆる「外の」学校では修道士が、都市のラテン語学校では聖職者が、中世後期の読み書き計算管係(カトリック教会では「メスナー」Meßner)が聖職者(副司祭、助祭、副助祭)であつても不思議はない。
- (130) 火酒 Brantwein. DMB六「悪魔がおっ放された」[「あ、こゝだ」、あるいは、悪魔が火酒を発明した話]訳注「火酒」参照。
- (131) 強化橙酒 Doppel pomeranzen. 未詳。「あなたか」高教を。
- (132) イスパニア苦味酒 Spanischbitter. 未詳。「あなたか」高教を。
- (133) 火酒 Schnaps. 前掲注「火酒」に同じ。
- (134) 聖なる使徒ペトルス様 der heilige Apostel Petrus. イエス・キリストの十二使徒筆頭。
- (135) ニ〇クローネ zwanzig Kronen. 「クローネ」は「王冠ターラー銀貨」Kronentalerのこと。最初はフランスで(エキュ・オー・トロア・クロンス = 三王冠エキュ・Ecu aux trois couronnes。クロンスが通称。六フランで通用)、一七五五年以降オーストリア領ネーデルラントで刻印された銀貨(フランド、銀貨、あるいは十字ターラー、クローネ)。後には南ドイツでも真似て鑄造された。DMB五〇「のらくら国の昔話」訳注「クローネ」参照。
- (136) 上物トクネン Dickelomen. 一般に分厚いターラー銀貨をDicktalerと称した。DickelomenはこのDicktalerの訛りと解した。

- (137) 月桂樹ターラー Laubtaler. 月桂樹と盾の模様の付いたフランスの六フラン銀貨。フランスでの通称は、白エキュ *Ecu blanc*、白ルイ *Louis blanc*、ルイ銀貨 *Louis d'argent*。ドイツでも広く普及、通用した。やはりクローネ銀貨に相当。
- (138) 蝸蝓 *Krebs*。「クレープス」は広い意味では(淡水・海水双方の)甲殻類。従って蟹の類をも含む。しかし、狭い意味では、体長一五センチ内外、重さ二〇―一四〇グラムで、緑がかった茶色の淡水産のざりがにを指す。学名ボタモビウス・アスタクス *Potamobius astacus*。甲殻綱十脚目蝸蝓科の節足動物。第一肢は大きな鋏となっている。河川や湖沼の特に切り立った険しい岸に棲息。そういう場所では日中は植物の根や穴の中に潜り込んでゐる。平たい岸辺では石の下。夜間、腐肉、巻貝、蚯蚓、幼虫、あらゆる植物を食べる。冬はめつたに穴を去らぬ。夏脱皮する。食材として美味。ただし調理の前に体内の泥を十分吐かせる必要がある。もとよりいわずエビガニ(アメリカざりがに)とは異なる。
- (139) 紅海 *Rotes Meer*。旧約聖書出エジプト記によれば、モーセに率いられたイスラエルの民はエジプトとシナイ半島を隔てる「葦の海」を渡った。これはスエズ湾、すなわち紅海の北端に当たる。
- (140) キドロンの小川 *Bach Kidron*。キドロン(ケデロン)は、エルサレムの東、市街とオリヴ山を隔てるヨルダン川の峡谷。ここに発する小川(キドロンの川)は東流して死海に注ぐ。旧約聖書サムエル後書一五章二三節。息子アブサロムに叛かれた王大ヴィデは従う兵士らとともにここを越えて逃げた。新約聖書ヨハネ伝一八章一節。イエスは裏切られ、逮捕される直前、弟子たちとともにこの峡谷の向こう側に出た。
- (141) ヨシャファトの谷 *Thal Josaphat*。文語訳聖書では「ヨシャパテの谷」。「ヨシャファト」は「主の裁き」の意。エルサレム近郊の谷。新共同訳旧約聖書ヨエル書四章二節。文語訳聖書では同じくヨエル書三章二節。いわゆる「最後の審判」が行われる場所として十二世紀初頭からこの地に特定する論者が少なくない。十二世紀初頭まではこの地は聖母マリアの埋葬地として言挙げされたに過ぎなかった。
- (142) 天国の梯子 *Himmelsleiter*。ヤコブが夢に見た、天国にまで届く梯子。天使たちが昇り降りしていた、という。旧約聖書創世記二八章一二節。
- (143) 豚の塩漬腿肉を燻製するための鉤 *einen Haken, daran man die Schinken räuchert*。燻製の煙道の中のフックにあらかじめしかるべく処置した肉をぶら下げて煙で燻す燻製製造法は、十九世紀初頭まで英国の燻製ハムやベーコンの専門製造業者においてですら伝統的手法だった。英国のある業者はこの頃まで、馬車に(多い年には五〇〇頭分もの)豚の腿肉やら脇腹肉などを積んで各地の農家に運び、その燻製突の中に吊させて貰うという遣り方を採っていたそう。彼は委託農家に燻すための木材まで供給したとか。その後この業者は燻煙室を設置することによって、不便極まるこうした手法から生じるさまざまな支障

を解決した、という。

- (144) 煉獄 Fegefeuer. 罪そのものは赦免されたが、償いが残っていて、そのままでは天国に直行できない靈魂は、煉獄（淨罪界）で浄めの火に灼かれる。そして烈火で精錬された白銀のように清らかになったらようやく天国に入ることが出来る。従って煉獄で灼かれている魂が特別許可を得てこの地上に出現、徘徊する場合は、体内がかつかかと燃え盛っている「火男」Feuinger Mann, Feuermannの形を取ったりする。DMB六「悪魔がおつ放された」「さあ、ことだ」、あるいは、悪魔が火酒を発明した話 訳注「火男」参照。

八 ヘンゼルとグレーテル

- (145) ちっちゃい妹 Schwesterchen. 「小さい女性のほらから」。「妹」とは限らない。しかし、DMB一〇「老魔法使いと子どもたち」訳注「妹に」で記したように日本での慣例に従った。もともと、ベヒシュタインはじょうやらヘンゼルがお兄ちゃん、グレーテルが妹、と考えているようである。

- (146) 森の草木の実 Waldbeeren. DMB七〇「三人のとんな悪魔」訳注「草木の実」参照。
- (147) 卵菓子 Eierkuchen. 「アイアークーヘン」は「プファンクーヘン」Plankuchenともいう。後者は平鍋Platteで作ることに由来。フランス語の「クレープ」Crêpe。基本的レシピは以下の通り。

材料（四人前）。小麦粉二五〇グラム。卵四個。全乳（脱脂していないミルク）三〇〇CC。炭酸ガス入り鉱泉水一〇〇CC。塩一つまみ。バター五〇グラム。

調理。卵をボウルに割り入れ、ミルクの半量を入れて泡立つまで攪拌する（泡立て器かハンドミキサーで）。残りのミルクと鉱泉水を加え、だまがなくなるようゆっくり掻き混ぜる。塩一つまみを加える。ガス入り鉱泉水は生地を特にゆるやかにする効能がある。適当な大きさのフライパンに油脂を引いて熱し、底に薄く生地を流し入れる。生地が均等に広がるようフライパンを揺さぶる。とろ火で黄金褐色になるよう焼いたら、ひっくり返して同じく黄金褐色になるよう焼く。焼けたものは、暖めた天板に積み重ねたりして、全部が焼けるまで冷めないようにする。

- (148) 普通ジャムやソーセージをくるんだり、キャビアを載せたりして食べる。
- 甘焼き菓子 Biskuit. 小麦粉に卵、砂糖、ミルク、バター、香料、ベーキング・パウダーを入れて捏ね、型に入れて両面を焼いた菓子。ラスト。イタリア語「ビスコット」biscotti、フランス語「ビスキュイ」biscuit、英語「ビスケット」biscuit。二度

焼きで水分を僅少にした極めて固い、長期保存の可能な軍用糧食のパンも「ビスケット」と呼ばれるが、ここでは前者。

- (149) 扁桃砂糖菓子 *Marzipan* 扁桃を搗り潰し、砂糖、香料を混ぜて焼いた極めて甘い菓子。白くてねっとりしているのが、多彩に着色し、いろいろな形に成形することができる。マシパン。
- (150) 魔女 *Hexe*。ドイツ語圏の民間伝承における「魔女」は邪悪な女性と決まっている。人肉を喰うとされる魔女が登場する *KHM* は、*KHM* 一五「ヘンゼルとグレーテル」*Hänsel und Gretel* の他には *KHM* 五一「めつけ鳥」*Fundevogel*。西欧中近世(一部は近世北米東部でも)で荒れ狂った酷い「魔女裁判」*Hexenprozesse* の哀れな無辜の犠牲者とは全く関係ない空想上の産物である。その淵源は古代ギリシア、ローマの俗信にも遡る(ローマ文字では、*アプレイウス*「変身譚(黄金の驢馬)」、*ペトロニウス*「サテュリコン」参照)。なお、やはり超自然的力を駆使できるが善良な女性術師は「賢い女」*weise Frau* と呼ばれる。従って「良い魔女」*gute Hexe* 「白い魔女」*weiße Hexe* といった表現はドイツ語圏にはめつたにない。皆無ではないが。
- (151) 太ったかどうか、触ってみて調べようってわけ *damit sie fühle, ob er fett werde*。この魔女は目が悪いのである。魔女の属性として、鼻は利くが目がよく見えない、ということがあるが、必ずしも全ての魔女がそうだ、というわけではない。ベヒシュタインは読者も「解決みと考えているようだが」。
- (152) 麴麴焼き竈 *Baekofen*。これは耐火煉瓦などで作った石竈である。ドイツ式の場合、薪を燃やす炉が下にあり、パンを焼く空間(狭義の竈)を煙道の一部として炉の上部に設けた構造。この部分には鑄鉄や鋼鉄製の頑丈な出し入れ用扉があり、焼く際内部の気密性を高め、高温(二〇〇度に達する)を保つようにしてある。石竈は石の輻射熱で内部の物をじっくり焼く。
- 九 赤帽子ちゃん *Rotkeppchen*
- (153) 赤い天鵞絨で拵えたすてきな小さい緑無し帽 *ein feines Käppchen von roten Sammet*。女主人公の被り物、および女主人公の綽名は日本人には「赤頭巾」という邦訳で通っているが、*L・リヒター*の挿絵では、「頭巾」というと大方脳裡に浮かぶ頭的全てと顔のかなりの部分を覆うあれではなく、丸い緑無し帽である。「ケプヒェン」は「カッペ」の縮小形。「カッペ」は中世では「頭巾」、近世以降は「緑無し帽」と考えた方がいいかも。この点はフランスでも同じなようで、ペロー「ル・プティ・シャブロン・ルーージュ」*Le Petit Chapeyron rouge* のフランスの画家による挿絵(キユスターヴ・ドレ「一八六七」、アルペール・アンケ「一八八三」)では緑無し帽である。そこで拙訳は「赤帽子ちゃん」とし、呼び方は「ロートケプヒェン」とした。
- (154) 愛しの *scharmantes* フランス語「シャルマン」*charmant* (魅力的な)をドイツ語式に綴り、語尾変化をさせている。
- (155) アイヒェの樹 *Eiche, Eiche*。英語「オーク」*oak*。樺科の落葉樹。日本の「栢」(周圀約二メートル、高さ約八メートル)「水

- (163) 榎（な）「などに似ているが遙かに大木となる。周囲が一〇メートル近くの木や、高さ二三メートルに及ぶ木がある。DMB三九  
「七重麗」訳註「アイヒエの樹」参照。
- (164) 榛（は） *Hazel* 樺（か）の木科榛属の落葉低木である西洋榛。高さ五―七メートル。葉は広く、ほぼ円形で先端が急に尖る。春開花す  
る。雄花は黄褐色、雌花は紅色。果実（堅果）は葉のような総苞（そうぼう）によって下部を包む。中の仁（胚乳）は食用。英語の「ヘイ  
ゼルナッツ」*hazelnuts*。クッキーやケーキに入れる。ロートケプヒエンがわくわくした口調で言及するのはこのためかな。
- (165) 狼鞞皮（わんじん） *Wolfsbast* 未詳。となたか、高教を。
- (166) 狼莓（わんばい） *Wolfsbeeren*。学名パリス・クアドリフォリア *Paris quadrifolia*。ヨーロッパ産百合科衝羽根草属の宿根草。有毒植物。  
かつてヨーロッパでは根茎を刻んで乾燥させ、薬用（手足の麻痺や痛みを解く、下痢にも効くとか）とした。英語名「ハーブ・  
パリス」*herb Paris* は中世ラテン語「ヘルバ・パリス」*herba paris* から。
- (167) 狼の乳 *Wolfsmilch*。灯台草科灯台草属。学名エウフォルビア・カラキアス *Euphorbia characias*。中央ヨーロッパにはほぼ  
四〇種があるが、全て毒草。切ると乳液を出す。これは刺激性で、皮膚に付くとかぶれることがある。日本では園芸植物と  
して「ユーフォルビア」の名で呼ばれることが多い。
- (168) 狼の根（わんこん） *Wolfswurzel*。「アイゼンフート」*Eisenhut*（鉄兜（てつたて））の名でも知られる。日本では「烏兜（うりかぶた）」（舞楽の楽人が常装束に  
用いる冠）、英国では「モンクスフッド」*monkshead*（修道士の頭巾）。いずれもその美しい青碧色の花の形にちなんで名付け  
られたもの。金鳳花科の多年草。ヤマトリカブト、カタトリカブト、ハナトリカブトなどさまざまな種があり、これらを総称  
して「トリカブト」（学名アコニトゥム *Aconitum*）と称する。花は美しいが、塊根にはおおむね猛毒（アコニチン類）がある。  
日本では塊根を乾燥させたものが「烏頭（くわとう）」「附子（ぶし）」（狂言では「ぶす」という）なる有名な毒薬。ただし、少量を適切に用いれ  
ば、鎮痛、鎮痙、利尿、強心、新陳代謝賦活などに薬効がある。
- (169) 寝間頭巾 *Schlafhaube*。女性が眠る時に用いるボンネット。いまだに被る向きもあるようだ。かつてドイツでは男性も柔ら  
かい布地の先の尖った寝間帽子 *Schlafmütze*、夜帽子 *Nachtmütze* を被ったが、こちらは廃れたとか。
- (170) 粉挽き小屋の歯車仕掛け *ein Räderwerk in einer Mühle*。粉挽き小屋は、動力が水車によるものでも風車によるものでも、  
地面に垂直なその回転運動を地面に平行な石の碾（う）き臼（うす）の回転運動に変えるには、幾つかの、多くは木製の歯車を噛み合わせる  
必要があった。しばしば注油しても、噛み合わせ部分はぎいぎい軋み易い。
- (171) イーゼグリム殿 *Herr Isegrim*。普通 *Isegrim* と綴る。十二世紀後半のフランスで何人かの作者に書き継がれて成立した『狐  
物語』*Le Roman de Renart* は、狡賢い狐 *Renart* とその不倶戴天の敵である狼 *イサンゲラン* *Isingrim* との抗争を軸に当時の社



- 会を活写したのだが、これはドイツへ伝播、『ライネケ狐』*Reineke Fuchs*となり、更にゲーテにより叙事詩とされた。ドイツでは「イザングラン」が「イーゼグリム」となっている。
- (164) 鉄砲 *Kugelbüchse*。「クーゲルビュクセ」は本来「施条銃」。もともとメルヒェンのことゆえ、そこまで意識的に表現しようとしたわけではなからうから「鉄砲」とした。
- (165) 獵刀 *Jägersänger*。牡角鹿猟に用いる獵刀に由来する呼称。大型狩猟鳥獣(鹿・猪・熊・狼・大雷鳥・白鳥・鶯など)に止めを刺すための簡素な造りの、三〇―四〇センチの短刀。
- (166) 七匹の仔山羊の昔話の *im Märchen von den sieben Geißlein* もろへん、DMB四七「七匹の仔山羊」*Die sieben Geißlein*、KHM五「狼と七匹の仔山羊」*Der Wolf und die sieben Geißlein*でお馴染みのあのお話。

## 二二 幸せ者のハンス

- (167) 膝栗毛ひざあしげでなくばく出立した *machte sich auf die Spazierhölzer*。二本の足を使って出発した。*Spazierhölzer*とは直訳すれば「散歩の木木」。すなわち「足」の戯称。
- (168) ヘラー銅貨 *Heller*。ごく小額の貨幣。DMB四四「王の大聖堂」訳注「ヘラー」参照。
- (169) 肉屋 *Metzger*。食肉用鳥獣の畜殺業者兼食肉加工・販売業者。
- (170) 豪儀わうぎな小型腸詰 *Fetzenswürstel*。「グリムドイツ語辞典」によれば *Fetzensgaul*=*großer, starker Gaul*なので、それから類推して *Fetzen*を訳した。自信がない。どなたかご高教を。
- (171) 耕牧地監視人 *Flurschütze*。畑や牧草地の警吏。
- (172) 刃物研ぎ屋 *Schenschleifer*。回転砥石(足踏み式。これだと単独でも両手を使って刃物の刃を回転する分厚い円盤型の砥石に当てることができる)を使って、鋏、包丁、手斧などを研ぐ行商人。このように村村を廻って歩く刃物研ぎ屋や鑄掛け屋はともすると定住者である村民から「流れ者」として胡散臭い目で見られた。漂泊ゾプシの民がこうした稼業を選ぶこともあったからなおさらである。
- (173) 幸せ皮 *Glückshaut*。「幸せ頭巾」*Glückshaube*のこと。生まれた子どもがしばしば頭に被っている羊膜。こういう子どもは生涯幸せだ、という俗信があった。

## 四一 粉挽きと女の水の精

(174) 水車池の堰を auf dem Damme an seinem Mühlreiche. 「水車池の堰」とは「ミュールヴェーア」Mühlwehrとも言い、水車を回すのに必要な水を堰き止め、水車に導く堤防のこと。粉挽きが朝水門を開ければ水車は回り始め、一日中常に一定の水量が供給されて回転を続ける。

(175) 女の水の精 Nixe. ドイツ語圏の民間信仰において、水は浄め、災厄を祓う元素であるばかりでなく、魔物たちの棲処でもある。殊に豊饒の魔物たちの。これらの水の精は生け贄を要求する、と信じられていた。ドイツ語圏の伝説(フランスの伝説でもそうだが)の示すところによれば、本来は水の精に人身御供が捧げられたようである。聖母被昇天祭(八月一日)や洗礼者聖ヨハネの祝日(六月二四日)にそうした儀式が行われた地域があるそうである。もともとDSを見る限りでは、残忍で人肉を喰うのは緑色の冷たいぬるした肌の醜怪な男の水の精であり、その一方、女の水の精は陸に上がって人間の若い男とダンスを踊りたがるなど可憐な行動をするような、裳裾がぐつしより濡れているほかには異様な特徴の無い、おおむね美しく優しい存在なのだが。DMB六一「ツイテリンヒェン」訳注「女の水の精たち」参照。

(176) 「胡桃の小枝」訳註「家に帰り着いて最初に出会うものをよこすと約束」参照。「イエフタの誓い」である。DMB一六

(177) こんなに早くとは思ってもいなかった子どもの誕生 die Geburt seines Kindes, die er nicht so bald erwartet hatte. 早産だったのであれば、粉挽きが水の精にあんな約束をしたのはひどく迂闊だった、と無下に非難できない。が、それにしても、ですよ。

(178) 村の領主が雇い入れた nahm ihn der Herr des Dorfes in seinen Dienst. 十七世紀に至るまでドイツでは狩猟は決して単なる遊びではなく、長期に亘って修得しなければならなかった特殊技術だった。大弓や弩など射出武器を使って、あるいは野猪の場合は猪槍(頑丈な短槍)一本で、銃器が発達してからは猟銃で、獲物を仕留めることに熟練することももちろん、罾猟や網猟の方法、猟犬を使つての獲物の狩り出し方、仕留めた獲物の解体技術に至るまで、一種の隠語である狩猟用語を用いて身に着けたのである。中世、牡角鹿のような見事な猟獣の捕獲は王や土地の領主が多くは極刑をもって領民に禁じていた。所領内に棲息する牡角鹿や猪のような大型鳥獣を狩ることは領主にとって娯楽でもあり義務(畑の食害防禦)でもあったが、塩漬けでない新鮮な肉の補給源として重要だった。小型の猟鳥獣についてもほぼ同様のことが言えよう。熟練した猟師が土地の領主に雇われるのは双方の利益だったわけ。

(179) 女魔法使い Zauberin. ドイツ語圏の民話ではあまり一般的ではない登場形態。「魔女」のように全く邪ではないが、「賢い女」のように人間に親切な存在とは限らない。従って性格付けはその間をふらついている。KHMでは以下の四編のみ。

- KHM 一二「ラプンツェル」Rapunzel、KHM 六九「ヨリンデとモリンゲル」Jorinde und Moringer、KHM 一三四「六人の家来」Die sechs Diener、KHM 一九七「水晶の珠」Die Kristallkugel。前の二編では邪悪とは決めつけられないが、善良だとは言い切れない。あとの二編ではよろしくない性格。
- (180) 糸繰車<sup>いとくろぐるま</sup> Spinnrad。亜麻や羊毛などの繊維に撚りを掛けて糸に紡ぎ上げる装置。片手回し、あるいは足踏み式。DMB 五〇「金髪<sup>きんぱつ</sup>さん」訳注「紡錘」参照。
- (181) 猟師の妻は暮蛙<sup>くれか</sup>に、猟師は蛙に変身した war die Jägerin in eine Kröte und der Jäger in eine Frosch verwandelt。「暮蛙」に当たるドイツ語「クレーテ」Kröte は女性名詞、「蛙」に当たるドイツ語「フロツツェ」Frosch は男性名詞なので、それぞれ自然の性に相応しい両棲類になったわけ。

四七 七匹の仔山羊<sup>しちひつしやうやま</sup>

- (182) 森へ行きたいと思い fort in den Wald wollte。人間の場合、こうした村住まいの庶民の女性が森へ行くのは、家畜の飼料の足しにする木の葉集めのためなどだった。L・リヒターもそう考えて、山羊のお母さんに熊手を持たせ、籠を背負わせている。とつても綺麗な低い声でこう呼ぶの und ruft ganz fein und leise。がらがら声がどうして綺麗な声になったかの説明がない。KHM では「白墨」Kreide、すなわち昔白墨の材料だった白堊<sup>はくわ</sup>(主成分は炭酸カルシウム)を食べることになっている。白堊は声を綺麗にする、という俗信があったのかどうか不明。少なくともHdAには記されていない。
- (184) 煖炉の後ろへ hinter den Ofen。この煖炉、すなわちストーヴは陶板などが貼られていて、置かれた部屋を暖めるものだが、壁に作り付けなのではな<sup>な</sup>。
- (185) ごろた石 Wackelsteine。原注では Wackelsteine, oder Wackersteine, rundliche Basalttrümmer. とある。rundliche Basalttrümmer は「丸い玄武岩の破片」。
- 五一 雪白ちゃん
- (186) 肺臓と肝臓 Lunge und Leber。なぜ「心臓と肝臓」ではないのか分からない。雪白ちゃんの美しさど力が宿っている臓器は「肺臓」よりも「心臓」ではあるまいか。「ルンゲ・ウント・レーバー」とLを重ねて頭韻を踏んでいるので、その点語り手にも聴き手にも滑らかではあるが。

(187) 山小人たち Bergmännlein. ベルクメンライン。山の精 Berggeist の一つ。鉱山の坑道に出没して鉱夫を脅かす、多くは異常

な大きさの山修道士 Bergmönch と同様、本来はやはり坑道で鉱夫たちが出会う超自然的存在。姿は小人 Zwerg に準じる。と言うより、民間信仰における小人から大いに影響を受けている。尖った頭巾を被って、鉱夫のような身なりをした、灰色の衣装の、三指尺(六〇センチほど)の背丈の小さい人たち、と考えればよからう。山修道士のように、鉱夫たちを殺したり、聞き苦しい叫び声を挙げたり、資源の濫費を厳しく罰したり、落盤や出水などの危険をどんどんと叩く音や自身出現することによって鉱夫たちに予告したりする。しかし、小人から一連の好ましい特性をも受け継いでいる。実直だが貧しい、あるいは病気の鉱夫に自ら進んで山の宝を見せてくれたり、魔法の書物をお気に入り授けたり、予言したり、あとで黄金になる木切れを贈ったり、といった具合。随って坑道での彼らの出現は幸運を齎す、と考える地方もある。この物語の小人たちは「ベルクメンライン」より「ツヴェルク」的性格の方がずっと顕著。

(188) 黄金チンキ剤 Goldinktur. 「チンキ剤」というのは生薬や香草類の成分をアルコールで抽出させた液状の薬剤。山小人たちのことだから、活力の源泉ともなる黄金を原料とした霊液を製造する秘術をわきまえていたのだろうか。

## 五二 茨姫

(189) 王妃が沐浴して die Königin badete. ドイツ語 Baden は「湯浴みする」とも「水浴びする」とも訳せるから、これが温水浴か冷水浴かそれだけでは分からない。しかし、受胎を予告する蛙(蝸蚪)のこともある)は当然ながら冷水から出現するわけだし、どうやら水の精的要素もあるので、王妃は冷水浴をした、と考えられよう。となると、ドイツ語圏のような北方地域での習俗とは到底思えない。中近東やインドの、それも暑い地域、季節でのことなら頷ける。この話の源泉を類推する場合の考察にあるいは役立つかも知れない。

(190) 賢い女たち weise Frauen. 「賢い女」とはドイツ語圏で「魔女」の対極にある存在で、人間でありながら(もつともヤークト・グリムは「神と人間の中間」と説明しているし、更に遡れば、神神、すなわち、運命の女神たちということになるが)超自然的力を駆使できる点では後者と同じだが、本来その力は人間の幸せのためにのみ使われる。古代ゲルマン人諸部族の間で族長や戦士たちにさへ指導的役割を果たすことのあった巫女・女予言者(たとえば、ローマの歴史家タキトゥス「actus」は、ゲルマンの一部族ブルクテリー族の女予言者ウエレタ Velleda, Velleda が、紀元六九年バタールウィー族のローマ帝国に対する叛乱を使喚した、と述べている)が後世民衆心理に投影された、と考えてもよからう。従ってこの物語で、邪とまではいえないにしても性格のよろしくない「賢い女」が登場するのはまことに奇妙なのである。その理由は他でもない。この物語がシャ

ルル・ペローの『過ぎし昔の物語あるいはお伽話』ならびに教訓』またの名「鶯鳥おばさんのお伽話」(一六九七) Charles Perrault: *Les Histoires ou Contes du temps passé. Avec Moralitez (=Moralités) / Contes de ma mère l'Oye (=l'Oie)* 所収「眠れる森の美女」La Belle au bois dormantの移入だからで、そのては、おむね人間に親切だが、時には癩癩を起すこともあるフランス語圏の「妖精」(é)がこの役回りを務めている。DMB四二「金髪さん」訳注「月のように輝く女の姿」参照。

(191) Spindel. DMB四二「金髪さん」訳注「紡錘」参照。

(192) 妖精\* Alrune. おそらく古高ドイツ語の「アラルーナ」alarunaで、女性の家の精のことであろう。ただし、現今「アラルウネ」Alraune (女性形)、「アラルウン」Alraun (男性形)という名、名称は「アラルーナ」から派生しているものの、実態はかなり異なる(ただし名称に付随してか、家の精的性格は持っている)。現実には存在する植物である蔓陀羅華(茄科の多年草。学名マンドラゴラ・オフィキナリス Mandragora officinalis。ソラニン系アルカロイドを含み、強毒性)が人間の足に似た根を持ち、奇怪な小人のように見えるところから、さまざまな伝説(その一例はDS八四「アラルウン」に詳しい。また、西暦三七年生まれのユダヤ人歴史家フラヴィウス・ヨセフス著『ユダヤ戦記』第七卷六章三節にもおもしろい記事がある)が附会されて民間信仰の一員となった超自然的形態。

(193) 靴尺\* Schuh. 昔の長さの単位。約三〇センチ。

六一 灰かぶり

(194) てまえの父親と曾祖父 sein Vater und Urgroßvater. なぜ「父親と祖父」でないのか不明。

(195) 義理の姉たち Stiefschwester. 女主人公の父親が、KHM初版および決定版二「灰かぶり」のように、二人の娘を連れ子にしたどこかの寡婦と結婚したとしたら、娘たちは女主人公より年上の可能性があるのでは、こう訳した。冒頭の言葉から、二人の娘は女主人公の父親の実子とも考えられるのだが、結び近くで父親が「小さい灰かぶりっ子がおります」と言うので、女主人公は三人の娘のうち一番年下であっても無理ではない。

(196) 屋根裏部屋 Bodenkammer. 屋根の直下で、天井のない小部屋。夏は暑く、冬はひどく寒い。

(197) 灰かぶり Aschenbrödelchen. 「アッシュエンブレデーデルヒェン」。「ーヒェン」は縮小語尾。「アッシュエンブレデーデル」AschenbrödelはKHM二の「アッシュエンブッテル」Aschenputtelと、いうのは、大きな城や邸宅の厨房でどんじりの下働きとして追い使われたこぞうの通称。灰や煤にまみれて穢らしく、満足に給金など貰えない、たっぷり貰えるのは上の者からあしげや横びんたがせいぜいの哀れな存在だったのである。

(198) 大市(おおいち) Messe. 元来は、教会堂開基祭 Kirchmesse (教会が建立され、キリストや聖母マリア、あるいはいはいずれかの聖人に捧げられた日を祝う祭日)を理由に教会の前で、あるいは近辺で市が開催され、近隣の村落の住人が集まって、物見遊山かたがた、家畜や生活必需品、安価な装身具などの売り買いが行われて賑わったのが「キルヒメッセ」(DMB二〇)「ころころと丸っこい二人の粉挽き」訳注「教会堂開基祭」参照)や「歳(ヤルツェル)の市」Jahmarkt。これがライプツィヒのような交通の要衝では既に十四世紀に大規模で何日も続くものとなる。こうなると「大市」と言つてよい。神聖ローマ帝国皇帝マクシミリアン一世はこの都市に一四九七年および一五〇七年、大幅な開市権および貨物集散権 Stapel- und Niederlagsrechte を付与、大市を帝国大市 Reichsmesse とし、これをもって中部ドイツの金融・物流の中心地とした(これが十九世紀に「ライプツィヒの見本市」Leipziger Mustermesse に発展する)。他にはフランクフルトの大市も有名。この物語の女主人公の父親は商人で、このような大市に商品を選んで行つたのだらう。

(199) 一本の緑の榛(はしご)の若枝 eine grüne Hasenreis. 榛(はしご)ハーゼル Hasel はDMB九「赤帽子ちゃん」訳注「榛」に記したように、樺(かば)の木料榛属(はしご)の落葉低木である西洋榛。高さ五―七メートル。ほぼ全ヨーロッパの森林、叢林、生け垣に広まっており、おそらく「接骨木(わと) Holunder や杜松(ねず) Wacholder と並んで」最も民衆に馴染まれていた灌木であろう。古代ギリシア・ローマの民間信仰においては特に挙げるに足る役割を演じていないが、ゲルマン人の土地では太古から儀式との関連を数多く明らかにしている魔法の樹木である。民話などではこの灌木は榛おばさん Frau Hasel として登場する。こうした擬人化は榛と人間との内的関係を示す。榛がどこにでもあること、開花が早いこと(しばしば既に二月に)、脂肪分豊かな実が食用になること、こうした点で採取経済段階にあった時代には今日より遙かに尊ばれていたことだろう。またそのしなやかな枝は編み細工に使用できる。こうしたこと全てがこの灌木を太古の人人に親しみあるものとしたに違いない。集落の家の防壁となっている榛の生け垣は常に民衆の目の前にある。

(200) 若枝を母親のお墓に植えて pflanze das Reis auf das Grab ihrer Mutter. 「お墓」というのは、墓石ではなく、亡骸が安置された柩を人の背丈ほどの深さに埋めた上にこんもりと土を盛り、土が流れないように芝を張ったいわゆる土饅頭(どまよう)のはず。ただし挿絵は奇妙である。

(201) 扁豆(ひんまめ) Linsen. 「あじまめ」「レンズ豆」。DMB三〇「勇ましい横笛吹き」訳注「扁豆」参照。これは乾燥させてある豆だが、料理する前に虫喰い、変色、小石など不適切なものを選び出す必要があった。今日のように業者が既に一応選別しているわけではないので。選別自体は庶民の女性の日常労働の一つ。ただし、ここではそれが極端で「難題」となっている。民話における難題は、女性の場合家事労働の極端な誇張、男性の場合戸外での労働の極端な誇張がしばしばである。それにしてもこの豆、

なんとも小さい豆(直径四―九ミリ。丸くてレンズなりに「扁平」ではある。一家で食べる普通の量でも女性の選別の苦勞は並大抵ではなかったろうな。

(202) 王 *der König*. 「王子」*der Königssohn* の誤り。

(203) おりますとも、王子様。まだ小さい灰かぶりっ子がおります *Ja, Herr Prinz! Noch ein kleines Aschenbrödelchen.* これまで実子をないがしろにしがちだった父親だが、やっと親らしくなっちゃった。

六六 杜松の木

(204) 杜松の木 *Wacholder*. これは西洋杜松である。KHMでは低地ドイツ語「マヒヤンデルボーム」*Machandelboom* で登場。杜松は学名ユニベルス *Junipers*。檜科 のぼろびん 檜属の常緑針葉樹。五〇―七〇種あり、地球上で最も広く分布する樹木の一つ。北半球の比較的低緯度から中緯度に掛けてありふれた存在。中部ヨーロッパで自然状態で生育するのは「普通の杜松」、すなわちユニベルス・コムニス *Junipers communis* (左図。北ドイツのリューネブルガー・ハイデ) ただ一種のみ。もとよりユニベルス・コムニスは全ヨーロッパ、中央アジア、北アジアにも生育する。



ユニベルス・コムニスは一―五メートルの高さの円柱状。葉は細い尖った針葉。熟す(一―八箇月ほどを要する)と黒青色になる直径六―八ミリの球形の漿果をつける。漿果は生では甘苦く、芳香性の油性成分と糖分を含む。収斂作用がある。ドイツ語圏の庭園、公園、墓地には觀賞用樹木として栽培種が植えられている。杜松の葉を乾した「茶」は消化、排尿を促進し、胸焼けにも効き目がある。リユーマチや痛風の治療にも役立つ。漿果(「キークベール」Kiebbeer、「クロンザイツトビール」Kronwibin)はアルコール飲料製造の重要な原料となる。生の漿果を醗酵させ蒸留した酒がすなわち杜松火酒(銘柄としてはたとえば「シユタインヘーガー」)である。「オランダの「ジュネヴァ」Jenever、英国の「ジン」Ginは穀物やじやがいもを原料としたアルコールに杜松の漿果を加えて蒸留したもの)。乾燥した状態の漿果は薬味として醗酵塩漬け織キャベツやさまざまな肉料理(牛舌料理とか、酢漬け牛肉の焼き物、こつてりした鴉鳥獸料理など)に好んで用いられる。肉や魚を燻製にする際にも重要。また、肉や魚を塩漬けにする汁には搗き潰した漿果が添加される。いずれも漿果の芳香が食品に独特の風味を付けるからである。杜松の木材は板状にして燻煙を作る他の木材に香り付けのため混ぜられる。

(205) マルレーンヒェン Marlennen. 女性の名「マルレーネ」Marlene (マリーア Maria + マクダレーナ Magdalena から)の縮小形。「マルレーネちゃん」。

(206) 酢風味黒吸い物 Schwarzsauer. 低地ドイツ語では「スヴァアットズーアー」Swattsauer。血を材料とする北ドイツ各地方の伝統煮込み料理。名称の由来は、血を大量に使うので完全に黒くなり、酢を利かせた味付けをするので、酸っぱくなるから(古代スパルタの――アテネ人など他の都市国家の市民にとつては――不味なので有名な、そしてスパルタ人にとつては――どうやら――お気に入りだった「黒スープ」もこの類だったらしい)。これは現代の食習慣にはもはやそぐわないので、めつたに作られなくなった。もつとも、ハンブルク、メクレンブルク、シュレスヴィヒ＝ホルシュタインでは、かつて飼ひ豚を潰し解体する日(冬を目前にして一家の一年分の加工食肉を用意する日)にいつも調理された。新鮮な豚の血の処理方法としてはもつてこいだし、ソーセージや生肉料理には向かない屑肉を利用できたからである。以下にシュレスヴィヒ＝ホルシュタイン地方のレシピの一つを掲げる。

材料(ほぼ十人分)。豚の血一・五リッター。豚頸肉(骨無し)一・五キロ。豚脇腹肉(厚皮は取り、肋骨は外しておくが、どちらも肉と一緒に使う)一・五キロ。中からいり大きさの玉葱三個。月桂樹の葉六枚。乾燥杜松の実一〇粒。丁字五粒。蒸留酒 Brantweinessig [訳者注。ワイン酢でもよいか、と思うが。なお、蒸留酒酢にはいくらかアルコール分が含まれている] 〇・二リッター。その一〇%の塩、胡椒、砂糖。

調理。肉は肋骨および厚皮と一緒に鍋に入れ、ひたひたに水を加える。全部を一時間から一時間半とろ火で煮る。煮汁には



スパイスや塩、胡椒は決して入れないこと。煮ている間に玉葱を粗挽ざら挽みにし、ローリエの葉、杜松の実、クローヴ、〇・五リッターの水と一緒に沸騰させ、さらにこの調味液を一時間静かにそのままにしておく。肉が煮熟したら、鍋から取り出し、冷ましておく。冷めたらほぼ一センチ角の賽の目に切る。次に目の細かい濾し器でスープを濾し入れるために別の鍋(ほぼ七・八リッターの容量)を用意する。スープ・レードル一杯の煮汁を濾し器を通してこの鍋に入れ、続いてスープ・レードル一杯の血を、均一に絶えず揺り動かしながら、熱い煮汁に注ぎ入れる。煮汁も血も全部混じり合うまでこれを続ける。血は注意深く加えること。さもないと熱い煮汁の中で凝固してしまっ、とろみがつかない。シュヴァルツウアーの濃度はシチューのようなものでなければならぬ。それゆえむしろどろりとしている方がよい。さて、鍋をレンジに乗せ、注意深く沸騰させる。調味液を濾し器を通してスープに加える。塩、胡椒、酢、砂糖で甘酸っぱく味を付ける。じゃがいもの塩茹でと粗挽き小麦団子を添えて供する。

なお、かつてドイツ領だった東プロイセンでは鶯あまぎすをも素材とした。

(207) 大伯父さん Großohn. 「オーム」=「オハイム」Oheim は母親の兄弟。従って「グロースオーム」は母方の祖父の兄弟。

(208) マルレーニヒェン Marleichen. 唄の中で「マルレーニヒェン」となっている。

(209) 母さんがほくを殺した。／父さんがほくを食べた。／妹のマルレーニヒェンが、／ほくの骨を残らず拾って、／絹の布に包んで、／杜松の木の下に置いた。／キークウィット、キークウィット、／なんて美しい鳥なんだろ、ほくは Meine Mutter, die mich

g'schacht/Mein Vater, der mich ab/Meine Schwester das Marleichen/Sucht alle meine Beenichen/Bind, sie in ein seiden Tuch/Legt's unter den Wacholderbaum/Kiwit, Kiwit/Was für ein schöner Vogel bin ich. K H M 四七の歌詞は次の通り。mein Mutter, der mich schacht/mein Vater, der mich ab/mein Schwester, der Marleichen/sucht alle meine Beenichen/Bind, t sie in ein seiden Tuch/legts unter den Machandelbaum/Kywit, kywit, wat vor'n schön Vogel bin ik! 石の碾きき臼 Mühstein. 中央に穴が開いている丸い円盤状の石。斜めに溝が多数刻まれている。穀物を挽く石の碾き臼の場合、玄武岩、花崗岩、斑岩など極めて堅い石材に溝を刻まなければならない。徒弟たちはこの作業をしていたのである。石臼を僅かな間隔を空けて二枚重ね、片方を回転させると、この間で穀粒が揺り潰つぶされて粉になる。直径は二十世紀初頭の動力式製粉所の場合で七五センチから一五〇センチだった。しかし、二十人の若い衆が同時に手を掛けることのできる大きさとなる。こんなものではないはず。

(211) クラフター Klaffer. D M B 二「シュヴァーベン七人衆の昔話」訳注「六クラフター」参照。

七〇 青髯騎士の昔話あおひげ  
メルヘン

(212) 妻たち die Frauen. 「妻」 die Frau の誤り。

(213) 塔の鋸壁 Turnzine. 「鋸壁」とは守備の兵士が凹所から大弓や弩の矢を放ち、凸所に身を隠せるようになっていている凹凸状の城壁。挿絵参照。

## 結びに一言。

「聖物保管係」(「聖器守」) について、香川県坂出教会司祭土屋和彦尊師に詳細なご教示を賜った。今回も、なのであって、これまでキリスト教関係で門外漢の訳者には事典類をどう調べても見当がつかなかったことどもについてお伺いを立てたことが再三。聖務ご多忙にも関わらずいちいち適確なご指摘を戴き、なんとも忝く、また恐縮の極みである。しかしながら訳注に反映させ得たのはそのご懇篤なご教示のほんの一部の上、訳者の杜撰な誤読もあらうことをここにお断りしておかねばならない。

本稿「試訳(その六)」を以て、「試訳(その一)」「人文学会雑誌」第四〇巻第四号、二〇〇九三月、「試訳(その二)」「人文学会雑誌」第四一巻第一号、二〇〇九七月、「試訳(その三)」「人文学会雑誌」第四一巻第二号、二〇一〇一月発行、「試訳(その四)」「人文学会雑誌」第四一巻第三・四合併号、二〇一〇三月発行、「試訳(その五)」「人文学会雑誌」第四二巻第一号、二〇一〇七月発行)と続いた鈴木満訳・注・解題「ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ昔話集』(一八五七) 試訳」の連載は一応終わる。私事に亘るが、訳者は二〇一〇年三月武蔵大学を定年退任し、四月以降名誉教授の称号を辱くしている。授業や学生指導が無くなるので、三月・四月と試訳にたっぷり時間を掛けられよう、と皮算用をしていたが、さまざまのよしなしごに障えられ、「試訳(その五)」は僅かな分量でしかなかった。本稿の四分の一は「試訳(その五)」に回すべきだったところを、余儀なく併せ発表いたすしだい。

顧みると、訳・注・解題に着手してからざっと二〇箇月もの日子が流れているのに、とりわけ解題に関してはまことに意に満たない。所詮、これでよい、と言えるものではないが、今後能う限り補って、一兩年後には一冊の本として纏めたい、と思う。

前回の結びにも記したが、鈴木満訳・注・解題「ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ昔話集』(一八五七) 試訳」は、西村淳子武蔵大学人文学部教授を代表とする武蔵大学総合研究所プロジェクト「ヨーロッパ人の外国語力格差と日本における多言語多文化教育」の一環となる「昔話ないし語りの言語教育的効果」考察に寄与する研究である。当該プロジェクトにご高配を戴いた関係各位および諸機関、代表としてこのプロジェクトを推進させて来られた敬愛する元同僚西村教授に今一度衷心から御礼申し上げる。